静岡県博物館協会　研究紀要　第36号

静岡県博物館協会　研究紀要　第36号

研究紀要

平成24年度
第36号

静岡県博物館協会

静岡県博物館協会
研究紀要

第36号／平成24年度
表紙／奇石博物館展示室

目　次

2	水族館における海洋生物飼育技術の発展	東京都葛西臨海水族園　園長　西 源二郎
10	静岡県に県立自然史博物館を！	東海大学自然史博物館　柴 正博
18	「自然災害」と博物館	常葉学園大学　教授　日比野 秀男
32	静岡近代美術年表稿　昭和戦前編　3	立花 義彰
54	須田国太郎のセザンヌ論に関する一考察	上原近代美術館　学芸員　齊藤 陽介
	【地域セミナー報告】	
62	石ころクラフト講座　石ころペインティング	奇石博物館　本部長　荻原 美広
64	平成23年度静岡県博物館協会地域セミナー 詩作ワークショップ「ことばを人生の味方に」	大岡信ことば館　学芸員　松﨑 なつひ
72	平成23年度静岡県博物館協会地域セミナー事例報告 アート・ルネッサンス in はままつ「子どもワークショップ」の取り組み	浜松市美術館　学芸員（指導主事）　前田 一成

編集・発行
静岡県博物館協会（事務局）
〒422-8002　静岡市駿河区谷田53-2
静岡県立美術館
電　話・054-263-5857　FAX・054-263-5742

デザイン　タツマキチューン
発行日　2013年（平成25年）3月31日
印刷　文光堂印刷株式会社

水族館における海洋生物飼育技術の発展

東京都葛西臨海水族園　園長　西 源二郎

日本は水族館の密度が世界一の水族館王国で、年間3000万以上の人が水族館を訪れている。日本動物園水族館協会に加盟している水族館の数は現在65館であるが、同協会が法人としてスタートした1965年には33館だったので、約50年の間に倍増したことになる。その水族館の展示水族は、数ミリのウミホタルから、10mを越える大きさになる最大の魚類であるジンベエザメにいたるまで、いまや5千種以上を飼育している。もちろん多様な海洋生物が昔から飼育展示できたわけではなく、色々な問題を解決しながら飼育技術が進歩してきた結果である。ここでは、水族館における飼育技術の発展の概略について報告したい。

1. 1950 ～ 60年代

1）飼育水の処理システム

魚の飼育当たっては、飼育水をくり返し循環させる濾過循環方式が中心となっている。この濾過は、砂などの表面で水中に浮遊しているごみを濾しとる物理的濾過だけでなく、水中に溶解している動物からの排泄物（尿）を砂表面に生息する濾過バクテリアによって生化学的に処理する生物的濾過の2つの機能がある。特に魚類の尿中に含まれるアンモニアは毒性が強く、微量に存在するだけで飼育魚類に大きな影響を与える。この濾過装置の機能や処理能力について、かっては未解明であり、濾過槽の大きさ、循環水量などをどの程度にすればいいのか、についての研究はほとんどなかった。このことは、淡水魚よりも海水魚に飼育において重要であり、上野動物園に海水水族館を建設するにあたり、東京大学農学部の佐伯有常が、上野動物園水族館や江ノ島水族館を対象として循環システムを研究して、「魚介類の循環濾過式飼育法の研究 基礎理論と装置設計基準」として報告した（佐伯、1958）。この中で、魚体重の30倍の砂を濾過槽として使うのが適当であるという基準が示され、飼育水の処理システムが確立された。

2）白点病の克服

水族館における魚類の飼育密度は自然界の生息密度よりも高いことがほとんどで、色々な病気が発生しやすい状況にある。海水魚の飼育が盛んになってきた1960年代には、繊毛虫 *Cryptocaryon irritans*（当時は *Ichthyophthirius marinus* とされていた）の寄生による白点病が甚大な被害を与えていた（岡本・橋本、1959）。全国の水族館を対象に江ノ島水族館が1961年1月に行った調査では、回答した35館中23館で白点病を最も困っている病気に上げており、それに続く眼球突出症の6館を圧倒している（江ノ島水族館、1961）。治療にキニーネ、メチレンブルー、ホルマリン、抗生物質などの薬品を使ったり紫外線を使った治療法が試みられたが十分な効果を上げるまでには至らなかった。

白点病にかかったハタタテダイ

この様な状況の中で、硫酸銅を用いる治療方法が有効であることが報告された（堤ほか、1963）。硫酸銅と有機リン系の駆虫剤ネグホンをともに0.5ppmの濃度で飼育水に溶解させて投与すると4,5日で病原虫が駆除できると報告している。その後、硫酸銅単独でも駆除効果のあることが確認され、白点病の治療に広く使われるようになり、白点病は深刻な被害を与えることが少なくなった。

3）水温コントロール

1960年代は、飼育水を加温あるいは冷却する設備が未発達で、この時期に建設された屋外の大型水槽（オセアナリウム）には加温設備が整備されておらず、冬期には水温低下によって魚類が斃死した。須磨水族館の屋外プールでは、低水温致死限界について観察され、水温10℃から斃死が始まり、6℃ではマダイ、カワハギ、ニザダイなど中部日本の沿岸魚のほとんどが死亡したと報告されている（奥野・西口、1961）。

室内水槽の加温は古くからおこなわれていたが、多大な費用が掛かるためできるだけ低温で飼育する工夫が試みられた。例えば通常15、16℃で飼育していた暖流系魚類のカワハギ、ヘダイなどの飼育水温を10,11℃に落すことが可能になり、これにより経費の節約になったと報告している（岡本・窪田、1961）。

一方、飼育水の冷却は当時ほとんど行われておらず、冷水性動物の越夏及び周年飼育が課題となっていた。タカアシガニは日本の太平洋岸、水深200mあたりに生息する世界最大の節足動物で、当時の水族館では冬期に搬入し初夏（6月中旬）まで飼育するのが一般的であった（平山・塩見・栗尾、1960）。京都大学白浜水族館では1962年4月に飼育水槽に冷却装置を設けてタカアシガニの周年飼育に成功している（荒賀、1963）。4月から10月まで14 ± 1℃で、その後15±1℃で水温を制御し、自然海水の水温が15℃まで降下した12月以降は自然水温において飼育した。4月に5個体で飼育を開始し全てが越夏したが、9月中旬に1個体、11月から1月に各1個体が死亡し、残る1個体が翌年の4月まで生存した。

タカアシガニ

2. 1970 ～ 80年代　表泳性魚類の飼育

沿岸の岩礁やサンゴ礁を遊泳している魚類は、比較的狭い水槽で飼育することが可能であるが、広い外洋の表面近くを泳いでいる表泳性魚類の飼育は困難である。

1）マンボウ

マンボウ

マンボウは特有の体形で人気があり、昔からいろいろな水族館が飼育に挑戦してきた。しかし、小回りが利かない、小形個体が入手できないなどの理由で長生きさせるのが困難であった。宮島水族館で1960年に21日間、油壺マリンパークで1971年に同じく21日間、京都大学白浜水族館で1972年に47日間、同じく1972年に串本海中公園では37日間と言う風に、1カ月余り飼育するのがせいぜいであった。

マンボウは、順調に飼育できている時には水槽の壁面やガラス面を避けて上手に泳いでいるが、調子が悪くなると方向転換がうまくできなくなり壁にぶつかるようになる。身体が大きくて体重もそれなりにあるので、ぶつかると大きなダメージを受ける。そうするとさらに調子が悪くなり、加速度的に悪化して死亡してしまう、と言うことになる。

1970年代の後半に、透明のポリエチレンシートを水槽の内面に張って、飼育する試みがおこなわれるようになった。こうするとマンボウの調子が悪くなって方向転換がうまくできない時でも、壁面やガラス面に直接衝突することは無いので、ダメージを減らすことができる。そのうちマンボウも調子を取り戻し、壁面を避けて、うまく泳ぎ回るようになる。

このような、方法でマンボウの飼育期間は大幅に延長し、1978年には松島水族館で172日、1979年には鴨川シーワー

ルドで1年を超えて426日になり、1年中いつでも水族館でマンボウが見れる状態になった。1985年には松島水族館が1379日と4年近くの飼育に成功した。さらに鴨川シーワールドでは2993日の飼育に成功し、世界記録と言われている。

2）クロマグロ

クロマグロ

マグロ類飼育技術発展の大きな契機となったマグロ類養殖技術開発企業化試験は、1970年から遠洋水産研究所を中心として始まり、東海大学、近畿大学、長崎・三重・静岡各県水産試験場などが参加した。この研究の主目的は海に網生簀を浮かべてマグロ類を飼育する海面養殖であったが、東海大学では同年に開館した東海大学海洋科学博物館の陸上水槽でも飼育試験を行った。

東海大学海洋科学博物館

当初は、マグロ類幼魚の採集方法も確立しておらず、引き縄で釣れた魚を傷つけずに港まで持ち帰る方法を漁師さんに指導したり、自分たちで採集したりしながら幼魚を集めて飼育試験を行っていた（鈴木ほか、1975）。

直径6mのコンクリート水槽でマグロ類だけで飼育することは、比較的容易に行うことができた。しかし、ブリなどがいる展示水槽（600㎥）では、他の魚の影響を受けてうまく摂餌できなかったり、ガラス面に衝突するなどして長期飼育が困難であった。1974年に競合する大形魚を展示水槽から排除して、クロマグロ（0.8kg）の群れ（約50尾）を収容することに成功したが、水槽のガラス面に衝突して死亡する個体が止まらず、その飼育は半年余りで終了した。面積が10m×10mの水槽でクロマグロを周年にわたって飼育することは困難だと判断し、東海大学は飼育展示を断念した。

その間、京急油壺マリンパーク、屋島山上水族館などでも飼育展示が試みられたが、他魚種の影響を受けたり、水槽が狭かったりして長期飼育には至らなかった。その後に建設された沖縄海洋博記念公園水族館や南知多ビーチランドなどでも、マグロ類の飼育がおこなわれたが、他の魚種との混合飼育であったため、長期飼育には至らなかった。

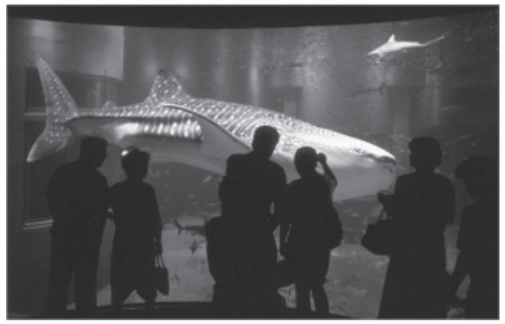
1989年に開館した東京都葛西臨海水族園は、計画段階からクロマグロの飼育を展示の柱として取り組み、2300㎥の専用水槽を建設した。

葛西臨海水族館のマグロ展示水槽

クロマグロの産卵（葛西臨海水族園）

クロマグロ幼魚の収集方法、輸送方法なども十分に検討され、システマチックに挑戦した。その結果、1年をはるかに超え、8年近くの長期飼育に成功し、1999年には水槽内で産卵させることにも成功した。

3）ジンベエザメ



ジンベイザメ（大阪・海遊館）

ジンベエザメは暖かい海にすみ、成長すると12mに達する世界最大の魚類で、水族館では飼育不可能な魚類であった。沖縄海洋博記念公園水族館（現 美ら海水族館の前身）では、開館（1975年）当初から沖縄地方で採集される大形サメ類の飼育に取り組み、大きな成果を上げてきた。1980年には世界で初めてジンベエザメの飼育に挑戦し、同年7月に全長5.1mの個体を10日間にわたって飼育している。翌年の5月に全長3.9mの個体を水槽に収容し、摂餌させることに成功して70日間飼育した。3度目の挑戦を1982年7月に行い、630日の長期飼育に成功している（内田、1982、1986）。

1990年7月に開館した大阪・海遊館は、水深9m容量5400㎥の巨大水槽を有し、開館からジンベエザメの飼育を行った。開館年には入館者が500万人以上となり、ジンベエザメは海遊館の代表的飼育動物となった。5年間の飼育で、4.1mの個体が6.3mまで成長し、1年間の成長が約45cmであることを報告している（北藤・山本、1998）。

1997年に開館したかごしま水族館は、沖縄に次いで南に位置する水族館で、ジンベエザメの生息地に近いこともあって、ジンベエザメの飼育を試みた。

3. 1990年代　飼育水の高度処理

1）巨大水槽の透明度向上

1980年代後半に始まった水族館ブームでは、日本の主要都市に大形水族館が出現した。これらの水族館には巨大な水槽が整備されており、これまでよりも厚い水の層を通して展示生物を観察することになるため、飼育水により高い清澄さが求められた。このような目的で開発されたのがオゾン利用による水処理装置、塩素利用による水処理装置、およびプロテイン・スキマーと呼ぶ泡沫分離装置である。

ｉ）オゾン

オゾン処理装置

オゾンは酸化力の強い気体で、空気中で無声放電して発生させるなどして、反応水槽で海水に溶解させて、脱色、有機物の除去、殺菌などに使われる。水中に残留したオゾンの反応は、淡水と海水では大きく異なり、淡水では数分から数10分のうちに酸素に分解されるので毒性を示すことはない。海水ではそこに溶解している臭素イオン（Br^-）と反応して次亜臭素酸イオンや臭素酸イオンなどになる。これらの物質はオキシダントを構成する物質で毒性が強い。オキシダントによる事故を防ぐため、汚濁物質と反応して消費された後に飼育水中に残ったオゾンは、活性炭に接触させて取り除いている。

オゾン処理装置は1979年に南知多ビーチランドで、取水した飼育用原水の水質改善に使用された。1989年開園の東京都葛西臨海水族園では、マグロ類を展示する2300㎥の回遊水槽で本格的に使用された。その後、1990年開館の大阪・海遊館や既存水族館の大分マリーンパレスでも使用された。

ⅱ）塩素

塩素は強い殺菌力があるので、上水道で病原菌を殺菌するのに広く使われている。塩素の殺菌力が強いのは、細菌の細胞膜を通過して浸透し、細胞内の酵素系を破壊するからでる。塩素を溶解させる方法としては、次亜塩素酸ナトリウムあるいは次亜塩素酸カルシウム（カルキ）などの塩素剤を飼育水に溶解させる方法と、海水を電気分解して塩素を発生させる方法がある。

海水の電気分解による塩素注入装置は、1987年に屋島山上水族館が病気治療を目的として製作されたのが最初である。その後に屋島山上水族館では水質浄化をも含めて使用するようになった。

ⅲ）プロテイン・スキマー（protein skimmer）

プロテインスキマー

水中に浮遊している微小なゴミ（懸濁物質）を、水中の気泡に吸着させて取り除こうという装置である。海水は淡水と比べると粘性があり、気泡を水中で発生させると消滅しにくいので、もっぱら海水水族の飼育に利用される。円筒状のタンクに飼育水を満たし、下部から微細気泡を注入すると、水面に安定気泡が形成されその表面、すなわち気液境界面で泡の粘液による物理的吸着作用、静電気的作用によって水中に懸濁している糞、エサのかけら、剥離粘液、及びこれらに付着しているバクテリアなどを吸着する。水面の安定泡沫は徐々に増加し、上部の排気ダクトから懸濁物質と共に排除される。

欧米の水族館では1960年代後半から使用されてきたが、日本の水族館では、1990年代半ばから使用されるようになった。

この装置は、次に述べるナチュラル・システムにおいても利用されることが多い。

2）サンゴ類などの飼育

ナチュラルシステムによるサンゴの飼育

サンゴ礁は熱帯、亜熱帯の透明清澄な海域に形成される。この地域の水質環境は貧栄養状態で、サンゴ類の飼育は貧栄養な環境でなければ困難である。サンゴ類は単細胞の藻類（褐虫藻）を体内に共生させ、その光合成作用によって栄養を得ている。

魚類の飼育を主目的として開発された従来の濾過システム（砂濾過槽）では、魚類が排泄した毒性の強いアンモニア（NH_3）を毒性がほとんどない硝酸（NO_3）に酸化している。アンモニアは除去されるが、硝酸塩が蓄積して富栄養な水質環境になる。

ⅰ）ナチュラル・システム

自然界では、蓄積した硝酸塩は嫌気性の脱窒細菌による脱窒作用（N2窒素ガスとして放出）や植物による光合成作用によって有機物に合成される。このような自然界における窒素循環を水槽内で構築して、貧栄養な水質環境を保持してサンゴ類の飼育を可能にすることを目指したシステム。このシステムでは、光と水流を強めてサンゴ類に共生する褐虫藻の光合成作用を盛んにすることと、貧酸素の状態になる場所を作り出して脱窒作用を盛んにすることを行う。

照明は太陽光の持つスペクトルに近い光線を出すメタルハライドランプを用いて、光合成に必要な強さを確保する。水流は、水処理設備と展示水槽との間を循環させるポンプだけでは十分ではないので、水流をつくるためのポンプを設置する。

貧酸素の状態をつくるためには、上記のサンゴ類を生育するのに適した水交換の良い状態とは逆に、水の淀んだ条件の場所を設けなければならない。ナチュラル・システムでは水槽底面の砂の層を厚くした砂層の下部と、水槽内に投入した多孔質の石（ライブ・ロック：サンゴ礁にある石灰岩）の深部にこの状態を作り出している。

ナチュラル・システムは、1990年代初めに欧米で開発され、モナコ方式、スミソニアン方式、ベルリン方式などがある。日本では、1993年に江ノ島水族館がモナコ水槽として設置したのが最初である（江ノ島水族館、1994）。

ⅱ）脱窒装置

海水を濾過循環して長く使っていると硝酸が蓄積して、pHが下がるなどの不都合が起きる。水中の硝酸（NO^3）を還元して除去（脱窒）すると、同じ海水をこれまでよりも長期間にわたって使用できるようになる。

脱窒菌は成長するために栄養となる有機物が必要で、ナチュラル・システムでは水中に存在している低濃度の有機物を使って小規模に脱窒を行っていたが、脱窒を大規模にする場合にはこの脱窒菌を働かせるために効果的に栄養を与える必要がある。栄養源としてアルコールのような液体を用いる方法とセルロースや生分解性ポリマーなどの固形物を用いる方法がある。いずれにせよ脱窒作用が効きすぎると硫化水素の発生を招く危険性があり、適当な速度で行われるように制御することが大切である。

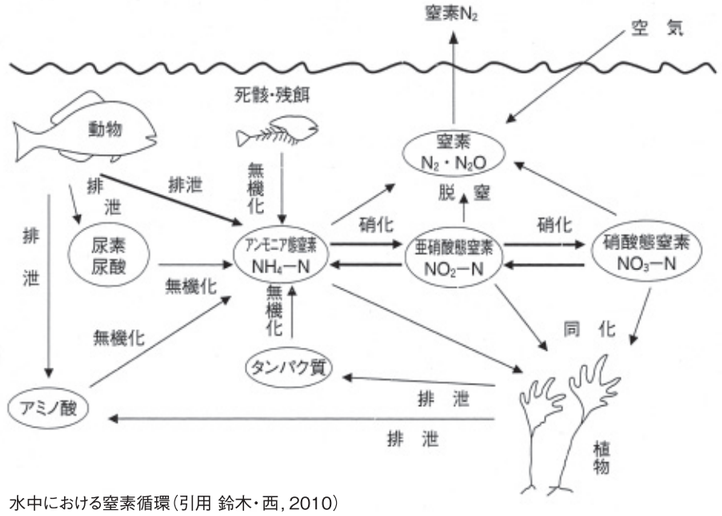
生分解性ポリマーを使った脱窒が2010年ころから、しながわ水族館で試みられるようになった。今後、内陸部に建設される水族館では重要な技術である。

まとめ

戦後、水族館が興隆してから50年余りにおける飼育技術の発展を大まかに記した。水族館は、水生生物を飼育するためにそれなりの装置設備が必要で、装置産業的な一面があるといわれる。科学技術発展の恩恵を水族館の飼育設備に活かしながら、展示生物種類を増加させてきた。これからも、飼育現場の挑戦によって新しい水生生物の展示が可能になってくるだろう。

この原稿は、2011年10月25日に常葉学園大学で開催された、「水族館は楽しい」と言う講演の一部を中心にまとめたものである。この内容は、それに先立ち、2011年8月3日に東海大学海洋学部海洋生物学科主催のシンポジウム「海洋生物が知りたい」（東京大学弥生講堂）の中で、「海洋生物の魅力－水族館における海洋生物飼育の変遷」と題して話したことがベースになっている。

なお、イルカやアシカなど海産哺乳類については飼育の経験がなく、不勉強なため触れなかった。お許しいただきたい。



水中における窒素循環（引用 鈴木・西，2010）

水族館における海洋生物飼育技術の発展

引用文献

荒賀忠一(1963):タカアシガニ *Macrocheira kaempferi* de Haan 周年飼育のこころみ. 動物園水族館雑誌:5(2)63-66.
粟倉輝彦(1959):白点病に対する紫外線灯の効果. 動物園水族館雑誌:1(2)44-46.
粟倉輝彦(1961):低水温下における鹹水性白点病原虫の消長について. 動物園水族館雑誌:3(1・2)1-4.
内田詮三(1982):沖縄の板鰓類と大水槽における飼育. 板鰓類研究連絡会誌:(14)1-8.
内田詮三(1986):「ジンベエザメの墓」と本種の飼育記録について. 板鰓類研究連絡会誌:(22)20-23.
江ノ島水族館(1961):日本の水族館における鹹水性白点病に関する調査. 動物園水族館雑誌:3(4)113-122.
江ノ島水族館(1994):江ノ島水族館資料No.12開館40周年記念. 株式会社江ノ島水族館、東京、274pp.
岡本仁氏・橋本 礒(1959):鹹水性白点病について. 動物園水族館雑誌:1(1)14-17
岡本仁氏・窪田正文(1961):海水魚の低水温による致死限界の数例(循環海水の冬期加温に関連して).
動物園水族館雑誌:3(1・2)14-15.
奥野良之助・西口満佐男(1961):海水魚数種の低温致死限界について. 動物園水族館雑誌:3(4)91-94.
北藤真人・山本 研(1998):海遊館におけるジンベイザメの飼育. 動物園水族館雑誌:39(2)47-54.
佐伯有常(1958):魚介類の循環濾過式飼育法の研究 基礎理論と装置設計基準. 日本水産学会誌:23(11)684-695.
鈴木克美・西 源二郎・塩原美敞(1975):カツオ・マグロ類の採集と輸送. 動物園水族館雑誌:17(1)1-6.
鈴木克美・西 源二郎・塩原美敞(1975):カツオ・マグロ類の水槽内長期間飼育. 動物園水族館雑誌:17(1)7-15.
鈴木克美・西 源二郎(2010):新版水族館学−水族館の発展に期待をこめて. 東海大学出版会、秦野、517.
堤俊夫・村田昭・村田正幸(1963):鹹水性白点病の駆除に関する研究. 動物園水族館雑誌:5(2)35-44.
西 源二郎(2009):クロマグロの飼育に挑む. In 研究する水族館:P.147-161. 猿渡敏郎・西 源二郎編者. 東海大学出版会、秦野.
平山和次・塩見元昌・栗尾鉄男(1960):タカアシガニの飼育例. 動物園水族館雑誌:2(4)102.

静岡県に県立自然史博物館を！

東海大学自然史博物館　柴 正博

豊かな自然はあっても自然史博物館がない静岡県

私たちが住んでいる静岡県は、雄大な富士山や南アルプス、美しい駿河湾や浜名湖、水と緑の伊豆半島など、豊かで多様な自然に恵まれています。このような自然の多様性は、太平洋に面し、深海から平野、そして急峻な山地という変化に富む地形とともに、地史と生物地理の上でちょうど東北日本弧と西南日本弧、伊豆－小笠原弧との境界または接合点に位置しているためでもあります。

このような多様な自然をもつ静岡県ですが、県には現在、県立美術館はあるものの、他に県立の博物館がありません。これは、他の都道府県と比べても異例なことです。

「静岡県は自然が豊かだ」といっても、その自然環境について系統的また総合的な調査はほとんど行われていません。そして、もちろん過去から現在にかけての自然環境に関するデータや標本の蓄積があるわけでもありません。ですから、かつて自然がどれくらい豊かだったか、また現在どれだけ豊かか、または乏しいかということについて、証明する資料を静岡県はほとんど持っていないことになります。

静岡県は自然が豊かな分、そこに住む人々は自然がすでに与えられているものであり、それはあって当然のものと思っているのでしょうか。いや、そうではなく、みなさん自然環境の変化には敏感ですが、それを学習する場や調べて理解する術と人、そのようなことをするための機関、すなわち自然史博物館をもっていないことが大きな原因と思われます。

静岡県の自然環境やその成り立ちに関して、調査・研究して、標本・資料等を収集・保管し、広く県民にそのデータを公開して、自然環境に関して関心を高め、普及と交流をはかり、そしてそのような仕事をする仲間と後継者を増やすために、私はぜひとも静岡県に県立自然史博物館が必要だと考えています。

私自身、「東海大学自然史博物館」という博物館に勤めて、地球や生物の歴史と静岡県の自然を調査して、それらを展示する一方、静岡県内の自然研究グループの方たちに協力していただき、身近な自然についての展示コーナーを博物館に開設し、自然観察会を開催してきました。しかし、私の勤める博物館は静岡県の自然をテーマとして自然史資料の保管や自然史研究の拠点になるという設置目的をもっていないばかりか、担当学芸員が化石（地学）の専門学芸員である私だけという現状です。

静岡県では、県立美術館を建設したあとの昭和61年度から県立博物館整備に向けた検討が行われてきました。当初は自然系と人文系と特定せずに、総合的に調査検討が行われましたが、平成6年度に自然系博物館整備の方向性が示されました。そして、翌平成7年度に策定された「静岡県新世紀創造計画」において自然系博物館整備が主要施策として位置づけられました。しかし、この計画では、主に空港やサッカー場などの整備は進んだものの、自然系博物館については県内標本の所在と評価調査などが行われたにとどまり、自然系博物館の構想委員会さえ開催されませんでした。

本稿では、私がかかわった「静岡県に県立自然史博物館を！」という最近20年間の県立自然史博物館設立推進に関する活動の経緯と現在の状況を記し、それらを顧みて将来の県立自然史博物館設立に向けた提案を行いたいと思います。

静岡県立自然史博物館設立推進協議会の発足とその活動

平成6年（1994年）12月3日の静岡新聞の投稿欄に、「静岡県に県立自然史博物館が必要である！」という文章が掲載されました。投稿したのは、静岡大学を退官された伊藤二郎氏で、氏は寄生虫学の専門家でしたが、私的に静岡植物研究会の会員で広く植物や自然を愛している方でした。当時各地に県立の自然史博物館が建設されたのに感化されて、静岡県にも県立自然史博物館を早期に設立すべき、と訴えました。

この投稿記事を見た日本野鳥の会静岡支部や静岡県地学会、静岡昆虫同好会など静岡県の自然研究グループの方々が伊藤氏のところに集まり、自然系博物館設立推進のためのグループ結成に動きだしました。そして、平成7年2月に設立発起人会結成のための第1回会合が行われ、4月には第1回協力委員会総会を開催し、5月に「県立自然系博物館設立の要望書」を知事に提出しました。

翌平成8年1月には、静岡県内の多くの自然愛好・研究グループに呼びかけ、正式に静岡県立自然系博物館設立推進協議会（略称：自然博推進協）が結成されました。そして、4月に「静岡県立自然系博物館の整備の要望書（その2）」を知事に提出し、5月には第1回の自然博推進協の総会を開催し、当時豊橋市自然史博物館の館長だった糸魚川淳二氏の記念講演が行われました。6月には機関紙である「自然博推進協通信」第1号が発行され、会員で近隣県のいくつかの自然史博物館を視察し、12月には「県立自然系博物館基本構想の早期策定について」を知事に提出しました。

平成11年3月の第4回自然博推進協総会で会の名称の中の「自然系博物館」を「自然史博物館」に改め、4月に「自然史博物館設置についての提案書（静岡県立自然史博物館基本構想第3次案）」を知事に提出しました。

自然博推進協は、日本野鳥の会静岡支部はじめ静岡淡水魚研究会、静岡昆虫同好会、静岡植物研究会、掛川草の友会、静岡県地学会、地学団体研究会静岡支部、静岡自然観察指導員会、富士宮自然観察の会、三島の自然を守る会など約20の静岡県の自然愛好・研究グループが加盟し、約150人の個人会員から構成されていました。会の発足以来、日本全国または外国の自然史博物館や県内の自然関係施設の見学や自然観察会を行い、機関紙である「自然博推進協通信」を発行しました。会員は「静岡県に県立自然史博物館を！」を合言葉に、各団体の枠を超えて相互に交流しながら、活動が行われました。

自然博推進協のメンバーは、自然系博物館の設置を検討している県企画部を何度となく訪れ、担当部課長との懇談やいくつかの要望を伝えていました。しかし、県の財政悪化や「箱もの」建設批判などあり、自然系博物館の設置検討については慎重で、平成9年以降標本評価調査が行われた以外、県による自然系博物館の整備に向けた活動はほとんどありませんでした。

自然博推進協としては、この間ただ要望書を作成していたわけではなく、会員相互の自然史博物館に対する共通認識を高めるために、「私たちの望んでいるこれからの自然史博物館のあり方」についての討論会や各地の博物館の視察会などを行いました。また、静岡県の多くの方に活動や自然史博物館の意義を理解していただくために、平成11年の夏休み中の1週間、静岡市内のビルのフロアーを借りて「ミニ博物館『静岡県の自然』」という展覧会を開催しました。この展覧会は、自然博推進協に参加しているいくつかの研究会や個人が静岡県の自然に関する標本などを持ち寄って開催したものです。

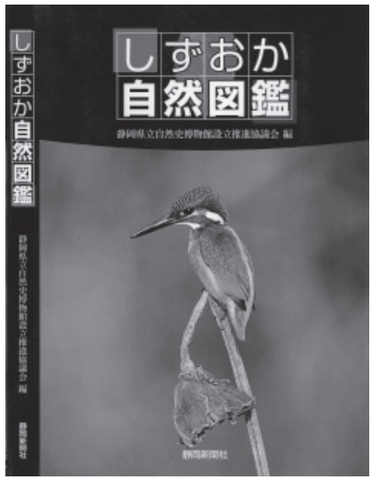
準備には各団体から委員がでて打合せ、解説パネルや解説書なども協力しあって作成しました。展覧会の会場では、蝶のさなぎを展示して、それから孵化した蝶が会場を飛びまわったり、水槽にはヘビや魚がいたり、大きな化石の塊に子どもたちが群がってクリーニングをしていたりと、会場は楽しい雰囲気で満ちていました（第1図）。また、この展覧会期間に、「里山探検隊」や「鳥のねぐら調査隊」、「街中化石発見」など毎日テーマのちがう自然観察会が静岡市内で開催されました（第2図）。

第1図　「ミニ博物館『静岡県の自然』」のようす

第2図　自然博推進協の自然観察会のようす

この展覧会の開催にあたっては、いくつかの企業からの寄付や県企画部の援助などもいただきました。1週間という短い期間でしたが、1000人以上の人が展覧会に訪れました。この展覧会では、自然博推進協に参加する各団体の方々からたくさんの協力をいただきました。それらの方々の多くは、大学などの研究者ではなく、ごく普通の市民ですが静岡県の自然を愛し日常の余暇を利用して研究や学習にいそしんでいる方々でした。この展覧会を開催することにより、自然博推進協に参加している各団体相互のきずなが強くなりました。

「ミニ博物館『静岡県の自然』」では、各参加団体や個人が「静岡県の昆虫」や「静岡県の地質」といった各専門分野の簡単な普及解説書をつくりました。この解説書をもとに、自然博推進協では静岡県の自然について地質から植物、動物まで一般の人が見て静岡県の自然について概要が理解でき、どんな植物や動物が静岡県にいるかすぐにわかるような普及書をつくることになりました。平成13年4月に静岡新聞社から発行された「しずおか自然図鑑」（第3図）は、このような経緯で編集出版されたものです。



第3図　「しずおか自然図鑑」

NPO法人静岡県自然史博物館ネットワークの設立とその活動

静岡県では平成12年度まで、博物館などの「箱もの」による文化・教育事業についてはあまり積極的に取り組まれてきませんでした。しかし、これまでの自然博推進協の強い要望や活動もあってか、平成13年～14年にかけて「自然学習・研究機能検討会」という自然系博物館の設立に関する検討会が開催されました。この検討会では、自然系博物館の機能や必要性に関していろいろと検討が行われ、平成14年10月に最終報告書が県知事に提出されました。その中には、自然学習・研究の拠点施設の必要性とそのあり方、自然系博物館の整備計画について詳細に記されています。

この報告書に掲載された自然系博物館の整備計画の中で、緊急事業として散逸が危惧される標本・資料の収集・整理があげられていました。この事業について、平成15年度から「自然学習資料保存事業」として、仮収蔵施設への標本の収蔵と整理・登録が実際に行われることになりました。県はその頃から県行政のいくつかの事業をNPO法人などとの「協働」という形で実行していくことに積極的でした。自然博推進協は、県との「協働」に参加するために、その組織を発展的に解消し、平成15年3月に静岡大学理学部教授だった池谷仙之氏を理事長として、新たに「NPO法人静岡県自然史博物館ネットワーク（略称：NPO自然博ネット）」として再出発することになりました。

NPO自然博ネットは、これまでの自然博推進協の活動をより積極的に行うとともに、この「自然学習資料保存事業」を県から受託して、平成15年度から仮収蔵施設となった静岡県教育委員会三島分室で事業を開始しました。平成16年度には、県に要望していた浜名湖花博に出展された植物標本の保存事業が実施されることになり、その事業を受託して押し葉標本にして4,510点の標本を作成しました。

自然学習資料保存事業は、平成17年度から静岡市清水区の旧清水保健所の庁舎に移転して継続され、平成20年度からその施設は「静岡県自然学習資料センター」となりました。平成15年度から行われているこの事業も現在10年が経ち、収集された標本数は約30万点におよび、そのうち整理・登録された標本は約8万点になります（第4図、第5図）。

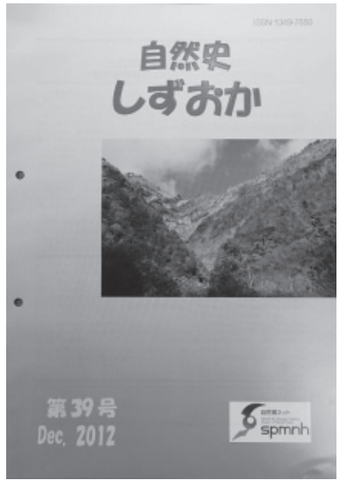
この標本収蔵と登録整理の作業は県からの受託費で行っていますが、受託費は本来かかるだろう人件費の1/3にも及ばず、作業のほとんどはNPO会員のボランティアによるものです（第6図）。

第4図　化石標本の収蔵室

第5図　植物標本の収蔵室

第6図　昆虫標本の整理登録作業

NPO自然博ネットでは、県から受託した資料保存事業以外に、NPO独自で静岡県内の豊かな自然の重要性を多くの県民に楽しみながら学び、理解してもらうために、季節ごとに自然観察会や施設見学、講演会を行っています。また、会報として「自然史しずおか」を年に4回発行し（第7図）、夏休みにはミニ博物館や県自然学習資料の収蔵コレクション展を開催しています（第8図）。



第7図　NPO自然博ネットの会誌「自然史しずおか」

第8図　夏休みの収蔵コレクション展「日本の蝶と自然」の展示

平成19年9月から平成22年3月まで、NPO自然博ネットでは静岡新聞日曜版に「しずおか自然史」のコラムを毎週連載し、それらをまとめて平成22年10月に静岡新聞社から「しずおか自然史」（第9図）として出版しました。また、平成23年度から静岡県の自然史研究の資料や論文を集めた「東海自然誌」という研究報告を毎年出版しています。平成23年11月には、自然史学会連合と共催で「標高差7,000mの自然史－富士山から駿河湾まで」というテーマの講演会を静岡市で開催しました。

第9図　「しずおか自然史」

平成22年度からは、自然学習資料保存事業で収蔵された標本を活用して、積極的に展示物を作成して公開する標本活用事業が始まりました。具体的には、自然学習資料センターでの常設展の設置や特別展の開催、出前博物館や他施設での出展活動などです。これらの活動もボランティアの協力を得て展示物を作成して行っています。

平成22年11月にはNPO自然博ネットの理事長だった池谷仙之氏が逝去され、12月には自然博推進協の代表だった伊藤二郎氏が逝去されました。ふたりとも「県立自然史博物館ができるまでは死ねない！」と設立を切望し推進に努力してこられた方だったので、念願だった県立自然史博物館を見ることなく亡くなられたことは、残念でなりません。

静岡県立自然史博物館の設立に向けて

平成23年2月の県議会で、「自然史資料を活用した新たな活動拠点の整備について」という質問に川勝平太県知事が答弁して、「現在所有しております自然史資料につきましても、収集や保管するだけではなく、県民が直接見たり触れたりすることによって自然の魅力を実感したり、自ら自然について学べるように活用することが重要です。自然史資料を活用した新しい活動拠点につきましては、従前の博物館のように展示機能を主体としたものというよりも、いつでも誰でも、本県の自然についての知的探求心を満たし、そしてまた関心を感知し、それを通して身近に体感することのできる機能を備えた、研究活動、生涯学習などに役立つ拠点となるように検討しているところです。」と述べられ、さらに「活動拠点となる施設につきましては、厳しい財政状況、早期に供用できるのが望ましいということも考慮して、例えばでございますが、再編が予定されている県立静岡南高等学校の校舎なども、既存の公共施設の活用という観点で検討の余地があると存じます。」と、活動拠点について具体的な候補地をあげて、実施に向けての積極的な発言がなされました。

その後、平成24年度の静岡県予算には、静岡南高校の校舎を自然史資料を活用した活動拠点とするための移転改修設計費が計上されて、平成25年度に改修工事を行い、平成26年度に開設することになり、県企画広報部ではこの1年間具体的な設計に関わる問題等が検討されてきました。

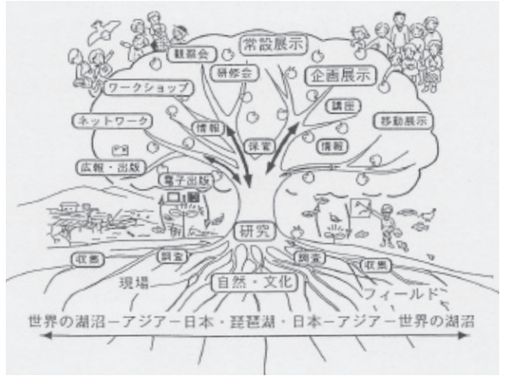
「自然史資料を活用した新しい活動拠点」とは何か、それは自然史博物館ではないのか、という疑問が浮かびます。これに関して県企画広報部は、現状では学芸員を雇用できないために、新しい活動拠点は平成26年度の時点ではあくまでも静岡県自然学習資料センターの移転整備と位置づけ、改修工事では収蔵室の整備が中心となると考えています。ただし、県企画広報部ではこの移転を契機に博物館設置構想に一定の区切りをつけることを念頭に、自然史資料の収集保管、調査研究、展示・情報発信、教育普及の4つの機能を近い将来この新しい拠点施設に備える計画を持っています。

自然史資料の収集保管、調査研究、展示・情報発信、教育普及の4つの機能とは、自然史博物館そのものの機能であり、このことは移転整備を契機に施設改修が2度に分けられるかもしれませんが、自然史博物館としての施設面が整備されることを意味します。しかし、博物館には収蔵室や展示室という施設を備えることも必要ですが、博物館は本来「もの」について収蔵・研究・展示を系統だって継続し、後世に伝える業務を遂行する機関であり、施設そのものではありません。機関とはある目的を達成するために設けた組織や機構であり、施設とは社会生活を営む際に利用する構造物です。すなわち、博物館は機関である以上、博物館を設置するためには上述の4つの目的を達成するために複数の学芸員が働く組織または機構をつくることが必要になります。

平成14年の自然学習・研究機能調査検討会報告では、自然史博物館の二段階整備計画が提案されています。第1段階では、①散逸する危惧のある標本・資料の収集・整理、②スタッフの充実と人的資源の活用、③調査研究・情報集積の推進、④インターネットを使った収蔵標本や調査資料等の公開、⑤プレ博物館活動と県民意識の醸成、⑥第Ⅱ段階の実施計画の策定準備を実施し、そして静岡県の自然に関する標本・資料の蓄積、総合的研究、連携・交流体制の確立、県民意識の醸成等の成果を踏まえて、自然系博物館の施設整備計画を含む第Ⅱ段階の実施計画（博物館活動計画、施設整備・展示計画、管理運営計画等）を策定する準備を行うというものです。また、第Ⅱ段階では自然学習・研究機能の理念やそのときの現状を検討して実施計画を策定するとしています。

この報告書が提出されてから10年、すでに私たちはこの第1段階の、①の散逸する危惧のある標本・資料の収集・整理は自然学習資料の収集保存事業で、④と⑤はその標本活用事業において実施しています。残る、②のスタッフの充実と人的資源の活用と③の調査研究・情報集積の推進を行い、⑥の第2段階の実施計画の策定準備を行う時期にすでにきているのではないでしょうか。そのためには、スタッフの充実、すなわち学芸員を配置して調査研究活動を行い、自然史博物館の整備計画を具体的に始めるべきです。

滋賀県立琵琶湖博物館では、博物館の事業を1本の樹に例えて、「展示や出版などの事業は枝葉や果実にあたり、保管された資料は幹、研究調査は根にあたる」（布谷、1997）としています（第10図）。この博物館は、博物館の施設ができる7年前に博物館基本構想委員会がつくられて、学芸員を1名採用し、それ以後毎年数名の学芸員を採用しながら、準備室の段階から調査研究や特別展、観察会などの博物館活動を展開しました。博物館の機能の核には、「もの」と「学芸員」があり、博物館は「もの」に関して人の集まるCommunityを形成するところです（柴, 2001）。「もの」のない博物館は博物館でないのと同様に、「学芸員」のいない博物館は博物館ではありません。



第10図　滋賀県立琵琶湖博物館の活動イメージ（布谷、1997）

現在行われている自然学習資料保存事業においては、標本数が増加し分野が多様化し、自然博ネットの専門家の高齢化と業務の増加、さらに整理や登録およびデータベース作成に係る専門家が不足していて、標本の収蔵管理にあたる学芸員が必要になっています。また、自然学習資料センターが博物館として社会的に認知されないために、学術的な科学標本としての登録の根拠に欠け、他の博物館との文献交換や標本交換などができにくく、科学研究費や補助金の対象にならないという問題があります。また、すでに収集された標本の整理登録だけが業務であることから、新たな目的での収集調査や研究、それに関わる展示や教育プログラムの作成ができません。

静岡県自然学習資料センターの移転整備の段階では、できるだけ早く博物館のもうひとつの核である「学芸員」を複数配置して、自然学習資料センターをとりあえず自然史博物館にして、博物館活動を展開するべきです。そして、学芸員が中心になって博物館基本構想を策定して、より発展させた組織と施設を備えた静岡県立自然史博物館を早期に設立させることを、強く希望いたします。

静岡県に県立自然史博物館を！

まとめ

本稿では、私がかかわった県立自然史博物館設置推進に関する活動の経緯と現在の状況を記し、将来の県立自然史博物館設置に向けた提案をいたしました。

静岡県は豊かで多様な自然に恵まれているにもかかわらず、自然環境やその成り立ちに関して、標本・資料等を収集・保管し、調査・研究して、広く県民にそのデータを公開して、自然環境に関して関心を高め、普及と交流をはかり、そしてそのような仕事をする仲間と後継者を増やすための県立自然史博物館がありません。

そのため、平成8年5月に静岡県内の多くの自然愛好・研究グループが結集して、静岡県立自然系博物館推進協議会が結成されました。自然博推進協では、「静岡県に県立自然史博物館を！」を合言葉に、県に要望書や提案書を提出し、全国の自然史博物館などの見学や自然観察会を行い、各団体の枠を超えて相互に交流しながら活動が行われました。

平成15年3月には、自然博推進協は発展的に解消し、NPO法人静岡県自然史博物館ネットワークが結成されて、これまでの自然博推進協の活動を継続するとともに、平成15年度から自然学習資料保存事業を県から受託しました。その事業によって、現在までに収集された標本数は約30万点におよび、そのうち整理・登録された標本は約8万点になりました。平成22年度からは、この収蔵された標本を公開する標本活用事業が始まりました。

平成26年度に県立静岡南高等学校の校舎に自然史資料を活用した新しい活動拠点を設置することになり、平成24年度からその設計検討が行われています。その整備の段階では、できるだけ早く博物館の核である学芸員を複数配置して博物館活動を展開して、学芸員が中心になって博物館基本構想を策定して、静岡県立自然史博物館を早期に設立させることを提案いたします。

追記：平成25年1月に、県に静岡県自然学習資料センター整備方針検討委員会が設置され、その委員会で整備方針および活動計画、施設計画、運営計画等が平成25年3月末までに具体的に検討されることになった。

引用文献

布谷 和夫（1997）利用されることで成長発展する博物館をめざして滋賀県立琵琶湖博物館。博物館研究, 32巻2号, 31-35.

柴 正博（2001）Ⅲ 館種別博物館の調査 研究自然史博物館 新版博物館学講座 6, 博物館調査研究法, 91-101, 雄山閣出版.

参考にしていただきたいホームページ

静岡県立自然史博物館設立推進協議会のホームページ
http://www.spmnh.jp/hpnature/

NPO 静岡県自然史博物館ネットワークのホームページ
http://www.spmnh.jp/

自然学習・研究機能調査検討会最終報告書（2002）
http://www.spmnh.jp/hpnature/intro/02kento01.htm

静岡の自然を学ぼう
（静岡県自然学習資料センターで保管する主な資料を紹介しているホームページ）
http://www.pref.shizuoka.jp/kikaku/ki-230/shizen/

「自然災害」と博物館

常葉学園大学　教授　日比野 秀男

はじめに

博物館とくに人文系博物館と「自然災害」との関わりを考えた時、如何にして「自然災害」から博物館を守るか、つまり耐震、耐津波など自然災害から展示物、収蔵品さらには入館者や関係職員をどのように守るかに関心が向く。

また、災害に関わる展示については「災害の歴史的事実をどのように展示するか」ということに関心の的が行くに違いない。しかしながら近年の連続して起きている大規模災害と博物館との関わりを見てゆくと、単に建物の耐震や展示だけでなく災害によって引き起こされる様々な事象にいやおうなく博物館も関わりを持たなくてはならなくなってきていることが知らされる。

簡単な事例を上げれば、阪神淡路大震災の時、個人的には博物館施設が遺体安置所や被災者の避難所になったということが思いもしなかったことであった（注1）。また、新潟地震の後、現地調査の機会があって長岡市、仙台市、神戸市、島原市などの博物館などに伺ったとき、レスキューによって救済された資料が博物館の収蔵庫に大量に保管されていたのを見た。救出された膨大な資料を見て、将来これらの資料がどのようになるのであろうかと素朴な懸念に心が動いた。つまり、博物館の「自然災害対策」は「自然災害」によって引き起こされる様々な出来事に対してどのように対応するか、十分に考慮しておかないと否応なく大変な混乱に陥ってしまうと予想されよう。

平成23年3月11日に起きた東日本大震災でも膨大な資料が救済され保存されていると聞いている（注2）。

災害自体大変なことではあるが、その後、思いもしなかった様々なことが災害に取り巻く問題としてある、あるいは起こりうる事実としてあるということを十分認識しておかなくてはならないであろう。

筆者はここ10年近く「災害から文化財を守る」というテーマで文化財の保存対策について考え、機会あるごとに現地を調査し、展覧会を見、関係者の意見を聞いてきた。それらの活動については静岡県博物館協会、伊豆屋伝八文化振興財団の活動として報告されており、その間、静岡県総合研究機構などから研究費の助成を受けた（注3）。

さらに、「金原明善と災害から郷土を守った先人たち」展（平成24年8月1日（水）－19日（日）グランシップ6階展示室）を担当し、地震、津波、洪水、噴火など様々な自然災害について紹介し、それに関わる人物も紹介した。

平成23年3月11日の東日本大震災以後、展覧会やシンポジウムが各地で開催され否応なく災害に対する関心は高まってきている。

本稿ではごく最近開催された災害関連の展覧会を紹介しつつ博物館にとって災害をどのように考え、どのような準備が必要か整理してみたい。

そうした中で最も喫緊の課題は、他の地域で起きている災害に対して何らかのかかわりを考えておくことが必須の事であろうということである。それは東日本大震災の後、被災博物館や文化財の救済活動に協力できるかどうか、近隣の博物館に問い合わせたところ指定管理によって運営されている博物館から「指定管理を受ける事項に他の博物館や文化財の救済活動をするという事項は入っていないから参加できない」という返事があったという話を聞いた（注4）。どこの博物館ということは聞かなかったが、資料の救済活動や他県の博物館に対しても何らかの支援活動が当然ながらあるということを認識しておかなくてはならない。

災害というものが一つの博物館活動の範囲で考えるのではなく、博物館のポリシーにも大きく関係し、博物館の連携、資料救済ということを意識しないとこれからの博物館活動に大きな支障が生じるということである。

1、災害展示と博物館

平成23年3月11日以降、静岡県内においても災害に関する展示が各地で開催されている。静岡県内の展示については気がつく範囲内で見てきたのでその概要を各展覧会のチラシの文章などから引用しておきたい。

「巨大地震からの警告　安政東海地震と昭和東南海地震－古文書と記録から見る－」

平成22年11月1日（月）～平成23年1月28日（金）

磐田市歴史文書館

この展覧会は東日本大震災が起きる前であったが「古文書と記録から見る」と副題がついている通り「古文書、日記、写真、0図その他」の資料によって近隣で起きた自然災害の展示がなされていた。被害の実態、救恤（きゅうじゅつ）、その後の対策など巨大地震の恐ろしさを紹介し今日警告されている東海大地震の防災上の心がけとなることを目指したものであった。

安政東海地震資料30点、昭和19年東南海地震資料11点により構成されている。文書で紹介するとある通り一般の人にはなじみの少ない資料ではあったが、遠江見付の代官であった林鶴梁（1806－78）の日記も紹介されており、素早い実地調査の様子や救済活動が理解でき、江戸時代であっても情報収集の早さと的確な対応の様子を知ることができた。これは為政者が危機管理能力に卓抜していたことと、指揮命令系統が単一であったことから素早い対応ができたのであろう。

「奥駿河湾を襲った地震・津波－史料に見る安政東海地震－」

平成23年8月2日（火）～ 9月19日（月）

沼津市明治史料館

この展示は東海地震の被害想定のモデル（平成23年8月時点の想定）となっている「安政東海地震」（嘉永7年〈1854〉11月4日）の被害について古文書など先人が残した記録を紹介するというものであるが、手作りの発泡スチロール製の津波想定模型（ジオラマ）によって一層臨場感のあるものとなっている（図1）。展示資料には「小林村変地之図」（『地震之記』所収）、『東海道名所図会』（複製）、地震によって生じた「湖水」（地形図 沼津 明治20年）などによってより視覚的に提示した内容である。

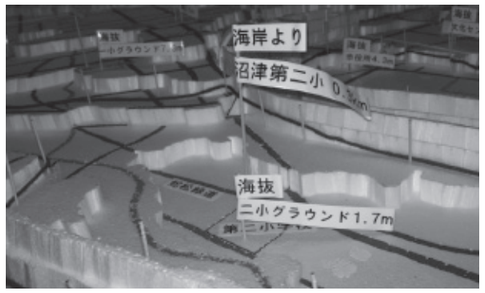


図1. 沼津市明治史料館の展示風景。わかりやすいジオラマ。

展示の圧巻は巨大な地図を立体的に表現した発泡スチロール製のジオラマで現在の沼津市内の様子と津波の到達点とがよく分かる展示であった。見学に来た子どもたちが自分の住んでいるところが津波の時、どのようになるのか大変興味を持って見ていたと聞いたが確かに高さが表現されていることから現実感を持って見ることができるものであった。

「教科書に見る時代（国語・道徳篇）～稲むらの火からのメッセージ～」

平成23年10月5日（水）～ 12月7日（水）

静岡福祉大学附属図書館

この展示は各時代の子供たちに親しまれていた国語・道徳の教科書を紹介し、特集コーナーで64年ぶりに小学校国語教科書に登場した「稲むらの火」について紹介している。

さらに「安政東海地震と静岡県についての資料を紹介する」ものであった。パネルの展示は充実しており、安政大地震の資料なども詳しく紹介されていた。

「今、地震や津波を考える～富士の災害史～」

平成23年10月23日（土）～ 11月27日（日）

富士市立博物館

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、改めて地震や津波といった自然災害の恐ろしさを全国に知らしめることとなった。富士市は宝永の富士山噴火と地震、安政地震、明応の津波等の被害を受けた地域であり、今後も東海地震のような大災害が想定されている。このため、本テーマ展において災害史の展示を企画、開催し、市民の防災意識の向上を促すことを目的とした。

①安政の大地震をはじめとする富士市を襲った巨大地震による被害状況の古絵図や古記録を展示

②中吉原宿に代表される津波や高潮などによる被災状況の記録を紹介

③地震の被害想定や避難所等を図示した地形模型の展示

④ロシア軍艦・ディアナ号の乗員救出の記録をパネルや資料等で展示

⑤東日本大震災の災害状況写真パネルの展示

この展示においても発泡スチロールで津波の様子を図示するジオラマができていたが見やすく、各時代における津波災害の様子を理解しやすくなっていた（図2）。

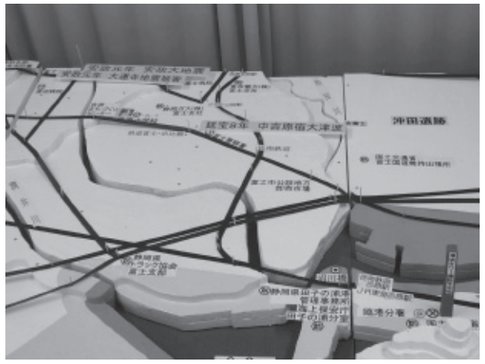


図2. 富士市立博物館の展示風景。場所について明示している。

「安政の大地震と鯰絵－幕末に揺れにゆれた大地震－」

平成23年10月22日（土）～ 11月27日（日）

静岡市文化財資料館

この展示は安政の大地震に関連した資料を展示して市民に地震に関する関心を一層高めようとするものであった。特に駿府城に関する被災の状況などを詳細に展示しており、新しい知見を得るものであった（図3）。

図3. 静岡市文化財資料館チラシ

「浜松の災害史」

平成24年4月14日（土）～ 6月3日（日）

浜松市博物館

「近い将来発生すると考えられる東海大地震を踏まえ、浜松周辺で過去に発生した災害を記録した文書や絵図をご紹介していきます。昔の人々は、被災したときどのようにしていったのか、また現在お住まいの地域がどうなったのか、ご来館された皆様にお考えいただきたいと思います。」（『浜松市博物館だより』Vol.30-4　通巻117号）。

このような開催趣旨によって古文書や絵図によって地震や津波を紹介している。特に浜名湖の災害に関する絵図は貴重な史料である。

「地震・津波展～過去の資料から郷土を襲った地震を学ぶ」

平成24年11月17日（土）～ 12月2日（日）

牧之原市史料館

「東日本大震災による大規模な津波被害や原発事故によって、地震や津波、防災への関心や危惧が高まっています。東海地震の発生が心配される当地域において、過去の資料から郷土を襲った地震や津波の状況を学ぶことは、郷土を知るとともに、防災意識を啓発することにつながります。

各地で開催されたこれらの「地震・津波展」では、江戸時代に起きた宝永地震（約300年前）や安政東海地震（約150年前）を中心に、古文書・絵図・民話などを幅広く収集し、当地域を襲った地震について展示を行いました。また、牧之原市が取り組む様々な防災対策についても紹介しました。

郷土を襲った災害の実態と、それを後世に伝えようと努力した人々の存在を知っていただければ幸いです。」（展覧会配布資料「地震・津波展－過去の資料から郷土を襲った地震を学ぶ－」牧之原市教育委員会史料館担当長谷川倫和）による。

ここでもジオラマによって津波被害の実際が分かりやすく紹介されていた（図4、5）。

図4. 牧之原市史料館チラシ

図5. 牧之原市史料館の展示風景。市民がジオラマを見ている。

ここに見てきたとおりここ1年余りの期間に静岡県内で実に数多くの災害に関連する展覧会が開催されたことが知られる。一般市民はもとより博物館関係者も強い関心を持って開催していることが知られるのである。

博物館関係者にとって最大の関心事は如何にして災害から博物館資料を守るか、そこで地震対策、免震構造などに関心が向く。

これらの展示を見て来て感じられることは単に災害史の展示というだけでなく、市民への防災意識の喚起という側面が強く出て来ていることがうかがわれる。さらに、自分たちが置かれている状況がどんなであるのかということについて、ジオラマによってよりリアルに感じられるように展示が工夫されている。

展示を担当した人々からはもっと展示資料に関心を持ってほしいという希望があったとしても市民の関心事は自分がどのような被害を受けるかということであるに違いない。

2、「金原明善と災害から郷土を守った先人たち－地震・津波・洪水－」展

平成24年8月1日～19日

グランシップ6階

災害を直接テーマとした展示ではないが天竜川の治山・治水や様々な事業を興した金原明善（1832−1923）を紹介する展覧会を企画するにあたって「静岡県の地震・津波・洪水」つまり自然災害と関わりを持った人物を併せて紹介しようという意図を持って構成した（注5）。

これまでの災害を紹介する展覧会では災害という事実をより具体的に貴重な資料を持って紹介しようとする意図が大きかった。この展覧会は自然災害に立ち向かった先人を紹介するとともに災害によって失われた貴重な人命を鎮魂するという意図があった（図6）。

図6、「金原明善と災害から郷土を守った先人たち展」チラシ

展示構成

第1部　静岡県と自然災害－地震・津波・大潮・洪水

静岡県における自然災害に関する時系列と地図として表示することを目指し、年表と地図で作成した。また、具体的な画像として視覚的に訴える効果を目指して、資料写真、史跡などを関連する項目の所に挿入している。

①静岡県の自然災害史年表（図7）

②静岡県自然災害史跡地図（図8）

図7.「静岡県の自然災害史年表」展示風景

図8.「静岡県の自然災害史跡地図」展示風景、手前に磐田市、二之宮遺跡の地震跡発掘レプリカ

第2部　災害に立ち向かった静岡の先人たち

災害史を展示するというよりも災害に関わった人々を顕彰するという目的から人物を紹介するコーナーである。しかしながら自然災害史として知られていてもその災害に関わった人々は無名であることが多く、災害を紹介することと合致していない点が残念である。

現実的には災害に対する準備、防災という点では河川の洪水、氾濫に対して河川改修、堤防工事、瀬替えなどの事業に関わった人物が知られている。これは、防災という事業ではあるが、いわば土木史ということにもなり、別の観点からの考察も必要となろう。また、港や海岸の波除け、堤防工事は大潮、津波除けである。

災害から郷土を守った人物の中では史実として信憑性の点で問題のない人物ばかりとは言えない。特にここでも紹介してはいるが伊奈半左衛門などは静岡県側の小山町と神奈川県相模川周辺の住民とではその評価がずいぶんと違うといわれる。小山町の伊奈神社（図9）には、伊奈半左衛門の銅像も立ち、立派な社が建てられている。既に若林淳之氏が「（前略）『御殿場市史』も指摘しているように、駿府紺屋町の幕府の米蔵を開いたため代官を罷免されたという伝承の、真偽は不明であると言っているように、幕府の被災地復旧政策の展開と伊奈半左衛門忠順、忠逵らのかかわりは、伝承にこだわることなくもっと詳細に検討さるべきであると思われるのである。」（注6）と述べられている通り伊奈半左衛門の活動については史実が知られない。宝永噴火を描いた新田次郎の小説『怒る富士　上・下』（文春文庫）の末尾でも伊奈半左衛門の活躍について疑問視している。

図9. 伊奈神社（静岡県駿東郡小山町）

そうした中で、その活躍が脚色されたにしても各地の人々の災害に対する恐怖あるいは災害からの救済がどんなにかうれしいことであるかが知られることでもあり、何らかの意味を考えなくてはいけないのではなかろうか。こうした観点から「災害に立ち向かった人物」として取り上げたのである。

これまでの災害に関わる展示というものができるだけ事実を証する資料の展示に意がそそがられ、その時代に生きた人物というものに注意が向けられる機会が少なかったということが感じられる。つまり、災害に関わる展示は災害で苦難の時間を過ごすことを余儀なくされた人々を鎮魂、慰霊するという姿勢が必要と思われる。

この鎮魂、慰霊という考えは後述するが、これからの災害遺産、災害資料、災害史跡の活用という点から重視しなくてはならないと考えるからである。つまり「記憶をつなぐ」ということである。

次に、展示の概要を会期中に配布したリーフレットの解説から引用させていただいた。文末には担当した実行委員の名前を明記した。

①金原明善と天竜川の治山・治水

金原明善は、江戸時代の後期に天竜川のすぐ近くの浜松市安間町で生まれた人です。大正12年（1923）に92歳で亡くなるまで、天竜川の堤防を丈夫にして洪水を防ぐことと、上流の山にスギやヒノキを植林して水が一度に流れ出ないようにし、植えた木が大きくなって材木として利用することができるようにしました。このような治山・治水を長く続けていくための資金源として東京で金原銀行を経営した実業家であり、さらに罪を犯した人の更生保護事業を日本で最初に行なった慈善事業家でもあります。（小杉）

②洪水に立ち向かった先人たち

ア、徳川家康と薩摩土手

安倍川は駿府の西側に押しよせるように流れて藁科川と合流しています。別名で“暴れ川”とも呼ばれた安倍川の流れを安定させることが駿府の城下町整備の問題でした。これに対して、徳川家康は賤機山の西側の井宮妙見神社下から中野新田までの約4.4キロメートルに渡り、洪水除けの土手を築かせたと伝えられます。この土手は幅約14メートル、上部は馬がすれ違うことができるように4.5メートルもあります。この工事は薩摩藩が担当したと伝えられ、駿府城下町の建設と並行して、慶長12年（1607）頃から始まったと伝えられます。（椿原）

イ、中村一氏と駿河山

現在は駿河山とも呼ばれる牛尾山と大井川の対岸の相賀山はもともとつながっていましたが、天正18年(1590)に駿府城代となった中村一氏が尾根を切り開いて大井川の流れを東に変えてゆるやかにし、島田宿や志太郡への洪水をなくそうとしたと伝えられます。これを「天正の瀬替え」と呼んでいます。江戸時代後半に掛川藩の領地の地理や歴史などを調査して記した『掛川誌稿』には「此山ノ切割ハ中村氏ノ手ニ成リシ故ニ、其府城ニ移レル年ヲ以テ云伝ヘタルナルヘシ」と、中村一氏が尾根の掘割を行ったと伝えています。(椿原)

ウ、山内一豊と横岡堤

駿河山の掘割については天正の瀬替えとして知られますが、島田市の横岡地区には現在も堤防状の堤(図10)が何本か残っていて、天正の瀬替えと同じように大井川の洪水を防ぐために堤が築かれたと伝えられます。『掛川誌稿』のなかで「大井河堤」として「横岡牛尾山ノ間、長二百三歩、牛尾山ト弁天山ノ間、長六十歩、弁天山ヨリ島境マテ長四百四十歩」と記されているのがこれにあたり、現在は「横岡堤」「質呂堤」と呼ばれる堤と考えられます。山内一豊は天正18年(1590)の小田原攻めの後に、横岡地区を領地とする掛川城主となり、洪水の多かった大井川の堤防の建設を、川向いの駿府城主・中村一氏とともに行ったともいわれています。(椿原)

図10. 山内一豊築堤の伝承のある横岡堤(島田市金谷町)。
大井川の流れを変えて洪水を防いだ。

エ、古郡三代と雁堤

日本三大急流のひとつに数えられる富士川は、その下流に広大な扇状地をつくりました。しかし、ひとたび大雨が降れば大洪水となり、水害を繰り返す暴れ川でした。この富士川の乱流をおさめ、扇状地の加島平野の新田開発に成功したのが、古郡重高・重政・重年の三代の領主たちでした。江戸時代初め、岩本山の麓に雁堤(図11)を築いて川の流れを変えることで、加島五千石といわれる豊かな新田が生まれたのです。(松田)

図11. 古郡三代築堤の雁堤(富士市)。富士市提供図版。
逆「く」の字型に堤防を築いて、洪水から守った。

オ、高潮と吉原宿の移転

吉原宿は、慶長3年(1601)に東海道の宿場として指定されました。ここは、海岸部に近かったため、漂砂や高波の被害にあい、寛永16年(1639)に依田橋村の西方へ移転しました。ところが、ここも延宝8年(1680)に高潮の被害にあって、1軒残らず押し流されたため、再び移転して現在の吉原本町通りに落ち着きました。吉原宿の移転によって、名勝左富士が誕生しました。(松田)

カ、安政東海地震

嘉永7年(1854)11月4日、東海地方の海岸地域を激震と大津波がおそいました。その被害は大きく、沼津藩の小林村では幅約90メートル、長さ約220メートル、深さ約15メートルにわたって土地が崩壊しました。また、下田港に来ていたロシア使節のディアナ号も被災し、修理のために戸田港(沼津市)に向かいましたが、暴風にあって宮島村(富士市)沖で沈没してしまいました。(松田)

キ、伊奈半左衛門と宝永の大噴火

宝永4年(1707)11月23日の昼頃、富士山山頂の南東側5合目付近で大噴火が起こりました。大音響とともに空高く噴煙が噴き上がり、大量の火山礫や火山砂、火山灰が降りました。これらの噴火物は東麓に降り注ぎ、上空の西風にのって江戸市中や房総半島まで飛んでいきました。東麓の村むらでは家や田畑が火山砂で埋まり、作物がとれなくなったり、砂を川に流したため川床が上がり大洪水が起こったりしました。そこで幕府は、治水に功績がある関東郡代の伊奈半左衛門忠順(1672－1711)をつかわして、救済と復興の指揮をとらせました。(松田)

ク、今村伝四郎正長

江戸時代初期の下田奉行。寛永10年(1633)の大暴風で、下田港は大きな被害を受けました。正長は私財を投じて、波除け(防波堤)を下田市の武ヶ浜に築き(1645年8月完成)、風水害から下田を救い、下田発展の基礎を築きました。町民が建てた勤功碑が防波堤の根もとに残っています。また市内にある小学校では今村伝四郎正長の功績を讃えるため校歌として現在も歌われています。(橋本)

ケ、柏木忠俊

韮山代官江川氏の家来から足柄県令となりました。幕末から足柄県令時代にかけ、静岡県の伊豆半島を流れる狩野川の洪水がたびたび発生したことから、柏木忠俊は放水路の建設を考えたといわれ、昭和23年(1948)の狩野川放水路開削運動につながりました。この間、明治40年(1907)、鎮正美(江間村村長)は同志を募って狩野川治水組合を設立し、大正2年(1913)「狩野川治水研究会」発足させ、運動を展開しました。伊豆地域に大規模な被害をもたらした昭和33年(1958)の狩野川台風を経て、狩野川放水路は昭和40年(1965)についに完成します。狩野川放水路完成につながった柏木の思いは、現在も狩野川流域を水害から守っています。(橋本)

ここに引用したのは展覧会で配布されたリーフレットの一部で、人物紹介の視点から述べられている。そうした一方、災害つまり地震、津波、洪水、噴火、土砂崩れなどに関連する資料も紹介している。以下、事項、資料名など混在しているがメモ的に取り上げた主要な事項を列挙しておきたい。

①地震関係

明応地震パネル(焼津市・林叟院跡地石碑)、御殿・二之宮遺跡の地震跡発掘レプリカ(磐田市)、「小林村変地之図」(安政東海地震、『地震之記』・沼津市)、『安政地震瓦版』(藤枝市郷土博物館)、『鯰絵』(安政東海地震)、『萬留帳』(安政東海地震)、『安政見聞誌』、『安政地震見聞録』、

②津波

『浜名湖今切れ絵図』(新居関所史料館蔵)、「元禄地震津波供養塔」(恵鏡院、伊東市)、下田港ディアナ号遭難図パネル(下田市)、吉原宿所替え(左富士関係資料)、波除け堤パネル(今井伝四郎資料、下田市)、藤三払いパネル(稲取)

③洪水

天宝堤パネル(天竜川、浜松市)、彦助堤パネル(天竜川、浜松市)、伝山内一豊堤・中村一氏瀬替え・駿河山パネル(大井川、島田市)、千貫堤(大井川、藤枝市)、三角屋敷・船形屋敷レプリカ(大井川・藤枝市)、駿府古地図(安倍川)、薩摩土手パネル(安倍川、静岡市)、雁堤パネル(富士川、富士市)、「天竜川絵地図」、「狩野川治水絵図」

④噴火

富士山宝永噴火(裾野市)、伊奈神社パネル(伊奈半左衛門顕彰、小山町)、『宝永四年富士山噴火絵図』、『宝永山出現之図』、長坂遺跡出土遺物(御殿場市)、『宝永噴火の記』(土屋家、裾野市教育委員会)、

⑤土砂崩れ

河内の大石パネル(安政東海地震、静岡市清水区河内)

⑥大潮

大野命山・中新田命山パネル(袋井市浅羽町)、波除け堤パネル(今井伝四郎資料、下田市)、藤三払いパネル

展示に関連した事象、資料、遺跡など整理しないまま列挙した。ここまで述べてきたように展示に関してはいくつかの注意点が必要である。

（1）それらの事象が起きた時代

（2）静岡県下のどこに起きたかという地域の問題。

（3）起きた事象は地震、津波、洪水、噴火、土砂崩れ、大潮など、どのような自然災害であるか。これは地震と噴火との関係、地震と津波との関係など単独で起こるのではなく複雑に絡み合っている。

今回の展覧会では金原明善という人物の事跡を主として紹介するということから「第2部　災害に立ち向かった静岡の先人たち」では、静岡県西部から紹介することとした。自然災害に対して日本人が対策を講じたこと、あるいは対策を可能とした自然災害は河川の洪水対策であった。天竜川、大井川、安倍川、富士川、狩野川いずれも数多くの災害をもたらしてきた。堤防、瀬替えなどの事跡は奈良時代の「天宝堤」（図12）をはじめいつの時代においても大工事ではあったが、多くの人々が関わってきていることが知られる。

図12. 天宝堤（浜松市浜北区道本）

自然災害に対して眼に見える形で今日残されている遺構は袋井市浅羽町大野と中新田の「命山」（図13、いずれも静岡県指定文化財として史跡に指定されている）である。延宝8年（1680）、巨大な台風がこの地域を襲い、高潮と重なり入江の奥深くまで高潮が襲い多くの人命が失われたことから避難場所として小高い塚を作り、高潮、大潮のときにはそこに逃げるようにし、今日まで、その塚が残っている。今日その塚に上ると周囲一帯に平坦な土地が広がっていることが見て取れるのである。周囲で小高いところと言えば国道150号線しかないことがよく分かるのである。袋井市では平成24～25年度にかけて平成の命山の建設を計画していると報道されている。

図13. 大野命山（大潮の時、避難した。袋井市浅羽町）

袋井市にとどまらず各地で津波タワーといって津波の時、避難するタワーの建設が進められている。災害対策の遺跡が今日でも有効に生きている証拠である。

このように静岡県における自然災害の概要を紹介し、その災害に対して闘った人物を紹介した展示である。そうして現在における災害予測の情報と災害に対する備えとして何が必要か、紹介するコーナーが「第3部 災害に備える」のコーナーである。また、現在市販されている災害グッズも紹介し市民に一層自然災害に対する関心と備えを促そうと試みた。

3、防災啓発と博物館展示

災害史の展示は当然ながら防災意識の喚起という視点がある。史的事実をできるだけ検証し正確に伝える必要があることは言うまでもないことである。しかしながら今日、これだけ多くの自然災害があまり時間をおかないで発生すると、行政側の最重要課題の一つが災害対策であり、防災に対する市民の意識の啓発が不可欠なものとなっている。すでに紹介したとおり、平成23年以降に静岡県内においても数多くの展示がなされたのは平成23年3月11日の東日本大震災に驚き、行政側あるいは市民の側から自然災害に対して、強い興味と関心が生まれたからである。

防災教育という言葉がある通り災害時においてどのような行動を取るべきかということについても強い関心がもたれてきたことは事実である。「防災訓練」なども随分以前からなされてきている。静岡県内で開催された展示を見て興味を持ったのは、津波被害の実際を発泡スチロールによってジオラマを作り立体的に表現し、津波の高さと私たちが住んでいる土地の高さを具体的に表示する点であった。津波を表現するのは地図で津波にあったところを表示するだけでは不十分である。つまり、展示において住民と住んでいるところの標高を示さないと津波の怖さというものは伝わらないと言えよう。沼津市明治史料館、富士市立博物館、牧之原市史料館の展示等いずれも津波のジオラマ展示が大きな展示スペースを占めていた。子供たちが見て自分が住んでいるところは津波の時どうなるのか、その認識を持つことが大きな教育的効果があると思われるものである。

さて、防災啓発と博物館展示という観点からもう一つの展示を紹介したい。

「記憶をつなぐ－津波災害と文化遺産－」

平成24年9月27日（木）～ 11月27日（火）

国立民族学博物館

同展示のチラシ（図14）には次の通り概要が記されている。

「2011年3月11日に発生した東日本大震災による甚大な被害は、私たちの社会に大きな試練をもたらしました。原発の被害はもとより、地震・津波の傷は深く、「大震災」は現在進行中のできごとです。

地域コミュニティそのものの存続があやぶまれるなかで、被災地では例年以上に祭りや芸能の奉納が活発に行われました。それは、人間の「生」にとっての、有形・無形の文化遺産の価値をあらためて認識させられるできごとでした。

こうした文化遺産の復興の背後には、さまざまな形の支援がありました。私たち国立民族学博物館も、同じ人間文化研究機構に属する国立歴史民俗学博物館、国文学研究資料館などと連携し、復興の支援に関わってきました。

この展示では、文化遺産の復興の作業に目を向け、私たちにとっての文化遺産の意義をあらためて見直すとともに、その文化遺産を通じて、この震災・津波災害の記憶と経緯をいかに未来に継承し、次代の社会を築き上げていくのかを考える契機となればと願っています。

みなさまのご観覧をお待ちしています。」

図14.『記憶をつなぐ』展チラシ
（平成24年9月27日～11月27日、国立民族学博物館。
平成25年1月～3月に国文学研究資料館に巡回）

タイトルに「記憶をつなぐ」とあるとおり、記憶をつなぐためにはどのようにするのか、つながってきた記憶は何があるのか、つなげてゆかなければならない記憶は何なのかなどを基本理念に展示構成をしている。入ってすぐのところには宮城県南三陸町の戸倉神社に伝わる春の神事「春祈祷」に使われる獅子頭が展示されている。そのほか東日本各地で被災されながらも伝承した文化遺産が展示されている。

そのほか、各地の文化遺産のレスキュー活動の様子やレスキューされ修復がなされた文化遺産が展示されている。わたくしが最も興味を感じたのは「記憶の継承」コーナーであった。ここでは、安政南海地震の際、だいじな稲むらに火を放って津波の危険を知らせた浜口梧陵の「稲むらの火」を紹介したり、そのほかの災害の記憶を紹介している。この「記憶の継承」のコーナー解説には次のようなコメントがつけられていた。

> 東北地方に限らず、日本の沿岸部には、各所に地震や津波の記憶を伝える碑や銘板、過去帳などの遺産がのこされている。また、寺社、とくに神社の立地にも、過去の津波や地震の記憶が刻まれていることが多い。今回の津波でも、低地に位置する集落がことごとく津波に流されたなかで、神社だけが残った例が数多く確認される。それには、鎮守の森の存在も大きく関わっている。今回の震災の経緯は、津波碑や寺社が、遠い過去から伝えられてきた防災・減災のランドマークであることに気づかせてくれた。今回の津波の経験を、さらに次の世代にいかに継承し、より安全な社会をいかに築き上げていくのか。それは、私たち一人ひとりに課せられた課題である。

このセクションでは、これまでとこれからの記憶と経験の継承のあり方を考える。

東日本の福島、宮城、岩手、青森県の海岸線に残っている津波関連などの石碑について写真と石碑表裏の銘文などでマップ上に紹介し、さらに紀伊半島の三重、和歌山、大阪の各府県の石碑を紹介している。このマップを見ると海岸線ほとんどくまなく石碑があることが理解できる。

浄土ケ浜パークホテル（岩手県宮古市日立浜町32−4）の傍に存在している「大海嘯記念」石碑は昭和8年（1933）3月3日の昭和三陸津波と言われている津波（大海嘯）の恐ろしさと警告を今に伝えている。上部に「大海嘯記念」とあり、その下には「大地震の後には津浪が来る、大地震があったら高い所へ集まれ、津浪に襲われたら何処でも此の位能高所へ、遠くへ逃げては津浪に追付かる、常に逃げ場を用意して置け、家を建てるなら津浪の来ぬ安全地帯へ」。このような文字が刻まれている。この石碑は東日本大震災の津波によって海中に流され行方不明となっていたが最近発見されて、元あった場所に再設置された。

この石碑に興味を感じたのは筆者が平成18年12月、宮古市と合併した旧田老町の防潮堤と津波の石碑を見ていたからである。図15, 16, 17はその折に撮影した写真である。田老町の石碑（図15）は田老第一小学校のすぐ傍らに所在し、海岸から約700メートルの所である。田老町の津波による被害はこれまで甚大なものが数多くあった。

明治29年6月15日　M7.6　最大波高さ 15m
　死者・行方不明者 1,859人（罹災生存者 36人）
　名称「明治三陸地震」
昭和8年　M8.3　最大波高さ 10m
　死者・行方不明者 911人（罹災生存者1,828人
　名称「昭和三陸地震」

図15. 岩手県宮古市田老町田老第一小学校横にある昭和8年の津波の石碑（平成18年12月撮影）

このような甚大な被害を受けたことから田老町では津波防潮堤の建設については莫大な経費をつぎ込んで建設してきた。これまで大きな防潮堤は3本建設され　①1,350m　②582m　③501m（高さ10m）で工期は昭和9〜53年度にかけてであった。現地を見ると要塞のようなコンクリート壁に囲まれた港を見ることができ、コンクリートの壁面には美術大学生による壁画が描かれていた（図16、17）。

図16. 田老防潮堤。高さ10メートル、総延長は2.4キロ。
右手の網は田老川のサケ漁の網。（平成18年12月撮影）

図17. 田老防潮堤の水門（平成18年12月撮影）

日本一あるいは東洋一といわれた防潮堤が設置されていた田老の海岸であるが今回の津波においても大災害を受けた。田老第一小学校の生徒は学校から高台に避難して無事であった。しかしながら僅かではあったが津波の犠牲にあった親子がいた。それは親が道路が混んでしまうので早く返してくれと引き取りに来て避難した親子であった。石碑の教訓が完全には生かされなかったことに驚いてしまった。

おわりに替えて－「記憶をつなぐ」災害遺産－

すでに述べてきたとおり災害史の展示は災害という史的事実を紹介するだけではなく、防災教育あるいは防災訓練にも匹敵する重要な事項である。免震、耐震、防潮堤などと自然災害に対して力ずくで対抗しようとしてきた結果、必ずしも十全な対応ができなかったのである。田老第一小学校そばの昭和8年、津波被害の記念の石碑は「ここまで逃げて来い」と書いてあった。今回の東日本大震災の津波は田老第一小学校の校庭を被った程度でそれ以上の被害は出なかった。田老第一小学校では学校の指示で待機し高台に避難した小学生は全員無事であったが、家族が引き取りに来て親と一緒に帰った児童が津波の被害に遭ってしまった。先人たちの教訓がかなりの部分において活かされていたことは知られるがまだ不十分なことも知られた。

改めて津波の怖さを伝えた石碑の重要さが思い知らされるのであり、災害遺産というものに改めて認識される。このことが「記憶をつなぐ」展覧会につながったのであろう。

次に災害遺産の全体像を概略示してみることとしたい。この災害遺産は防災教育につながり、自然災害で失われた人々に対する鎮魂でもある。

①有形災害遺産

古文書、絵図、その他の記録

②有形災害遺跡

地震、津波、噴火、洪水などの自然災害の痕跡を示す遺跡

③無形災害遺産

伝承

④記念石碑

自然災害の記念に作られた石碑

博物館における災害史の展示はこれまでは古文書や絵図などの史料に偏りすぎたような気がする。これ以外にも民俗芸能や社寺縁起など多くの有形・無形の災害遺産があるに違いない。これからは災害に関連する様々な資料や遺産を展示に活用するとともに、ジオラマなどにより一層身近に感ずるような展示の工夫が必要となろう。

私自身が災害に関心を持った経緯は文化財の保存という観点からであった。ここ10年ほど機会があるたびに前述したとおり調査、シンポジウムの開催などに関わり報告してきた。この間の活動には静岡県教育委員会、静岡県博物館協会、伊豆屋伝八文化振興財団のご協力を受けた。

そうした中で次々に起きる大規模災害の調査によって、いくつかの課題も出てきた。静岡県においては「静岡県文化財等救済ネットワーク会議」という組織が静岡県教育委員会文化財保護課の主導によって設立され、30団体余が構成団体として参加した。

大規模災害でないにしても多くの文化遺産が失われつつあることは現実としてある。それらの対応はすぐにでも開始しないことにはあらゆる「記憶をつなぐ」という活動は止まってしまうであろう。

いずれにしても博物館にとって「記憶をつなぐ」という活動は大きな使命の一つであることに変わりない。どのような博物館であれ、共通認識として持たなくてはいけないのであろう。

注1.　全国美術館会議『阪神大震災美術館・博物館総合調査報告Ⅰ』(1995年)の中で各館の被災状況について報告があり、被災時における館の罹災者の受け入れについては「美術館運営制度研究部会(東日本大震災支援)議事録」(日時2011年4月10日(日)13:30～16:30　場所　兵庫県立美術館)の中でも美術館に機動隊より遺体安置を要請されたと報告されている。

注2.　日高真吾編『記憶をつなぐ』(平成24年9月27日、財団法人千里文化財団)

注3.　拙稿「博物館園の災害時における対策研究事業について－災害発生時の救済ネットワーク－」(平成16年3月、『静岡県博物館協会研究紀要　第27号』)

拙稿・編「災害対策チェックシートの作成を終えて」(平成17年3月31日、『静岡県博物館協会研究紀要　第28号』)

拙稿「静岡県下における災害から文化財を守る民間活動について」(平成18年9月25日、『博物館研究』日本博物館協会)

拙稿・共著「災害と歴史文化遺産」(平成18年11月、『伊豆屋伝八文化振興財団研究紀要　第1号』伊豆屋伝八文化振興財団)

注4.　「シンポジウム新潟県中越地震から東日本大震災へ－被災歴史資料の保全・活用の新しい方法をさぐる－」(平成24年11月10日(土)13時～17時50分、新潟大学総合教育棟D棟1階大会議室)

注5.　平成24年度輝く静岡の先人展「金原明善と災害から郷土を守った先人たち」

会期　平成24年8月1日(水)～19日(日)

会場　グランシップ6階展示ギャラリー

主催　財団法人静岡県文化財団、静岡県、

実行委員　日比野秀男、小澤邦雄、小杉 達、橋本敬之、松田香代子、椿原靖弘

注6.　若林淳之「自然災害誌の方法－元禄・宝永大地震と宝永噴火の場合－」(『静岡県史研究　第10号』平成6年3月、静岡県)

静岡近代美術年表稿　昭和戦前編　3

静岡近代美術年表稿　昭和戦前編　3

立花 義彰

この年表稿は、『静岡県博物館協会紀要』第34,35号所収『静岡近代美術年表稿　昭和戦前編1,2』の続きで、昭和11年から15年までを対象としている。

この時期に於ける県内美術の主要な動きとしては、静岡県美術協会の展覧会活動がある。静岡県美術協会は、昭和9年に発足し、昭和10年11月に総合公募展として第1回展を開催、今回確認できる範囲では、昭和18年第9回展まで活動している。中川雄太郎「郷土の画人」、『静岡市史』、また過去の拙論が昭和16年第7回までとするは誤り(註1)。稿者杜撰を詫びここに同会の活動を改めて概説する。

静岡県美術協会展の前史を簡単に述べると、古くは明治末の明治43年9月に静岡物産陳列館で第1回展を開催する嶽陽美術展覧会がある(註2)。これは静岡市生れで日本額縁製造業の先駆者長尾建吉・嶽陽(1860−1938)が「静岡県下に美術研究所を設立せんとして」(註3)開催したもので、大正3年1月に同じく静岡物産陳列館で第1回展を開催する尚美会(註4)及び昭和4年に開催される静岡県教育美術展覧会(註5)等の出品者の多くが県内で教育に従事する美術家であったところから、これらが発展解消的に県美術協会として成立されたものと考察できる。

より直接的には昭和8年11月、静岡物産陳列館を改称した静岡商工奨励館を会場として行われた静岡嶽陽美術展なる展覧会がその前身となろう。当時の新聞は、「藤田画伯も傑作を出品する　静岡嶽陽美術創立展」と題し「本県出身画家で中央及び地方に活躍しつつある連中の団体組織は多年の懸案だったが今回漸く機熟して静岡嶽陽美術協会を創立しその第一回として今二十六日から二十九日迄静岡商工奨励館楼上に於いて会員の作品を展観する事となったが本県としては未だ嘗て意義深い企てなので同好者間に甚大な興味を引いているが主なる出品者」は、「藤田嗣治、赤城泰舒、柏木俊一、川合政一郎、山下品蔵、安達賢治、石川欽一郎、茨木猪之吉、一木隩二郎、北蓮蔵、栗原忠二、細井繁誠、小野田之輿、小泉癸巳彦」と報じている(註6)。

静岡県美術協会設立の背景は、帝展改組を睨んで既成美術団体を縦断する県出身者と県内画壇の再編、新人の発掘、旧来の売立的な販売拡大の三つの側面から考察できる。最後の点については、明治、大正を通じて静岡市内に於ける主要な展覧会場であった静岡物産陳列館という施設の性格を反映している。同館は、市産品の販路拡大が主な目的であり、その為の貸会場としての存在意義を示していた。同館を昭和6年に改組した静岡商工奨励館(註7)には、当時彫刻家太田重範が勤務しており、行政側の意向も受けながら同会の設立事務に関わったものと想像される。

美術雑誌『アトリエ』11巻12号、昭和9年12月には、「静岡美術協会創立。創立仮事務所は静岡市追手町商工奨励館内。毎年1回静岡に於ける展覧会及び巡回展開催その他講演会及び講習会を開く。第一回展は静岡公会堂の竣工を期して開催。」(註8)とある。また地元はより詳細に次のように報じた。「静岡県美術協会　けふ創立発会式挙行。本県出身の全美術家を打って一丸とする静岡県美術協会創立に就ては予て地元美術家連中の発起で静岡商工奨励館内に事務局を置き八方奔走中のところ愈よ大方の賛助を得て今十八日午後一時より静岡商工会議所に創立発会式を挙げ当日は特に東京美術学校長和田英作画伯も臨席し一場の講演を為す筈で同会総裁には田中知事、会長には尾崎前上院議員以下それぞれ役員を推薦するが、静岡市公会堂の新築落成と共に第一回展覧会を開催すべく創立早々着々準備を進める」(註9)と。

発足した静岡県美術協会は翌昭和10年4月23日、県教育会館にて展覧会に関する第1回幹事会を行った。同日は東京より会員長尾一平(1886−1978)が来静、具体的方針を決定した　長尾一平は、前述長尾嶽陽の子で、尚美会、嶽陽展にも関わっており、東京と静岡とに二極化した同会組織の東京側の実質的な代表者で、東京静岡県人会誌『駿遠豆』に拠る清水柳太と共に東京側組織を主導した。

会長に推された尾崎元次郎(1870−1945)が、市政混乱収拾の為昭和10年10月12日市長に就任した事は、会運営を複雑化させた。この会の活動は、県都でもある静岡市の政治経済動向、更には尾崎個人の美術愛好家としての趣味嗜好や性格からも影響を受ける事となった。尾崎は、静岡市の生れ。静岡中学卒業後軍人となり、日清日露の戦役に出征、大尉で除隊後は製茶会社社長、商工会議所会頭等実業界で活躍する他、衆議院議員を務め、又書画骨董の愛好家として知られていた。(註10)。実は同15日の初登庁で、帝展特選の彫刻家中島東洋の裸体彫像の撤去を命じ早速物議を醸している(註11)。

同年11月3日落成した静岡市公会堂を会場として11月20日から24日、静岡県美術協会展覧会の第1回展は開催された。審査員は、中村岳陵、石川欽一郎、澤田政廣、芹澤銍介他。(註12)なお副会長に推された石川欽一郎は、この時初めて自らの生れた土地を訪れた。

ここまで述べてきた静岡県美術協会とは、最も簡単に概要を説明すれば次のようになる。「地方美術の向上を図る目的を以て昭和九年十一月静岡県出身ならびに在住美術家を以て組織す。年1回静岡市に於て日、洋、彫、工の四部に亘る総合公募展を開催する。総裁静岡県知事阿部嘉七　会長尾崎元次郎」(註13)と。

しかしながら、その当初から審査への地元会員や静岡商工奨励館館長の関与、各分野持ち回り受賞の慣例化等が、隠す様子もなく恒常化していく有様を、新聞から窺い知る事ができる。

昭和12年の日中戦争の勃発を受け、静岡では予定の第3回展を延期し、同年9月23日より30日まで静岡商工奨励館を会場とする静岡県美術協会主催恤兵美術展を行った。チャリティーと戦意高揚を謳いながらも、大正期否明治期に物産陳列館を会場とした嘗ての売立画会の有様にも似た活動への退行を垣間見せている。なお、同展はその後協会展の回数に編入し、第5回展を第6回展として開催するので、複雑な話だが最終的な展覧回次は9回となる(註14)。

昭和15年5月16日より20日まで、静岡県美術協会は第5回改め6回展とする展覧会を静岡商工奨励館・教育会館にて開催。二千六百年奉祝記念展と銘打って行われ、「静岡大火被災者、白衣勇士の慰安等を兼ねて、会員及び招待作品を陳列」(註15)戦地慰問の特別陳列を併せ行うもので、陳列総数186点、在京会員45点、地元会員他が186点であった。展覧会委員長は土佐光一、副委員長松岡寿、長尾一平とした(註16)。

同年7月19日には長尾嶽陽翁彰徳碑建碑式が玄忠寺にて行われる。同日を初日として21日まで、長尾嶽陽翁彰徳碑落成記念展覧会なる展覧が静岡商工奨励館で行われた。それについては「長尾健吉翁の頌徳碑建碑式　同時にきょうから嶽陽記念美術展：静岡県美術協会及び東都大家並に美術工芸団体では、静岡の生んだ日本美術工芸会の恩人嶽陽長尾建吉翁を記念するためその出生地たる静岡市に嶽陽美術館建設の運動を興し地方文化に寄与せんと、着々実現に当っているが、之に先立って県美術家協会主催のもと十九日午後四時から静岡市大鋸町の玄忠寺で挙行する。尚同時に十九日から三日間商工奨励館に嶽陽翁遺作遺文並に翁に送られた大家作品を集めて嶽陽記念美術展を開催する事となった。」(註17)と報じられた。

発足当初の静岡県美術協会は会員展を構想の主としていた節があったが、その後の会組織の構成や運営には一貫性が無く、買上実績の不足つまりは収入不足、支援者不足から計画は企画倒れに終り翼賛体制の中で消えていった。近代的な展覧会制度を標榜し伝統的な書画類を表向き排除しながらも、静岡側の書画工芸優遇の意思は、人間関係の軋轢と共に、在京を中心とする作家達の離反を招き、逆に在京の洋画家達主体の美術館建設運動は保守的で零細な静岡市内産業界との間に決定的な齟齬を来たすに至ったのではなかろうか。しかしながらそれも今は全て推定の域を出ない。経過不明にして不明朗、そして分裂の中、嶽陽自宅を記念室乃至事務局、研究所として使いたいというささやかな発想も、総予算11万3570円、敷地面積200坪、地上2階地下1階建の記念館建設(註18)も実現されなかった。それはあまりにも「静岡」らしいと言えば言える展開であったが、それゆえに戦後、活動を再開した作家達、県展・県民会館・美術館建設等に関わる事となる行政関係者達、美術愛好家達それぞれに与えた影響については、考察されるべき今日的意義を失っていない。

静岡近代美術年表稿　昭和戦前編　3

注

1　中川雄太郎「郷土の画人」、『静岡市史』、拙論「昭和14・15年の美術館建設計画について」『アマリリス』25号 静岡県立美術館 平成4年(1992)等。
2　『静岡民友新聞』明治43年9月13,15,17,18,20日
3　『美術新報』明治43年7月1日
4　『静岡民友新聞』大正3年1月13日,
『静岡新報』同14日
5　「静岡県美術教育の沿革」『松岡圭三郎画集』静岡教育出版会 昭和45年刊ではこれを県美術協会展の前身とする。
6　『読売新聞』静岡版昭和8年11月26日
7　『静岡新報』大正10年8月25日,
『静岡民友新聞』同9月12日,大正11年3月8日、昭和5年6月30日,昭和6年2月18日
8　『アトリエ 11-12 』昭和9年12月　術界消息欄
9　『読売新聞』静岡版昭和8年11月26日
10　『静岡大百科事典』昭和53年129頁
11　「裸女像はお嫌ひ　尾崎さん初登庁」『東京日日新聞』静岡版　昭和10年10月15日
12　第1回展については、『静岡民友新聞』11月20,21,22,25日,『静岡新報』11月20,22,23日、『東京日日新聞』静岡版 11月21,22,23,24日,同遠州版11月20,21,23,24日,『読売新聞』静岡版11月14,21,23日,『読売新聞』遠州版11月14日の記事、及び出品目録。
13　『日本美術年鑑』　昭和11年版
14　「第六回展名称の件」『静岡県美術協会会報』第6号 昭和15年
15　『日本美術年鑑』昭和16年版、『静岡新報』5月21日,
『静岡民友新聞』5月19,21日、
『東京日日新聞』静岡1,2,3版5月16日、及び目録。
16　『駿遠豆』第15巻 7月号　昭和15年10頁
17　『静岡新報』7月19日,『静岡民友新聞』7月19日
『駿遠豆』第15巻 9月号　昭和15年18～23,15頁及び目録。読む者を困惑させるのは、前年に美術館としての草稿を任された筈の新聞人萩田長太郎が、美文調で特産指導会館と地場産業を論じている事である。
18　「美術館建設事業と経過報告」『静岡県美術協会会報』第6号　昭和15年

年表稿凡例

民友	『静岡民友新聞』
新報	『静岡新報』
静岡	『静岡新聞』
浜松	『浜松新聞』
東日	『東京日日新聞』
読売	『読売新聞』(地方版)
朝日	『朝日新聞』(地方版)
熱海	『熱海新聞』
駿遠豆	『駿遠豆』
美術年鑑	『日本美術年鑑』
出品目録	『昭和期美術展覧会目録』『大正期美術展覧会目録』『近代日本アートカタログコレクション』所収及び出品目録類原本等。
市　井	『市井展の全貌』
目　録	中川雄太郎所蔵資料コピー
案　内	中川雄太郎所蔵資料コピー
規　則	中川雄太郎所蔵資料コピー
計画書	中川雄太郎所蔵資料コピー

S./　　昭和　年　月　日
《》*　　作品名（太字は図版掲載,*は掲載紙）

他『アトリエ』『工芸』『中央美術』『塔影』『美術新論』『美之国』『みづゑ』は誌名を表記。

昭和11年 1936

1/　現代日本版画展覧会於ニューヨーク他。小川龍彦《北伊豆の秋》栗山茂《**静物**》選ばれる。(駿遠豆11-2,東日遠州版12/1*)
1/10　第1回青松会展於東京上野松坂屋(-15)。中村岳陵《**こいぬ**》(美術年鑑S12)
1/12　第13回白日会展於東京府美術館(-26)。望月清一《鉄橋の見える風景》(民友1/21、出品目録)
1/16　春陽会会友原田和周[聚文]逝去。享年42。(新報1/19,民友1/20,美術年鑑S.12,みづゑno.373,アトリエ13-5,美術11-5 美之国12-5)
1/17　第5回六潮会展於東京日本橋三越(-22)。中村岳陵《**双鶴**》(塔影12-3,美之国12-2,アトリエ13-2,美術11-3)
1/　ポール・ジャックレー展於松坂屋(-26)。(民友1/25,31.2/1,2,3)
1/24　第1回国画会小品展於東京上野松坂屋(-30)。柏木俊一他。(美術年鑑S12)
1/25　第23回日本水彩画会展於東京府美術館(-2/11)。滝澤清、3点入選。(新報2/1,民友2/3)石川欽一郎《**伊吹薄雪**》**《春峭》赤城泰舒《**ギター**》*山道栄助《**ガク**》*((みづゑno.373*,美之国12-3**)
1/28　静岡文化倶楽部年賀状展於田中屋(-31)。(民友1/29)
1/31　第4回旺玄会展於東京府美術館(-2/10)。小林猶次郎《水車》《**田**》(美之国12-3,民友2/10)
・　小泉癸巳男《日光風景版画》頒布会。(みづゑno.372)
2/1　第32回太平洋画会展於東京府美術館(-16)。澤田政廣《比沙門天》杉本宗一《裸婦》鈴木満《春》《恵美ちゃん》《寓話によるコンポジション》石井柏亭《**安倍川の富士**》(みづゑno.373,出品目録)
2/10　県下女子高等校生徒図と画作品展於田中屋(-16)。(民友1/10,11,12,13,14,15,16,,31,2/10)
2/19　静岡緑匠会手工芸品と手工図案制作展於田中屋(-21)。(民友2/17)
2/25　改組第1回帝展於東京府美術館(-3/25)。杉本宗一、鈴木至郎、湯山青崖入選。(読売静岡版2/19,20,遠州版2/20)中村岳陵《**豊幡雲**》*杉本宗一《**水牛**》**稲木春千里《**木製筥**》*鈴木至郎《黒髪壁掛》二橋美衡《黒味銅角切瑞鳥文手筥》湯山青崖《磁器孔雀釉宝珠文花瓶》(美術年鑑S12*,中央美術復興no.32,塔影12-4,美之国12-4,アトリエ13-4,駿遠豆10-3**,出品目録)
2/　ノビートリス・ブルーマー夫人、金谷町に32点の児童画寄贈。(民友2/16,読売遠州版2/16)
2/　吉野不二太郎《厨房静物》第3回東光会展入選。(民友5/11)
2/28　東都洋画展於田中屋(-3/2)。金田麻之輔主催。(新報2/29,民友3/2)
3/10　六鳳書院創立15周年・書道雑誌「書」創刊3周年記念書道展於田中屋(-15)。(新報3/9,15)
3/12　石川欽一郎・三宅克己水彩画展於日動画廊(-17)。石川欽一郎作品44点出品。(美術年鑑S12,同展目録、みづゑno.374、中央美術no.33,朝日3/17)
3/21　日本風景協会員17名、伊豆長岡温泉に宿泊。(新報3/13)
3/21　東海四県工芸試作品展覧会於静岡商工奨励館(-27)。(東日静岡版3/20)
3/25　今川氏輝公四百年記念展於松坂屋(-31)。(民友2/10,3/20)
3/25　第4回一軌会展於東京神田東京堂(-28)。榛葉嘉一郎《三等待合室》(みづゑno.375)
3/25　児島善三郎個展於東京数寄屋橋日動画廊(-30)。《**伊豆の海**》(みづゑno.375,朝日3/27)
・　金田麻之輔、静岡に住む。(民友4/20)
・　清水柳太近況(駿遠豆11-5)
・　《金澤光清校長胸像》於中泉高女。(新報S10.10/6)
4/1　第1回銀座美術家協会展於東京銀座(-10)。小林猷治郎《**ギンザマン**》(駿遠豆11-4,5)
4/3　第11回国画会展於東京府美術館(-18)。増田匡彦入選。(民友4/6,新報4/2)栗山茂、国画奨学賞受賞。(民友4/15)水口昇、初入選。(読売遠州版4/3)東克己《教会堂デッサン》《大森めぐみ幼稚園》《夜の花屋》柏木俊一(会員)《**山村**》《富士》《静浦》《メロン》《**修善寺の富士**》*渋川駿二《窓外風景》《緑色花瓶に椿》《薄暮》《夕日》菅原霞仙《田園風景》杉本英一《風景》鈴木長久《アキワ風景》増田匡彦

《春日》松本保一《赤土の道》水口昇《十国峠》山村誠（会友）《鴉、鴎》《窓外夕》《江ノ浦》《湖北》《山小品》小川龍彦《明星山》栗山茂《**駿府城址**》**《日本平風景Ａ》《日本平風景Ｂ》中川雄太郎《海岸》《画架にもたれる女》芹澤銈介《染色屏風紙漉》他９点。
梅原龍三郎《**江ノ浦**》*（美術年鑑 S12*, みづゑ no.374,375**, アトリエ13-5, 美之国12-5, 出品目録）

4/3　第14回春陽会展於東京府美術館（-20）。
曽根靖雅《白鷺城の門》《天守への道》入選。
（民友4/6, 13, 新報4/14）
小栗哲郎（会友）《甲斐岩間》《安倍川》《**月見連山**》*《山の宿》栗田雄（会友）《**秋川**》《**磯**》** 曽根靖雅《天守への道》原田和周（会友）遺作展示《沼》《仁王山》《戸隠山》《雪》《南山を眺る》《浜名湖》《肥後南の関》《戸隠山牧場》《京城の冬》《野尻湖》中川一政《**富士川**》*《富士川べり》（美術年鑑 S12*, 駿遠豆15-12**, アトリエ13-5, 美術新論11-5, 6, 美之国12-5, 出品目録）

4/6　第3回現代十大家洋画展於東京銀座資生堂(-10)。
梅原龍三郎《**静浦風景**》*（美術年鑑 S12）

4/8　現代大家新作画展於東京日本橋日美倶楽部(-10)。
中村岳陵《千鳥》（市井, 塔影12-5）

4/10　与謝野鉄幹遺墨展於松坂屋（-12）。（民友4/11）

4/11　下落合町会洋画展於東京銀座三昧堂（-17）。
曽宮一念他。（美術年鑑 S.12）

4/　麦青社第1回洋画展覧会。（新報4/19）

4/24　第23回光風会展於東京府美術館（-5/10）。
石川欽一郎（会員）《比良山嵐の湖上》《郊外春景》清水柳太《清洲橋》大野隆徳《**修善寺温泉**》（（みづゑ no.375, 同会作品集）

4/25　静岡民芸研究会壷と皿の展覧会於県教育会館（-26）。（新報4/24）

4/25　第6回独立展於東京府美術館（-5/14）。
曽宮一念《**冬の海(仁科)**》*《冬の海（波太）》山道栄助《カキ》（（美術年鑑 S12*, アトリエ13-6, 美術新論11-5, 美之国12-6, みづゑ no.376, 出品目録）

4/28　芹澤銈介・山本正雄作品展覧会於松坂屋（-30）。
（民友4/25, 新報4/26）

4/　米原雲海《ジェンナー像》浜松元城小学校で発見される。（東日遠州版4/28）

・　小林猷治郎、小石川区駕籠町158へ転居。
（みづゑ no.375）

5/1　黄陽社展覧会第7回展於田中屋（-5）。
（目録, 民友5/4, 新報5/4）

5/3　第5回日本版画協会展於東京府美術館（-14）。
小川龍彦《鏡》栗山茂《鯨ケ池》《三河鳳来寺山》《茄子図》《大崩海岸》小泉癸巳男（会員）《鈴ケ森》《初秋の絵画館》《吹雪する桜田門》《練馬風景》《残雪の東京市役所》《春雨の平川門》《日光風景（1）》《日光風景（2）》中川雄太郎《街角》《女》（出品目録）
栗山茂、日本版画協会賞受賞。

5/8　小林三男個展於浜松今井屋（-12）。
（東日遠州版5/10, 民友5/18）

5/14　井上恒也個人展於松坂屋（-17）。（民友5/14, 新報5/14, 塔影12-6, 美術年鑑 S.12）

5/15　江尻九穂古陶画茶掛展於田中屋（-17）。
（民友5/9, 新報5/9）

5/15　六染会第2回展於松坂屋（-17）。
（民友5/12, 新報5/12）

5/15　芹澤銈介、外村吉之介、柳悦孝新作展於東京銀座たくみ工芸店（-19）。（美術年鑑 S12）

5/20　上村東山（順太郎）蒐集浮世絵版画、葵文庫に寄贈される。（民友5/23, 新報5/25）

5/21　第4回日本木彫会展於東京府美術館（-30）。澤田政廣《**光明仏身**》（美術年鑑 S12）

5/23　石川欽一郎・三宅克己水彩画展於東京渋谷東横（-31）。（美術年鑑 S12, 中央美術 no.33）

5/30　《細田多次郎胸像》除幕式於中泉農学校。
（新報5/28, 読売遠州版5/28）

5/31　田代二見個展於教育会館（-6/2）。（民友6/1, 7/6）

6/1　三越新作小品展於東京日本橋三越（-5）。中村岳陵《蒲公英》（市井）

6/5　黒耀会展覧会第8回展於田中屋（-7）。
（目録, 民友6/6, 7, 8, 新報6/7, 東日静岡版6/6）

6/6　近藤浩一路日本画展於東京日本橋白木屋（-12）。
（美術年鑑 S.12）

6/8　佐藤房子個人展於田中屋（-10）。
（民友6/8, 9, 新報6/8, 9, 読売静岡版6/9）

6/9　静岡某家秘蔵書画売立会於静岡市公会堂（-10）。
（民友6/9）

6/10　第8回第一美術協会展於東京府美術館（-22）。
栗原忠二《初夏の牧場》《ベニスの風景》《**歓楽の港**》《南国の午後》《洋上落日》（（みづゑ no.377, 美之国12-7）

6/　挫折した《吉田松陰銅像》建設運動再開。
（民友6/13, 21, S12.2/24）

6/20　赫土社洋画展於清水市材木商組合（-23）。
（民友6/17, 22, 29, 新報6/18）

6/26　近藤浩一路、日本美術院脱退。（美術年鑑 S12）

6/28　中央美術展於東京府美術館（-7/7）。
野島青茲《海の見える風景》入選。
（東日遠州版6/6）

7/1　第1回立陣社洋画展於東京銀座青樹社（-5）。
細井繁誠。（みづゑ no.378）

7/1　現代八名家扇面画展於東京日本橋高島屋（-5）。
近藤浩一路《飛沫》《夜漁》（市井, 塔影12-9*）

7/3　関尚美堂新作画展於東京日本橋東美倶楽部（-5）。
中村岳陵《罌粟》（市井）

7/6　納涼日光博覧会於静岡市三十五銀行前旧衛生展跡（-31）。（新報7/6, 15, 8/2）

7/7　原田和周遺作展覧会於東京数寄屋橋日動画廊（-9）。遺作50余点。（美術年鑑 S12）

7/13　第1回日本山岳画協会展於東京日本橋高島屋。
茨木猪之吉他。（美術年鑑 S12, 朝日9/25）

7/　岡崎雪聲《明治天皇銅像》静岡市役所正庁に安置。
像は大正6年11月3日に市役所に献上されたもの。
（新報7/15, 民友7/15, 読売静岡版7/15）

7/30　北川民次帰国。（駿遠豆12-12）

8/1　水彩画夏期講習会於大阪市南区御津小学校（-7）。
講師、石川欽一郎。（みづゑ no.378）

8/3　春陽会洋画講習会於静岡師範学校（-9）。
講師：小杉放庵、中川一政、石井鶴三、木村荘八他。
（民友7/19, 20, 25, 27, 新報7/18, 30）

8/　三木雲山逝去。（民友8/10）

8/　結城素明、榛原郡吉田の中村圓一郎宅に滞在し揮毫（-8/23）。平井顕斎の絵に関心を持つ。
（新報8/25, 民友8/25）

8/22　夏の観光静岡入選作品・ぞっとする一瞬写真展覧会於松坂屋（-）, 9/1於浜松笠井呉服店（-7）。
（読売静岡版8/22, 9/4, 遠州版9/4）

8/29　静岡学童自由画第2回展於田中屋（-9/4）。審査：小杉放庵、石井鶴三、木村荘八、中川一政、小栗哲郎、栗田雄。
（東日静岡版7/30, 8/5, 12, 29, 30, 9/1, 3, 4）

・　石川欽一郎《**題名不詳**》レートン絵具広告。
（みづゑ no.381他）

9/1　第8回青龍社展於東京府美術館（-28）。
三好光志《緑雲》（出品目録）

9/1　第23回院展於東京府美術館（-10/4）。
関曄明、入選。（民友9/1）
関曄明《白日夢》中村岳陵《**みづかげ**》* 藤井白映《朝》（美術年鑑 S12*, 塔影12-10, 美之国12-10, アトリエ13-10, 美術新論11-10, 出品目録）

9/2　第23回二科会展於東京府美術館（-10/4）
堤正三、初入選。山下博《少女像》入選。（東日静岡版9/1）
竹田久、入選。（民友8/31）
木村光江、入選。（民友10/7）
渡辺酉二、入選。（民友8/31, 9/1）
木村光江《窓外風景》竹田久《風景》堤正三《鯉幟》山下博《女の首》渡辺酉二《鳥》（出品目録）

9/5　鈴木至郎染色個展於田中屋（-7）。
（新報9/6, 7）

9/11　九夏会展於東京銀座三越（-15）。
小栗哲郎《**安倍川橋**》*《閑村の駅》原田和周他。
（みづゑ no.381*, 382）

9/16　新日本風景写真展於松坂屋（-19）。
（東日静岡版9/17）

9/20　静岡高校文芸部主催近県中等学校絵画展覧会第2回於田中屋（-24）。
（東日静岡版9/23, 遠州版7/9, 9/16, 23）

9/　土佐光一画会。
（新報9/26, 読売静岡版S12.12/14）

10/3　東京美術普及会日本画展覧会於県教育会館（-5）。
（新報10/1, 3, 4）

10/3　《明治天皇像》奉安式於可睡斎護国塔。
（駿遠豆11-10）

10/6　木村光江洋画個人展於田中屋（-8）。
（目録, 新報10/3, 7, 民友10/3, 7, 8）

10/10　童土社創作版画展覧会第8回展於田中屋（-12）。
（目録, 民友10/10, 新報10/10）

10/12　三県十商業学校生徒ショーウインドウ装飾競技大会於各商業高校・松坂屋（25-30）。
（民友9/15, 21, 10/10, 24）

10/15　静岡県美術協会展覧会第２回展於静岡市公会堂(-19)。審査員：近藤浩一路、栗田雄、杉本宗一、熊谷重太郎。
(目録、民友9/15,21,10/13,15,16,17,19,20,26,新報9/11,10/7,15,16,東日静岡版10/16，遠州版10/10，読売遠州版10/16，駿遠豆11-11)
秋野不矩《百日草》同展知事賞受賞。(民友10/16,17,東日静岡版10/16)

10/16　文展鑑査展於東京府美術館(-11/3)。
秋野不矩、野島青茲、入選。
(東日静岡版10/15,24)
秋野不矩《**砂上**》* 特選。(民友10/17,美術年鑑S12*,アトリエ13-11,塔影2-11,美之国12-11,美術新論11-11)
野村正一郎《校門》入選。(民友10/12)
平口勝雄、野島青茲、秋野不矩、花村晃歓、入選。(民友10/14,15)
後藤忠助、井戸義夫、長澤幸夫、入選。
(民友10/12)
井上恒也《河霧》花村晃歓《群鵜》平口勝雄《仙人掌》青木新作《春雪》勝間田武夫《浴女》鈴木満《姉妹》二重作龍夫《静物》後藤忠助《畳石》長澤幸夫《丘》(出品目録)

10/17　朝倉文夫《江原素六銅像》竣工。
(新報S10.2/17,10/27,S11.3/22,4/27,6/28,9/7,10/9,民友S9.12/15,S10.4/14,S11.6/28,10/8,東日静岡版10/17,読売静岡版，遠州版9/25,10/8,20,駿遠豆11-11)

10/17　静岡師範学校生徒絵画工芸書道作品展覧会(-19)。(新報10/17)

10/18　大橋基甫第６回入選祝賀会於清水市玉川楼。
後この自称大橋基甫は、文展６回入選の画家とは別人であることが判明。(新報10/16,11/7)

10/26　曽宮一念個展於新宿天城画廊(-30)。
(美術年鑑S12)

11/1　郷土諸家遺墨展覧会於浜松図書館(-7)。
(民友10/22)

11/3　水野欣三郎《少女と幼児》除幕式於浜松誠心高女。
(東日遠州版2/18，読売静岡版10/23)

11/6　文展招待展於東京府美術館(-23)。
石川欽一郎《**湖畔**》*** 川合改次郎《薔薇と金盞花》細井繁誠《**或る日の画室**》澤田政廣《**光明仏身**》* 《**善魔魚身**》杉本宗一《裸女》二橋美衡《彫波上観音置物》(美術年鑑S12*,美之国12-12,美術新論11-12,みづゑno382,駿遠豆***,出品目録)

11/6　静岡県教員作品展覧会第８回展於教育会館・松坂屋(-10)。(目録、新報11/6,9,民友11/2,9,東日静岡版11/6,読売静岡版11/6,手工教育)

11/　後藤忠助《河津三郎の力石》文展入選作石膏像を母校下河津小学校に寄贈の申し込み。
(新報11/11)

11/11　井南居第２回東西大家新作画展於東京日本橋東美倶楽部(-13)。中村岳陵《薫風》(市井)

11/11　日本写真美術展於松坂屋(-15)。
(東日静岡版11/12)

11/12　栗原忠二逝去。(新報11/14,美術年鑑S12,アトリエ14-1,駿遠豆11-12)

11/　フランス人彫刻家ガストン・オーシュコルヌ来静。
(民友11/9)

11/14　三宅克己、石川欽一郎水彩画展於東京銀座青樹社(-19)。(中央美術no.40,美術年鑑S12)

11/16　現代名家新作展於東京日本橋高島屋(-20)。
近藤浩一路《寒暁》中村岳陵《紫蘇》(市井)

11/22　《岡本巌胸像》除幕式於西遠高等女学校。
(読売静岡版11/21,日静岡版11/22,新報11/22)

11/25　近藤浩一路新作画展覧会於日本橋高島屋(-29)。
《**療**》*《**善光寺**》《**桜花爛漫**》《**夕日**》(美術年鑑S12*,塔影12-12)
《**療(中秋)**》(美之国13-1,アトリエ14-1,美術新論12-1,2)

11/27　七葉会第１回展於松坂屋(-29)。井上恒也、高木保之助、望月春江、大貫鉄心、狩野光雅、吉村忠夫他。
(新報11/27)

11/30　第２回三越日本画展於東京日本橋三越(-12/8)。
中村岳陵《蘇々実》出品。(市井)

12/1　現代邦画結集展於東京日本橋高島屋(-4)。
中村岳陵《霜葉禽情》近藤浩一路《湖山雪朝》(市井)

12/　金田麻之輔油絵頒布。(民友12/2)

12/2　栗田九品庵東西大家日本画展於東京銀座交詢社(-4)。中村岳陵《万年青》(美之国13-1,市井)

12/3　松島画舫東西名家絵画展於東京日本橋東美倶楽部(-5)。中村岳陵《寒汀》(市井,塔影13-2)

12/6　《鈴木利三郎胸像》除幕式於笠井町。
(読売遠州版12/9)

12/8　関尚美堂日本画展於東京日本橋東美倶楽部(-10)。
中村岳陵《初冬》(市井)

12/10　《乃木希典像》(台座はラジオ塔を兼ねる)除幕式。
(東日静岡版12/11)

12/　川奈観光ホテル竣工。(新報5/1,美術年鑑S12)

・　澤田政廣《牛》(駿遠豆12-1)

昭和12年 1937

・　久保田光亭、映画館看板の製作で成功をなす。
(東日遠州版1/7)

1/13　平尾花笠門下書道展於松坂屋(-17)。
(民友1/14,新報1/15)

1/19　《井上省三像》除幕式於熱海海蔵寺。
(東日静岡版1/20)

1/24　第６回六潮会展於東京日本橋三越(-29)。
中村岳陵《**春風**》(塔影13-3,美之国13-2)

1/27　第14回白日会展於東京府美術館(-2/7)。塩澤祥悟《つつじの咲く頃》(新報2/4)島田四郎《窓ぎわ》《渓流》永井武夫《**静かなる海辺**》八木昌一《ガソリンスタンド》(みづゑno.385,出品目録)

2/8　石川欽一郎水彩小品展於京都三角堂(-12)。
(美術年鑑S13)

2/10　第24回光風会展於東京府美術館(-28)。
赤城泰舒《三潭印月》石川欽一郎《熱海海岸》《赤城淡煙》清水柳太《外苑にて》丸山雅生《舞舞踏の図壁掛図案》(出品目録)

2/　増田匡彦個展於田中屋(-15)。
(民友2/15,新報2/15)

2/　浜松市図書館に遠州の郷土室。大場辰太郎寄贈の書画陳列の予定。(東日遠州版2/10)

2/18　第33回太平洋画会展於東京府美術館(3/1)。
漆畑廣作《塔》杉本宗一《裸女》(出品目録)

3/3　先人知名士遺墨書画展覧会於清水市立図書館(-4)。(新報3/4)

3/5　第５回東光会展於東京府美術館(-21)。
高畠茂雄《伊豆安良里風景》吉野不二太郎、入選。
(民友3/5,新報3/5,6)

3/13　第７回独立展於東京府美術館(-4/4)。
山道栄助《**蠣**》(出品目録)

3/18　大須賀菊雄個展於松坂屋(-21)。近藤浩一路も出品。
(駿遠豆12-4,9,新報3/16)

3/19　角谷二葉堂第６回新作茶掛展於東京日本橋清水ビル(-31)。中村岳陵《嫩芽》(市井)

3/29　第８回戊辰会展於東京日本橋三越(-4/2)。
井上恒也《**はぐくみ**》(塔影13-5,美之国13-4)

4/7　第３回立陣社近作洋画展於東京銀座青樹社(-11)。
細井繁誠《**道のある風景**》(みづゑno.387)

4/10　後藤光行彫刻個展於松坂屋(-14)。
(駿遠豆12-5,民友4/10,13)

4/11　第12回国画会展於東京府美術館(-27)。
遠藤君雄初入選。
(東日静岡版4/10,駿遠豆12-5)
鈴木至郎入選。(民友4/11,駿遠豆12-5)
宮本敬之、増田舜次、東克己、柏木俊一、山村誠、増田邦太郎、出品。(駿遠豆12-5)
旭五良《水槽》東克己《裸体デッサンA》《裸体デッサンB》《夏の踏切り》《初夏の道》遠藤君雄《佐渡尖角湾》柏木俊一(会員)《初夏の朝》《一碧湖畔》《**安良里の朝**》*《**赤富士**》** 渋川駿二《静日》《噴水》《保土ヶ谷風景》《裸婦》菅原霞仙《酒樽のある風景》宮本敬之《秋晴の町》山村誠(会友)《南豆の春》《湾口初秋》《湖畔の丘》中川雄太郎《裸婦》鈴木悟牛《四牛図四曲屏風》増田邦太郎《木ノ葉模様片側帯地》増田舜次《木綿ザクロ卓上センター》(美術新論12-5*,駿遠豆12-5**,出品目録)

4/11　第15回春陽会展於東京府美術館(-5/4)。
小栗哲郎(会友)《水門》《松野村》《田園夕暮》《久野》(駿遠豆12-5,出品目録)

4/16　第５回日本木彫展於東京府美術館(-25)。
澤田政廣《**薫風**》*(未完成)和田金剛《**剣舞**》** 長澤幸夫《童女》
(駿遠豆12-5,6*,11** 美之国13-5*)

4/17　主線美術協会小品展於東京銀座青樹社(-21)。
大川武司《薄暮》(みづゑno.387)

4/21　静岡県女子中等学校生徒図と画の作品展覧会於松坂屋(-24)。静岡民友新聞主催。
(民友4/11,13,20,24)

4/22　山内泉、商工務省第24回工芸展覧会於東京府商工奨励館(-23)入選。(民友4/20,駿遠豆12-5)

4/22　第2回東西大家新作画展於東京銀座交詢社(-24)。
中村岳陵《木蘭》(市井)
4/　沼津高等女学校生徒作品展。(民友4/27)
4/25　明治大正昭和三聖代名作美術展覧会於大阪市立美術館(-5/25)。
中村岳陵《**砂丘**》川村清雄《画室》小林清親《鶏の図》曽宮一念《けし畑》澤田政廣《華炎》出品。
(美術年鑑S13)
4/27　増田匡彦、東京に転任。(民友5/10)
4/29　赫土社第6回展於清水材木商組合事務所(-5/3)。
(民友5/10, 新報4/18, 5/7, 駿遠豆12-6)
5/1　黒耀会展覧会第9回展於松坂屋(-3)。
(目録, 民友5/1, 3, 駿遠豆12-6)
5/1　第19回朱葉会於東京日本橋白木屋。奥田八重子《水仙》伊藤聖香《真夏の午後》(駿遠豆12-6)
5/3　松島画舫東西名家絵画展於東京日本橋東美倶楽部(-5)。中村岳陵《山吹》(市井, 塔影13-6)
5/9　第9回第一美術協会展於東京府美術館(-24)。
近藤進平《静岡市役所風景》入選。(民友5/17)
栗原忠二《ベニス》(みづゑno.389)
5/12　在京県出身美術家、静陽会を創立。
(駿遠豆12-6)
5/12　栗田雄出発。(駿遠豆12-6)
5/20　第24回日本水彩画会展於東京府美術館(-6/6)。
石川欽一郎《伊豆の海岸》
5/22　山田長政公顕彰祈念展於田中屋(-30)。三木栄より静岡文化協会へ模写一巻の寄贈。
(民友5/5, 18, 新報4/16, 5/18, 読売静岡版5/19, 東日静岡版5/14, 18)
5/25　第1回海洋協会展於東京日本橋三越(-30)。
石川欽一郎2点出品。(駿遠豆12-7)
5/26　風景協会展。石川欽一郎《飛騨風景》
(駿遠豆12-6)
5/　榛葉嘉一郎作品頒布会。(民友5/31, 新報5/25)
6/1　武石廣三郎《小原右馬允像》除幕式。
(東日遠州版6/1、民友6/3)
6/7　鵜殿霞舟、娘婿山口錦州の応援を得て、下田条約の図を制作途中、病床に臥す。
(読売静岡版2/3, 6/13)
6/10　黄陽社展覧会第8回展於田中屋(-12)。
(目録、民友6/10, 新報6/9)
6/12　三越日本画小品展於東京日本橋三越(-17)。
中村岳陵《罌粟》(市井)
6/13　静岡美育会主催児童自由画コンクール展於田中屋(-16)。(読売静岡版6/12)
・　小栗哲郎洋画頒布会。(駿遠豆12-7)
6/17　橋本多聞洞新作画展於東京日本橋東美倶楽部(-19)。
近藤浩一路《水郷初夏》(美之国13-7, 市井)
6/25　赤城泰舒洋画個展於東京麹町室内社画堂(-30)。
《**法雨寺大雄殿前庭(普陀山)**》(美術年鑑S13*, 駿遠豆12-7)
《**海印池普陀山**》《**留園廻廊**》(みづゑno.390)
7/2　赤城泰舒南支写生展於東京銀座資生堂(-5)。
(エッチングno.56, アトリエ14-8, 中央美術復興no.40 みづゑno.391)
7/　曽宮一念、独立美術協会を退会。国画会入会。
7/3　清水柳太、第1回観光大島スケッチ会開催。
(駿遠豆12-8)
7/11　石川欽一郎水彩画展於大阪阪急百貨店(-20)。
(美術年鑑S13)
7/20　盗難にあった伊豆長八《常盤御前》龍澤寺に戻る。
(民友7/22, 東日静岡版7/21)
7/　弁天島に10尺の《乃木希典像》除幕予定。
(東日静岡版5/16, 民友2/11)
・　三宅克己、来静。《**静岡風景**》(駿遠豆12-8)
8/　下岡蓮杖遺品、カメラ百年祭記念展覧会於日本橋高島屋に出品。(東日静岡, 遠州版7/4)
9/1　第9回青龍社展於東京府美術館(-28)。
三好光志《簀立》(美之国13-10)
9/2　第24回院展於東京府美術館(-10/3)。
中川白汀、初入選。(東日静岡版9/1)
中川白汀《初夏》中村岳陵(同人)《**雨五題**》藤井白映《六月の日》(美術年鑑S13, 塔影13-10, 美之国13-10、アトリエ14-10, 出品目録)
9/3　第24回二科会展於東京府美術館(-10/4)。
北川民次《タスコの祭》他5点出品、会員となる。
(東日静岡版9/1, 駿遠豆12-12)
北川民次《**メキシコ、タスコの祭日**》*《メキシコ、銀鉱の内部》《メキシコ、悲しき日》《メキシコの三人娘》《瀬戸の工場》永井武夫《巌と朝顔》水野欣三郎《黒潮に呼ぶ》(美術年鑑S13*, アトリエ14-10, 美術新論12-9, 美之国13-10, みづゑno.392, 393, 駿遠豆12-10, 出品目録)
9/19　静岡高校文芸部主催近県中等学校絵画展覧会第3回展於田中屋(-21)。(東日静岡・遠州版9/20)
9/23　静岡県美術協会主催恤兵美術展於静岡商工奨励館(-30)。
(新報9/1, 26, 駿遠豆12-11, 12, 美術年鑑S13)
10/12　県庁舎落成式。六角紫水監督、大斎春夫主任によるアルミ壁画完成。
(読売静岡版8/17, 静岡版・遠州版10/13)
10/12　石川欽一郎近作水彩画展於大阪美交社(-18)。
(美術年鑑S13)
10/16　第1回新文展於東京府美術館(-11/20)
榛葉嘉一郎《**波太風景**》初入選。(駿遠豆13-2, 新報10/21, 民友10/12, 読売10/12)
林義男、初入選。(民友10/12)
漆畑廣作《**沼津浅間神社境内**》初入選。
(駿遠豆13-4, 読売静岡版10/12)
秋野不矩《**小児群像**》中村岳陵(審査員)《**砂浜**》*野島青茲《晩夏》花村晃歓《**薫苑**》石川欽一郎(無鑑査)《**戸隠高原**》* 漆畑廣作《境内》川合改次郎(無鑑査)《森の中》榛葉嘉一郎《波太風景》林義男《憩い》二重作龍夫《素秋好実》細井繁誠(無鑑査)《伊豆の海》澤田政廣(審査員)《**火星鳥身三部作の三**》杉本宗一(無鑑査)《裸女立像》熊谷重太郎《衝立》***(美術年鑑S13*, 塔影13-11, 美之国13-11、みづゑno.393, 駿遠豆12-12***, 出品目録)
10/21　県教員作品展第9回展於教育会館・松坂屋(-25)。
(新報10/16, 21)
10/　静岡市芸術同好会主催芸術慰問袋。
(民友10/28)
10/30　原田和周遺作展於神戸画廊(-11/1)。
(美術年鑑S13)
11/1　北川民次メキシコ作品展於銀座日動画廊(-4)。
(美之国13-12, 美術年鑑S13)
11/1　東西日本画新作展於東京日本橋高島屋(-5)。
中村岳陵《秋爽》(市井)
11/　中村良作、応召。(読売静岡, 遠州版11/12)
11/11　第6回日本版画協会展於東京府美術館(-18)
小川龍彦《散水車のある風景》中川雄太郎《葉鶏頭》《卓上菜果》《農夫》小泉癸巳男(会員)《音羽護国寺》《清澄庭園》《上野風景》《本願寺(築地)》《国際飛行場》《根津権現の躾雨》《諏訪神社の見晴し》《東京駅附近》《ホテル玄関秋色》《国宝帝大赤門》《大久保射撃場》《築地魚がし市場》《葛西堀江町》《千住末広町》《名主の滝》《洗足池雨情》松永茂[栗山茂]《網代附近》《清見潟俯瞰》《薬室小閑》《海近き木立》《野尻湖》(出品目録)
11/12　井南居第3回東西大家新作画展於東京芝東京美術倶楽部(-14)。
近藤浩一路《南都の春》(市井)
11/15　東郷青児、松菱百貨店壁画《十九世紀の婦人》を完成させる。(読売遠州版11/16)
11/20　二又川春子朝鮮スケッチ第2回展於沼津商工会議所(-21)。(民友11/18)
11/20　近藤浩一路第3回個展於東京日本橋高島屋(-24)。
《**蔦温泉**》《**室生寂境**》《**白牡丹**》(塔影14-1)《**雪国金星**》《**十勝スキー宿三題**》*《**水村朝靄**》《**晨鳥朝鵜**》(美之国13-12)
《**草競馬**》(美術年鑑S13*, 美術新論13-1)
11/28　新田藤太郎《服部安次郎像》除幕式於焼津水産組合。(民友6/17, 11/27, 28, 30, 新報6/27, 11/27, 30, 読売遠州版11/27)
11/29　第3回三越日本画展覧会於東京日本橋三越(-12/7)。
中村岳陵《初冬》近藤浩一路《武蔵野早春》(美術年鑑S13, 美之国14-1*, 塔影14-2*, 市井)
12/1　松島画舫秋季展於東京日本橋東美倶楽部(-3)。
中村岳陵《晨汀》(市井)
12/6　関尚美堂20周年記念東西大家新作画展於東京日本橋東美倶楽部(-8)。中村岳陵《栗》(市井)
12/9　現代名家新作画展於東京日本橋高島屋(-13)。
近藤浩一路《武蔵野麦秋》中村岳陵《冬朝》(市井)
・　北川民次《虎》(木版)(美之国14-1)

昭和13年 1938

・　金山平三、静岡に長尾岳陽を訪う。
(駿遠豆13-3)
1/15　北蓮蔵、静岡に長尾岳陽を訪う。(駿遠豆13-3)
1/　金田麻之輔、従軍画家として上海に赴く。
(民友S12.12/16, 新報S12.12/17)
1/　滝澤清、油絵を試みる。(民友2/3)
2/　県学務部、中等学校生徒情操教育の為、石井栢亭

を講師に嘱託。(読売遠州版2/3)

2/1　柏木俊一洋画展於大阪美術新論社画廊(-5)。
(美術年鑑S14)

2/1　大森桃太郎富士山画展於東京銀座資生堂(-5)。

2/2　県主催中等学校図画教育指導研究会於沼津中学。
講師:石井柏亭。(読売静岡版2/6)

2/2　第15白日会展於東京府美術館(-13)。
塩澤祥悟《伊太の山》《冬の山村》平松幸子《野辺》八木昌一《下り坂》、島田四郎《ミシンを踏む女》《ショールの女》《駿河山村》、島田美保子《花束》小田切正三《赤い船》。(出品目録、新報2/10, 読売静岡, 遠州版2/10)

2/11　浜松余技芸術作品展於浜松市図書館(-13)。
(民友2/3)

2/11　第1回半弓会洋画展於大阪阪急百貨店(-19)。
曽宮一念他。(美術年鑑S14)

2/16　第25回光風会展於東京府美術館(-3/6)。
石川欽一郎(会員)《**銚子の海**》** 《日光の山早春》清水柳太《**幼児在赤心**》* 漆畑廣作《佐野瀑園》
(駿遠豆13-7*, 同会作品集**)
清水柳太、銀時計を贈られる。(駿遠豆13-6)

2/25　関尚美堂新作画展於東京日本橋東美倶楽部(-28)。
中村岳陵《春蘭》(市井)

2/26　日独伊三国児童自由画交歓展於松坂屋(-3/2)。
(読売静岡版2/9, 13, 15, 22, 26)

3/2　宝台院大方丈、霊廟、国宝指定となる。
(東日静岡版3/2)

3/10　第34回太平洋画会於東京府美術館(-23)。
杉本宗一(会員)《トルソ》《仁王像》漆畑廣作《**地蔵尊**》** 野田半三《雪》*
(出品目録, 駿遠豆13-6*, 16-10**)

3/12　曽宮一念素描展於銀座三昧堂(-16)。『ひはの群』出版記念。(美術年鑑S14)

3/13　第8回独立展於東京府美術館(-4/3)。
山道栄助《かき》《海の蠣》(出品目録)

3/14　都築真琴個展於日本橋高島屋(-19)。《**ゆく春**》《**新声**》《**閑居**》(美之国14-4, 美術年鑑S14)

3/18　古今名書画複製展覧会於教育会館(-20)。
(新報3/18)

3/22　重要美術品認定、静岡県から2点。
(読売静岡版3/23)

3/24　第6回東光会展於東京府美術館(-4/3)。
高畠茂雄《江の浦》吉野藤太郎入選。
(民友3/25, 新報3/25, 26, 静岡読売3/25)
二重作龍夫、奨励賞受賞。(美術年鑑S14)

3/26　第11回青甲社展於大礼記念京都美術館(-28)。
秋野不矩《**三人の娘**》(塔影14-5)

3/　高木雀翁、沼津に滞在、戦死者肖像画制作。
(読売静岡版3/24)

3/29　角谷二葉堂第7回新作茶掛展於東京日本橋清水ビル(-31)。中村岳陵《朧夜》(市井)

3/30　葵文庫館長貞松修蔵逝去。
(民友4/1, 読売静岡版4/1)

4/5　松島辰三作楠公父子の別れの図、鮑波神社に献額。(民友4/7, 新報4/7, 読売静岡版4/3)

4/8　高山文景、清水駅より上海に向かって発つ。
(新報4/10)

4/9　第13回国画会展於東京府美術館(-24)。
鈴木悟郎、入選。(民友4/11)
旭五良《遊漁》東克己《海に沿ふ村》柏木俊一(同人)《一碧湖》《南豆白浜》渋川駿二《風の日》《室戸風景》《海女達》山村誠(同人)《浜の社》松永茂[栗山茂]《明けゆく西湖》鈴木悟牛《雑草の図》《梅の図》《雑草と菱形》《こんにゃくの花》(出品目録)

4/9　第16回春陽会展於東京府美術館(-27)。
小栗哲郎(会友)《**夜の電車**》*《芝川早春》栗田雄(会友)《**冬の塩久津**》*、** 曽根靖雅《倉の前》中川一政《**安良里港**》*
(みづゑno.399*, 駿遠豆13-11**, 出品目録)

4/27　第25回日本水彩画会展於東京府美術館(-5/15)
赤城泰舒《志摩冬日A》《志摩冬日B》石川欽一郎《**春の奥多摩**》小泉癸巳男《あかつきの不二》滝沢清《浜辺のスケッチ》《春近き丘》水野以文《犬吠風景A》《犬吠風景B》
(美術年鑑S14, 出品目録)

5/1　第10回第一美術協会展於東京府美術館(-19)。
栗原忠二遺作展示。

5/1　第6回立陣社展於東京銀座資生堂(-4)。
細井繁誠《花》(みづゑno.400)

5/1　第3回京都市美術展於大礼記念京都美術館(-20)。
秋野不矩《兄弟》(美術年鑑S14. 塔影14-6)

5/　野島青茲《晩夏》(文展入選作)県庁に寄贈。
(読売静岡版5/14)

5/14　第7回六潮会展於東京日本橋高島屋(-17)。
中村岳陵《**秋霖**》《**潺淙**》(日本美術年鑑S14, 塔影14-6、美之国, 14-6)

5/19　松島画舫春季展於東京日本橋東美倶楽部(-21)。
中村岳陵《**鸚鵡**》(市井)

5/20　静岡県美術協会第3回展於県教育会館(-24)。
審査員:中村岳陵、土佐光一、曾宮一念、赤城泰舒、澤田政廣、太田重範、芹澤銈介、藤村彦四郎、新井宇作。(民友4/12, 5/19, 20, 23, 新報4/12, 5/20, 22, 読売静岡版5/11)
「搬入数は日本画50、洋画151、彫刻25、工芸19点、入選は日本画10、洋画41、彫刻5、工芸6点。陳列数は賛助、無鑑査を併せ136点」
(美術年鑑S14)

5/22　第1回現代美術展於東京府美術館(-28)。
甲賀義成《バラ》入選。(新報6/1)

5/24　東京会春季展於東京芝美術倶楽部(-26)。
中村岳陵《蛍》(市井)

5/26　正峰書道会第4回展於県教育会館(-27)、於清水市木材会館(28, 29)。松田江畔主宰。
(民友5/27)

・　笠間繁継、転居。(駿遠豆13-6)

6/5　一木陽二郎逝去。享年42.
(美術年鑑S14, みづゑno.401, 駿遠豆13-7)

6/14　東西大家新作画展於東京日本橋高島屋(-19)。
中村岳陵《海老》(市井)

6/15　近藤浩一路新作画幅展於大阪高島屋(-18)。
(美術年鑑S14)

6/16　三越日本画小品展於東京日本橋三越(-20)。
近藤浩一路《桐花》中村岳陵《香魚》(市井)

6/　中島東洋《潮の音を聞く》(帝展特選作)平田村小学校に寄贈。(民友6/22)

6/28　水彩画七人展於東京数寄屋橋日動画廊(-30)。
石川欽一郎出品。(美術年鑑S14)

7/11　尚美展於東京日本橋東美倶楽部(-13)。
中村岳陵《猫》(市井)

7/13　浜松諏訪神社、国宝指定。
(読売静岡版7/15, 東日遠州版7/14)

7/　浜松高林家所蔵《明月記断簡》他の重要美術品認定。(新報7/16)[9/5告示。]

7/　平井顕斎出生の地の建碑。(民友7/21)

7/25　静岡県美術工芸展於日本橋高島屋(-30)。
(美術年鑑S14)

7/27　焼津絵画学園第2回展於焼津大勝堂旧館(-31)。
指導者甲賀義成の参考出品。
(民友7/29, 新報7/29)

7/30　広告美術ポスター展於松坂屋(-8/3)。
(新報7/27, 28, 30, 31, 8/1)

7/　全国美術家連盟陸軍傷痍軍人寄贈画。
石川欽一郎、井上恒也、中村岳陵、小泉癸巳男、川合改次郎、小栗哲郎、内藤勘司、栗田雄、長尾一平、水野以文、赤城泰舒、渡辺太極、清水柳太、淺川藤次、漆畑廣作、原華陽、山下青崖、滝澤清、中川雄太郎、飛岡文一、細井繁誠、島田四郎、山本正雄、松永[栗山]茂、山村誠、塩澤祥悟。
(駿遠豆13-9)

・　小栗哲郎、石井鶴三宅に転居。(駿遠豆13-8)

8/17　本間寛平、岸田刀泉、高山晴男三人展於松坂屋(-21)。(新報8/17, 19)

8/　大森桃太郎、富士山頂にて制作。
(読売静岡版8/26, 駿遠豆13-6)

8/24　原田和周遺作展於大阪阪急百貨店(-31)。
(美術年鑑S14)

8/25　東京美術学校在学生静岡県人展於松坂屋(-29)。
中村万平、堤達男、大村政夫他10名。
(民友8/24, 25)

8/　柏木俊一の富士十二姿態、ヒトラーユーゲントへ、総統への贈呈を依頼。
(新報8/25, 東日静岡版8/25)

/　小泉癸巳男《昭和大東京百図絵》頒布会。
《上野表慶館と美術館春色》(駿遠豆13-9)

8/31　《関谷連隊長銅像》献納の建議。(新報8/31, 9/1)

9/1　第9回青龍社展於東京府美術館(-28)。
三好光志《売立》(美術年鑑S13)

9/3　第25回院展於東京府美術館(-10/4)。
関曄明《遊鯉》関青嶂《木の間》中村岳陵(同人)《**爽風**》(美術年鑑S14, 塔影14-10, 美之国14-9, みづゑno.404, 出品目録)

9/3　第25回二科展於東京府美術館(-10/4)。
梅原英子《**公園プール**》初入選。(民友9/1, 駿遠豆15-11)

北川民次（会員）《**メキシコ舞踏の図**》《**静物**》《見物人（メキシコ）》《戦後図（メキシコ）》永井武夫《雲と巌》水野欣三郎《立てる女》（美術年鑑S14，アトリエ15-14，みづゑno.404，出品目録）

9/7　白星会洋画展覧会於松坂屋（-11）。（民友9/8，10）

9/11　堀内天嶺《吉田松陰》画巻下見会於下田幼稚園。（民友9/10）

9/17　吉野不二太郎式根島スケッチ展於田中屋（-20）。（民友9/17）

9/　高木鶴画、富士郡大宮町に滞在、戦死勇士の肖像制作。11月来静予定。（民友10/25）

9/　黒耀会第10回展。（民友9/1，19）

9/21　童土社版画展第9回展於田中屋（-24）。（新報9/21、読売静岡版9/21）

9/23　福王子宝物展（-25）。（新報 9/20）

10/1　岳南美術協会展於沼津第一校尚武館（-3）。（美術年鑑S14）

10/　斉藤文人、清水にて《蘇州城》揮毫。寄贈される。（東日静岡版10/5）

10/16　第2回新文展於東京府美術館（-11/20）。
秋野不矩《**紅裳**》特選。
（美術年鑑S14，塔影14-11，美之国14-10）
高畠茂雄、山村誠、小栗哲郎入選。
（民友10/12，新報10/13，読売静岡版・遠州版10/12，静岡版10/23，東日静岡版10/13）
鈴木福富、初入選。（民友 12/25，読売静岡版10/11，12）
是永仲一、初入選。（東日静岡版10/14）
秋野不矩《**紅裳**》* 是永仲一《晴日》赤城泰舒（無鑑査）《**雲根浄土**》** 石川欽一郎（無鑑査）《木曽雨霽》小栗哲郎《夕凪》柏木俊一（無鑑査）《山峡》勝間田武夫《老爺憩ふ》川合改次郎（無鑑査）《森の仲間》高畠茂雄《記念撮影》山村誠《遊化》相曽秀之助《黎明》井戸義夫《Kの像》澤田政廣（無鑑査）《**護持結身**》* 杉本宗一（無鑑査）《日本刀》*** 長澤幸夫《蒼港飛躍》和田金剛《潮風》熊谷重太郎（無鑑査）《**星の屏風**》*** 二橋美衡（無鑑査）《龍獣文銀壺》鈴木福富《婦人長着》（美之国14-10，12*，みづゑno.405**，駿遠豆***，出品目録）

10/21　第1回蒼人会展於東京銀座紀伊国屋（-25）。
梅原英子《満州風景》（みづゑno.405）

10/26　曽宮一念素描展於大阪阪急百貨店（-31）。（美術年鑑S14）

・　曽宮一念《山腹》（みづゑno.406）

10/29　静岡県教員作品展覧会第10回展於県教育会館（-11/4）。（民友10/29，新報10/29）

11/8　石川欽一郎日本画展於神戸画廊（-12）。（美術年鑑S14）

11/11　沖六鳳上京記念書会（-12）。静岡女子師範嘱託を辞し、比田井天来の招きに応ず。（民友11/14）

11/　佐々木古楼、伊東に滞在、転地療養所の傷病兵の為彩管報国。（読売静岡版11/18）

11/　堀内天嶺作の吉田松陰一代絵巻の内覧予定。了仙寺に陳列予定。（東日遠州版9/10）

11/19　近藤浩一路第4回新作展於東京日本橋三越（-23）。《朴花》《若葉》《遠江》《白雨》《**雨余**》《**寒月**》《**夕月**》《**爽暁**》《**驟雨**》（美術年鑑S14，美之国14-12*，塔影15-1**）

11/22　東京会日本画新作展於東京美術倶楽部（-24）。中村岳陵《龍膽》（美術年鑑S14）

11/24　第2回一水会展於東京府美術館（-12/10）。
赤城泰舒《妙義白雲山》（出品目録）

12/1　水彩画三人展於数寄屋橋日動画廊（-4）。三宅克己、石川欽一郎、真野紀太郎。（美術年鑑S14）

12/1　三越新作日本画展於東京日本橋三越（-7）。
近藤浩一路《朝陽映島》中村岳陵《**春日**》（市井，塔影15-2*）

12/1　現代名家新作画展於東京日本橋高島屋（5）。
近藤浩一路《雪旦》中村岳陵《春暁》（市井）

12/　庵原中学教諭小林金治、戦死者肖像画制作。（東日遠州版12/4）

12/3　長尾嶽陽・建吉逝去。享年79。（美術年鑑S14）

12/3　井南居第4回東西大家新作画展於東京芝東京美術倶楽部（-5）。中村岳陵《映虹》（市井）

12/5　松島画舫秋季新作展於東京日本橋東美倶楽部（-7）。中村岳陵《海老》（市井）

12/9　第1回中部日本水彩画会展於名古屋鶴舞公園美術館（-12）。北川民次、特別出陳。（美術年鑑S14）

12/13　第7回日本版画協会於東京府美術館（-20）。
大城貞夫《静物》《湖畔の春》小泉癸巳男（会員）《兜町取引所街》《中山湖氷上公魚穴釣》《日光湯の湖スキー》《猿橋》中川雄太郎《ひる休》《夕ぐれ》《渡船場》《裸婦》中村岳陵《緑衣童女》《海辺静物》藤本東一郎《パラオの女》《カナカ老婆》《チャモロの子供》《カナカ娘》《サイパン教会》松永茂［栗山茂］（会員）《昆虫飛翔》《万葉歌譜》《朝の富士》《緑陰》《机の静物》《箱根蘆湖》（出品目録）

12/21　長尾岳陽翁告別式於東京丸の内マーブル。（駿遠豆14-2）

12/23　橋本多聞洞新作画展於東京日本橋東美倶楽部（-25）。中村岳陵《由壽利葉》（塔影15-3，市井）

12/25　水野欣三郎《江川担庵像》除幕式於県立浜松機械工養成所。（読売遠州12/15）

12/　鈴木福富、来春ニューヨーク万国博覧会出品。（民友12/25）

12/　『曽宮一念作品集3』刊行。

昭和14年 1939

1/　松永勝次・嶺伸、戦死者肖像制作。（読売静岡1版1/25）

1/16　澤田政廣《江川太郎左衛門像》除幕式。
（民友S13.12/6，S14.1/10，16，新報1/17，読売静岡版1/10，熱海1/11）
江川太郎左衛門遺墨展於韮山中学校。（駿遠豆14-4）

1/19　栗原忠二遺作展於日本橋三越（-24）。遺作60余点を展示。（美之国15-2，美術年鑑S15）

1/21　静岡美術協会会合於静岡市歯科医師会館。（駿遠豆14-2）

1/30　静岡新報社名士色紙陳列頒布会於松坂屋（-31）。（新報1/18，19，25，26，27，28，29，31）

2/1　三越新進作家日本画展於東京日本橋三越（-7）。
秋野不矩《山径》《雪》（市井、塔影15-4*）

2/2　第16回白日会展於東京府美術館（-12）。
塩澤祥悟《里の山》小田切正三《久能の山》島田美保子《春の室内》《花》島田四郎《秋趣》永井武夫《**倒影**》中澤弘光《台南風景》（みづゑno.401，出品目録）

2/5　第25回商工省全国工芸展覧会於東京府商工奨励館（-11）。山内泉、3等入選。（民友2/7）

2/　菊池甲冠、浜松五社神社・諏訪神社の修復に従事。（東日遠州版2/7）

2/18　石川欽一郎小品展於大阪関西画郎（-24）。

2/19　第26回光風会展於東京府美術館（-3/5）。
漆畑廣作、春台賞受賞。（駿遠豆14-3）
赤城泰舒《妙義山》石川欽一郎《銚子犬若海岸》漆畑廣作《O君》藤本東一良《**見習水夫M君**》（みづゑno.411，出品目録）

2/　浜松署、漫画『無敵猛鷲軍』を差押。（読売遠州版2/21）

・　清水柳太作品、有栖川記念公園資料館に寄贈される。（駿遠豆14-3）

3/　栗山茂、中国へ渡る。

3/　伊豆大仁に横山大観の別荘の建設。（読売静岡2版3/19）

3/9　第35回太平洋画会展於東京府美術館（-20）。
漆畑廣作《鶴の居る庭》《早春の池畔》（出品目録）

3/9　赤城泰舒、淀橋区下落合3-1125へ転居。（みづゑno.414）

3/10　第9回独立展於東京府美術館（-30）。
影山静子《寒霞渓》山道栄助《雲と蠣》《百穴》（出品目録）

3/14　上野帝国美術協会主催展覧会於熱海大月旅館。（熱海3/10）

3/15　戸田観美堂新作画展於東京日本橋東美倶楽部（-17）。秋野不矩《桜》《こぶし》（市井）

3/16　第6回日本美術院同人作品展於東京上野松坂屋（-22）。
中村岳陵《春光》（美術年鑑S15）

3/18　第3回主線美術協会展於東京府美術館（-29）。
大川武司《**風景B**》（みづゑno.412）

3/19　新古書画即売展於静岡市公会堂（-20）。（新報3/19）

3/24　七凡社展第1回展於田中屋画廊（-27）。（目録，新報3/25，民友3/26，新報3/25）

3/25　第12回青甲社展於大礼記念京都美術館（-29）。
秋野不矩《**女性**》（塔影15-5）

3/29　第10回戊辰会於東京日本橋三越（-4/2）。
井上恒也《**孔雀**》（塔影15-5）

4/2　第14回国画会展於東京府美術館（-16）。
増田邦太郎、入選。（民友4/6）
東克己《初夏の庭》柏木俊一（同人）《冬の山》渋川駿二《大道海岸》《ダテク》中川雄太郎《翠庭》《裸

婦》鈴木至朗《のれん》《間しきり》増田邦太郎《木綿雑草模様のれん》(出品目録)

4/2　第7回東光会展東京府美術館(-17)。
二重作龍夫、受賞。(みづゑno.412)
吉野不二太郎入選。(東日静岡版4/1)
高畠茂雄《安倍川の富士》入選。
(民友4/7, 新報4/7, 読売静岡1版4/7)

4/15　第8回日本木彫会展於東京府美術館(-23)。
澤田政廣《髪》(美術年鑑S14)

4/17　石井柏亭個展於東京銀座資生堂(-21)。
《浜名湖》《安倍川》(みづゑno.414)

4/19　甲賀義成、静岡美術協会慰問使節として出発(-12/3)。(民友11/7, 新報2/18, 9/4, 12/4, 東日静岡版4/16, 静岡S19.3/11)

4/22　第1回日本画院展於東京府美術館(-5/7)。
野島青茲《飼鳩》日本画院展賞受賞。
(読売静岡版5/7, 新報5/7)

4/23　第17回春陽会展於東京府美術館(-5/14)。
青木達弥《白浜風景(B)》小栗哲郎(会友)《吾野静日》《**雪空**》栗田雄(会員)《漁村》中村万平《笛》(美術年鑑S15, 出品目録)

4/24　北川民次個展於数寄屋橋日動画廊(-28)。
《**沖縄風景**》(みづゑno.414*, 美之国15-6, 美術年鑑S15)

4/25　静岡新報社・地方新聞連盟主催第2回ポスター展於松坂屋(-29)。(新報4/24, 25, 27)

4/26　近藤浩一路個展於大阪高島屋(-29)。
(美術年鑑S15)

5/4　茨木猪之吉個展於京城三越(-7)。
(美術年鑑S15, 駿遠豆14-6)

5/6　白星会洋画展第2回展於松坂屋(-)。
(民友5/6, 9)

5/7　松下忠雄第2回個人展於浜松谷島屋ホール(-14)。
(読売遠州版5/10)

5/8　松島画舫春季新作画展於東京日本橋東美倶楽部(-10)。秋野不矩《紅い扇子》中村岳稜《溝畔余情》(市井, 塔影15-7)

5/10　第8回六潮会展於東京日本橋三越(-13)。
中村岳陵《**渓間**》(日本美術年鑑S15, 塔影15-7, 美之国15-6, アトリエ16-6)

5/10　第26回日本水彩画会展於東京府美術館(-28)。
石川欽一郎《身延山薄雪》

5/14　泉彩会第1回展於熱海区民会館(-16)。
(熱海5/17)

・　熱海市長、安田《富士》を熱海分院に寄贈。
(熱海5/19)

5/19　高島屋東西名家新作邦画展於東京日本橋高島屋(-23)。秋野不矩《芍薬》(市井)

5/20　第10回展第一美術協会於東京府美術館(-6/4)。
山田安《風景》、田村貫一《川原風景》《少女坐像》、谷田部穂柄《果物》入選。
(読売静遠州版5/21)
漆畑廣作、第一美術賞受賞。(美術年鑑S15)

5/20　静岡県美術協会第4回展於県教育会館・静岡商工奨励館(-24)。(読売静岡1,2版, 遠州版5/19, 民友5/6, 22, 23, 東日静岡版・遠州版5/19, 静岡版5/5, 23, 新報5/5, 19, 熱海5/19)
「郷土美術家を以て組織する協会の第四回公募展。審査員は和田三造、石川欽一郎、芹澤銈介に委嘱、搬入数は絵画二百十三、彫刻十、工芸二十五、入選は絵画六十六、彫刻二、工芸八、陳列総数二百二十点。別に戦線にある杉山良雄のスケッチを特別出陳した。
(美術年鑑S15, 駿遠豆14-7)

5/21　静岡美術協会展入選者授与式、美術館建設の件が話し合われる。(駿遠豆14-7)

5/24　第3回海洋美術展於東京日本橋高島屋(-30)。
塩澤祥悟《曇日》入選。(民友6/21, 新報6/21, 朝日5/23)
石川欽一郎《題不明》(美術年鑑S15)
漆畑廣作《小雨の港》《夕凪の海》(朝日5/30)
藤本東一良《天測》(みづゑno.415, 朝日5/24)

5/　鈴木黄鶴遺墨展於浜松市雲林堂書店。
(浜松市史)

・　《肇国創業絵巻》中の中村岳陵《**饒速日命の帰順**》(塔影15-6)

・　清水柳太富士写生画頒布会。《**大宮善能寺から見た富士**》《**大宮黒田村から見た富士**》(駿遠豆13-1, 9,14-1.6*,10,11,12,15-1,2,3,4,5,6,8,11,16-1)

6/　下村晴峰《四宮憲章胸像》完成、下村晴峰・杉本宗一《戦勝観音像》藤枝岡出山に計画。
(新報6/2)

6/4　雨宮峰太郎逝去。享年69歳。(熱海6/6)

6/9　新古書画骨董売立会於静岡倶楽部(-10)。
(新報6/8, 10)

6/14　静岡六染会染色展於松坂屋(-17)。(新報6/14)

6/　下田開港当時の絵巻、専門家に鑑定を依頼。
(民友6/18, 新報6/18)

6/　平尾花笠《老梅》南画展入選。(民友6/20)

6/22　橋本多聞洞新作画展於東京日本橋東美倶楽部(-24)。秋野不矩《若楓》中村岳陵《**紫陽花**》(塔影15-9*, 市井)

6/20　新古書画骨董展於静岡アサヒ食堂(-7/19)。
(新報6/20, 7/19)

6/　樽松玉峰、観世音菩薩像を戦死者遺族に寄贈。
(東日静岡版6/25)

6/27　日本美術院同人13名来静、陸軍病院慰問。
(新報6/28)

7/1　東京額縁業組合創立。長尾一平、組合長となる。
(駿遠豆14-8)

7/1　水彩画三人展於大阪美交社(-5)。石井柏亭、石川欽一郎、真野紀太郎。(美術年鑑S15)

7/5　三宅克己、石川欽一郎、真野紀太郎、竹内鶴之助、水彩パステル展於銀座日動画廊(-8)。
(美術年鑑S15)

7/5　春の尚美店東京日本橋東美倶楽部(-7)。
中村岳陵《花菖蒲》鏑木清方《朝顔日記画冊》(市井)

7/6　第1回聖戦美術展於東京府美術館(-23)。
相曽秀之助《傷つける伝書鳩》漆畑廣作《愛機の整備》《整備》北川民次(招待)《銃後の少女》藤本東一良《初夏の境内》二重作龍夫《子供と兵隊》《花と兵隊》(出品目録)

7/8　宮崎井南居東西大家新作画展於大阪高島屋(-13)。中村岳陵《つゆばれ》(市井)

7/　静岡日華親善殿に、渡辺晨畝、作品、画冊を寄贈。
(民友7/9)

7/　椿椿山《高久靄崖像》重要美術品に指定される。
(読売静岡1,2版, 遠州版7/15)

7/21　塩澤祥悟個展於島田秋田屋(-25)。
(民友6/21, 7/23)

7/　保田龍門、吉田松陰像製作者に決定。
(読売静岡2版7/25, 民友7/26, 東日静岡版5/5, 7/25, 10/31, 新報7/29)

7/25　秋野不矩個展於大阪大丸(-30)。(美術年鑑S15)

7/26　大森桃太郎富士山画展於東京銀座資生堂(-30)。
(駿遠豆14-6, 東日静岡版7/27)

7/29　北村明道個展於松坂屋(-8/2)(民友7/30)

7/30　清水柳太、富士登山。(駿遠豆14-9, 10)

8/1　夏季洋画講習会於静岡師範学校(-5)。七凡社黒耀会共催・県美術協会後援。
講師:斉藤与里。(民友7/20, 新報7/20)

8/1　第8回夏期図画教育講習会於大分師範学校(-4)。
講師、赤城泰舒。(みづゑno.416)

8/9　静岡聖戦美術展於静岡松坂屋(-16)。
(美術年鑑S15)

8/11　久能山宝物館を狙った盗賊逮捕される。
(新報8/12)

8/　清水柳太、富士山で体調を崩し大宮町佐野病院に入院加療中。(読売静岡1版8/27, 新報8/28, 駿遠豆14-10)

8/　高山晴夫切り絵実演於松坂屋(-27)。
(新報8/23)

・　細井繁誠絵画塾開設。(民友8/29, 新報8/29)

9/　《藤枝みやげ》(鳥瞰図)完成。
(新報9/1, 民友9/2)

9/1　静岡彫漆会発会式於静岡市商工奨励館。
(民友9/1)

9/2　第26回二科展於東京府美術館(-10/4)。
水野欣三郎(会友)《**興亜の聖火**》(美術年鑑S15)
水野欣三郎、二科推奨。(読売遠州版9/6)
浅井行雄、初入選。(東日遠州版9/1)
梅原英子《満州の河》北川民次《大地》《**ゆあみ**》永井武夫《薄氷》浅井行雄《首》水野欣三郎(会友)《興亜の聖火》
(美術年鑑S15, 出品目録)

9/2　第26回院展於東京府美術館(-10/3)。
中村岳陵《**流紋**》(美術年鑑S15, 塔影15-10)
関曄明、関青璋、入選。(民友9/6, 新報9/1)
小栗正、入選。(東日静岡版・遠州版9/2)
小栗正《薫染》関曄明《熱帯植物と少女》関青璋《植込》中村岳陵(同人)《流紋》藤井白映《菊》(出品目録)

9/　白星会洋画展第3回展。(民友9/14, 新報9/14)

9/19　石川欽一郎水彩画新作展於日本橋三越(-22)。
(朝日9/22, 美術年鑑S15)
9/　飯塚伝太郎、小野田羽陽《鷹図》発見。
(読売静岡1,2版9/20)
9/20　平野竹逸逝去。(東日静岡版・遠州版9/22)
9/21　都築真琴個展。(美之国15-10)
9/23　岡田三郎助逝去、享年718。(美術年鑑S15)
9/　タイより帰国の三木栄来静し、浅間神社に壁画模写を奉納。(読売静岡1,2版9/29)
下村晴(聲)峰《日本武尊像》焼津に建立の予定。
(民友9/27, 新報9/27)
10/1　大城鎮雄、生徒作品展於三島高等女学校(-3)。
(読売静岡2版9/26)
10/1　標語書方展覧会於松坂屋(-4)他。
(読売静岡版10/1)
10/7　曽宮一念淡彩画展於大阪松坂屋(-12)。
(美術年鑑S15)
10/7　第109回日本美術協会展於東京上野日本美術協会(-24)。中村良作(式部)、入選。(民友10/10, 読売静岡版10/6)
10/10　本田庄太郎逝去。享年46歳。(浜松市史)
10/16　第3回新文展於東京府美術館(-11/20)。
渋川駿二、初入選。(読売静岡2版10/12)
川崎武雄、初入選。(読売静岡1,2版, 遠州版10/11)
青木達弥《読書》赤城泰舒(無鑑査)《**城山**》石川欽一郎(無鑑査)《穂高朝晴》小栗哲郎(無鑑査)《久能山東照宮》柏木俊一(無鑑査)《海》勝間田武夫《庭先》栗田雄(無鑑査)《秋意》渋川駿二《海辺》細井繁誠(無鑑査)《**画家と家族**》井戸義夫《猟友》澤田政廣(無鑑査)《観自在身》杉本宗一《思い出》和田金剛《月弓》川崎武雄《和染二曲屏風「飛躍」》二橋美衡(無鑑査)《真鍮蝶文花瓶》(みづゑno.419, 出品目録)
10/20　童土社版画展覧会第10回展於田中屋(-22)。
(同展目録)
10/21　芹澤舟仙遺作展於沼津商工会議所(-22)。
(読売静岡2版9/28, 10/22)
10/26　中村良作、《娘道成寺》《鷺の舞》(日本美術協会展入選作)を、東海自動車会社に寄付を申し出て、川奈観光ホテルに掲げられる。
(読売静岡1版10/27)
10/29　静岡県教員作品展覧会第11回展於教育会館。
(民友10/29, 31, 新報10/31, 11/1, 2, 3)
11/1　中部日本陶芸展於松坂屋(-6)。(新報10/31)
11/1　第1回霜林会展於東京銀座資生堂(-5)。
曽宮一念《岩礁》《**白樺**》*
(アトリエ11-12, 美之国15-12, みづゑno.421*)
11/1　第2回蒼人会展於東京銀座紀伊国屋(-5)。
梅原英子《**コスチューム**》(みづゑno.421, 駿遠豆16-)
11/6　静岡図案人第1回展於松坂屋(-9)。(新報11/8)
11/7　中村岳陵個展於日本橋三越(-11)。《**潜鱗**》《**豊穣**》《**花王**》《**青昼**》《**山かひの春**》《**山ふところ**》《**遅日**》《**微風に咲く**》《**雪野**》《**秋近**》
(美之国15-12, 塔影15-12, アトリエ16-13, 読売静岡1,2版11/10)
11/7　東京会秋季展於東京芝東京美術倶楽部(-9)。
中村岳陵《春蘭》(市井)
11/13　栗田九品庵秋季東西作家新作画展於東京芝東京美術倶楽部(-15)。
秋野不矩《**秋興**》(美之国16-1*, 市井)
11/23　第3回一水会展於東京府美術館(-12/5)。
矢田部穂柄《いで湯》入選。(東日静岡版11/24)
赤城泰舒《夏の桜島》(出品目録)
11/23　清一周、第4回大潮会展於東京府美術館(-12/4)入選。(民友11/25)
11/25　近藤浩一路第5回個展於東京日本橋高島屋(-30)。
《**旦潮**》《**柿若葉**》《**野苺**》《**白日**》《**嵯峨春光**》《**早旦**》
(塔影15-12, 美之国15-12, 16-1)
12/1　三越新作日本画展於東京日本橋三越(-7)。
近藤浩一路《風景》中村岳陵《春告》(市井)
12/1　石川欽一郎水彩画近作展於大阪美交社(-5)。
(美術年鑑S15)
12/1　杉本徹道翁追善清雅会於浮月。
(新報11/29, 12/2, 民友11/29)
12/2　東西大家新作画展於東京芝東京美術倶楽部(-5)。
中村岳陵《冬暖》(市井)
12/2　竹内蘭山作品展於田中屋。
(読売静岡1,2版, 遠州版11/28, 遠州版)
・　松本栄亮《吉田松陰》陶土像他話題となる。
12/3　長尾岳陽1周忌。(駿遠豆14-12, 15-1)
12/3　甲賀義成、帰還。(民友12/1, 4, 新報12/4)
12/5　松島画舫秋季新作展於東京日本橋東美倶楽部(-7)。中村岳陵《豊穣》秋野不矩《椿》(市井, 美術新論9-1)
12/7　第8回日本版画協会展於東京府美術館(-14)。
大城貞夫《湖の秋》《湖の朝》《面など》《満州娘》小川龍彦《箱根大涌谷》小泉癸巳男(会員)《あさがほ》《おもとの花》中川雄太郎(会員)《裸婦》《警防団の人々》《K荘の庭》中村岳《夏》松永茂[栗山茂](会員)《北老嶺附近》《新京小盗市》(出品目録)
12/9　高島屋現代名家新作画展於東京日本橋高島屋(-14)。秋野不矩《椿》近藤浩一路《鱚釣》中村岳陵《春待》(市井)
12/12　東西名家新作展於東京日本橋東美倶楽部(-14)。
中村岳陵《冬朝》(市井, 塔影16-2)
12/13　曽宮一念洋画個展於大阪美術新論社画廊(-17)。
(美術年鑑S15)
12/15　ポーランド写真展於松坂屋(-17), 於浜松市公会堂(19-21)。(読売静岡版12/16, 20)
12/18　戸田観美堂新作画展於東京日本橋東美倶楽部(-19)。秋野不矩《雪》(市井)
12/　高木吉武《静岡風景》連載。(民友12/19, 22, 25, 28, 30, S15.1/12, 15, 22, 29, 31, 2/2, 5, 9, 12, 14, 16, 23, 26, 3/4, 6, 13)
12/19　関尚美堂展於大阪そごう(-23)。
中村岳陵《冬朝》(市井, 塔影16-2)
12/21　橋本多聞洞新作画展於東京日本橋東美倶楽部(-23)。秋野不矩《雪晴れ》中村岳陵。(市井)
12/　中村岳陵、法隆寺壁画模写の一員に選ばれる。
(東日静岡版12/22)
12/　小杉彦作、日満興亜書道展入選。
(東日遠州版12/24)

昭和15年 1940

1/　浜松の宮本甚七、竹内栖鳳の栖鳳館を計画。
(東日遠州版1/6)
1/　小川龍彦、静岡民友新聞「郷土炉辺譚」挿絵連載。
(民友1/12, 15, 22)
1/9　栗田九品庵東西名家日本画展於神戸大丸(-14)。
中村岳陵《**寒牡丹**》(畫室7-2* 市井)
1/13　平尾花笠個人展於松坂屋(-16)。(新報1/14)
1/14　静岡大火。寶台院他数々烏有に帰す。
(読売静岡1,2版・遠州版2/24, 東日静岡1,2版1/24, 遠州版1/19, 新報1/18)
1/20　第17回白日会展於東京府美術館(-28)。
塩澤祥悟《緑の頃》《川畔展望》
山道栄助《港》《街》(出品目録)
山道栄助、会員推挙。(美術年鑑S16)
2/11　全国官国幣神社頭絵図展覧会於一宮小国神社。
(新報2/10)
2/14　第27回光風会展於東京府美術館(-3/3)。
赤城泰舒《秋の山》石川欽一郎《利根川河口》藤本東一良《H氏と家族》(出品目録)
2/　保田龍門《吉田松陰像》試作完成。
(東日静岡1,2版2/14, 民友2/15)
2/17　青甲社展於東京銀座資生堂(-19)。
秋野不矩《**春**》(塔影16-4, 美之国16-4)
2/20　菊池塾展於東京銀座資生堂(-22)。
井上恒也《**冬暖**》(塔影16-4, 美之国16-4)
2/　《江川担庵胸像》頒布会。(読売静岡版2/25)
2/24　小倉右一郎、柴山清風《興亜観音》開眼式於熱海伊豆山。
(美術年鑑S16, 読売静岡AB版, 遠州版2/20, 23, 24, 25, 熱海S14.6/29, 7/26, 11/11, 15, 新報S14.6/26, 7/9, 29, S15.2/10, 13, 9/17, 10/17)
2/　沖六鳳、三島にて山本玄峰老師に参禅。
(新報2/27, 民友2/27)
2/26　曽宮一念素描淡彩展於神戸画廊(-28)。
(美術年鑑S16)
3/　森山三郎、下田湊海軍病院を慰問。(民友3/8)
3/6　第1回三春会展於東京日本橋三越(-10)。
中村岳陵《冬暖》(市井, 美之国, 16-4, 塔影16-5)
3/8　第36回太平洋画会於東京府美術館(-20)。
漆畑廣作《アツコーデオンを持つA君》(出品目録)
3/12　近藤浩一路絵画展於名古屋松坂屋(-16)。
(美術年鑑S16)
3/14　第10回独立美術協会展於東京府美術館(-24)。
斉藤準児《動物標本》入選。
(民友3/13, 読売静岡A版3/10)
影山静子《温室》山道栄助《流出地蔵》《仏爺》斉藤準児《動物標本》(出品目録)
3/23　第8回東光会展於東京府美術館(-4/3)。吉野藤太郎、高畠茂雄《記念撮影》入選。(新報3/26, 28, 民友3/26, 28, 読売静岡A版3/28)

3/24　茨木猪之吉、彼岸参り。(駿遠豆15-4)

3/26　東西名家新作邦画展於東京日本橋高島屋(-30)。
秋野不矩《春》(市井)

3/27　第15回国画会展於東京府美術館(-4/5)。
鈴木至朗、第15回国画会褒状受賞。(民友4/7)
柏木俊一(同人)《**早春**》(美術年鑑S16)
旭五良《魚群》柏木俊一(同人)《早春》渋川駿二《静日》《海辺の枇榔樹》《温室》山村誠(同人)《椿》《立秋》大城貞夫《秋終る》《新秋》中川雄太郎《鳥遊ぶ》鈴木至郎《獅子図コタツ掛》《自由画テーブルセンター》《泰山木の花図変形テーブル掛》《雲梅竹図ハンドバック》《四袋図ハンドバック》増田邦太郎《おんぼこ模様丸テーブル掛》《静物》(出品目録)

3/27　第2回現代水彩画展於東京日本橋三越(-31)。
石川欽一郎《**甲斐駒残雪**》(みづゑno.426)

3/30　栗田九品庵東西大家新作画展於東京芝東京美術倶楽部(-4/1)。中村岳陵《水温む》(美之国16-6, 塔影16-6, 市井)

3/　清水柳太、高木背水、下田に滞在。(駿遠豆15-4)

4/8　第18回春陽会展於東京府美術館(-17)。
井上重生、吉村真喜、山崎利津子入選。
(民友4/7, 読売静岡AB版4/9, 読売遠州版4/9)
青木達弥《花》《白浜風景》井上重生《居留地の家》栗田雄(会員)《欅》曽根靖雅《風景》中村万平《踊》山崎利津子《アマリリス》吉村真喜《海岸》(出品目録)

4/　松島忠雄の作品、浜松市より陸軍部隊に寄贈。
(東日遠州版4/13, 読売遠州版4/13)

4/16　戸田観美堂第10回新作画展於東京日本橋東美倶楽部(-18)。
秋野不矩《麗春》(美之国16-6, 市井)

4/18　栗原忠二遺作展於大阪美交社(-22)。
(美術年鑑S16)

4/19　第27回日本水彩画協会展於東京府美術館(-30)。
石川欽一郎《愛宕山春靄》赤城泰舒《**海の見える庭**》(みづゑno.427)

4/21　日本画大展覧会於大礼記念京都美術館(-5/15)。
秋野不矩《**陽**》関曄明《春の装ひ》出品。
(塔影16-6,, 美術年鑑S16)

4/25　六潮会十周年展於東京日本橋三越(-30)。
中村岳陵《双樹》(美術年鑑S16, 美之国, 16-6)

5/1　第5回京都市美術展於京都美術館(-15)。
曽宮一念(招待)《**富士**》(みづゑno.428)

5/　荒井勝衛《富士山》写真、汪政権に寄贈される。
(東日静岡1版5/2)

5/7　東京会春季展於東京芝東京美術倶楽部(-9)。
秋野不矩《五月》(市井)

5/9　岳陽記念美術館建設在京関係者会合於東京長尾一平宅。(駿遠豆15-6)

5/14　第4回律動展於東京銀座紀伊国屋(-16)。
藤本東一良《**H氏像**》(みづゑno.428)

5/17　赫土社第9回展於清水市材木組合(-20)。陸軍病院に油絵8点寄贈。(新報5/25)

5/18　静岡県美術協会美術展第6回・二千六百年奉祝記念展於教育会館(-22)。
(目録、新報5/21, 民友5/19, 21, 駿遠豆15-7)
「二千六百年奉祝、静岡大火被災者、白衣勇士の慰労等を兼ねて、会員及び招待作品を陳列した。」(美術年鑑S16)

5/23　商業美術ポスター第3回展於浜松松菱百貨店(-26)。(新報5/18, 19, 21, 23, 24, 29)

5/23　松島画舫春季展於東京日本橋東美倶楽部(-25)。
秋野不矩《けし》(市井)

5/24　第4回海洋美術展於東京日本橋三越(-30)。
塩澤祥悟《東の海》入選。(新報5/26)
漆畑廣作《題不明》(朝日5/24)
藤本東一良《ウラカス噴火島を望む》朝日新聞賞受賞。(朝日5/24)

5/　正統木彫家協会結成。澤田政廣、長澤幸夫、和田金剛、鈴木国策他。(駿遠豆15-6)

5/　水彩連盟結成。水野以文参加。

6/11　紀元二千六百年奉祝大展覧会於浜松松菱。
(東日遠州版6/11, 新報6/12)

6/14　松島達太郎個展於浜松谷島屋(-18)。
(民友6/13)

6/15　三越日本画小品展於東京日本橋三越(-20)。
近藤浩一路《谿音》(市井)

6/16　近藤浩一路第3回新作展於大阪高島屋(-19)。
(美術年鑑S16)

6/26　鈴木至朗染色工芸品展於東京新宿三越(-30)。
(美術年鑑S16)

6/30　中島東洋《宮本甚七像》除幕式。
(読売遠州版6/27, 新報9/26)

7/6　尚美展於東京日本橋東美倶楽部(-8)。
秋野不矩《朝顔》(市井)

7/　斉藤文八《暁の富士》熱海青年団よりヒトラー総統に献上。(読売静岡B版7/10, 東日静岡1,2版・遠州版7/10, 11)

7/13　小国重年遺墨展覧会於一の宮小学校(-14)。
(新報7/14)

7/19　長尾嶽陽翁彰徳碑建碑式於玄忠寺。
(目録, 駿遠豆14-12, 15-9, 新報7/19, 民友7/19)

7/19　長尾嶽陽翁彰徳碑落成記念展覧会於静岡市商工奨励館(-21)。
(目録, 駿遠豆15-9, 新報7/19, 民友7/19)

7/23　石川欽一郎水彩画展於大阪美交社(-29)。
(美術年鑑S16)

7/24　柳田華紅《天竜川大観》展於二俣高女(-25)。
(新報7/10, 21, 読売遠州版7/13, 東日遠州版7/10)

7/26　保田龍門、下田にて《吉田松陰像》打合せ。
(新報7/30)

8/1　漫画作品展覧会於静岡市公会堂(-2)。(新報8/1)

8/1　小野鵞堂遺墨展於東京日本橋高島屋(-6)。

8/3　池部釣、岡本一平、細木原青起、宮尾しげを、田中比左良、清水対岳坊来静(-4)。(新報8/1)

8/7　芳芸社展於松菱。(読売遠州版8/9)

8/11　《神武天皇像》除幕式於三島陸軍病院。
(東日静岡1,2版・遠州版4/3, 7/28, 読売静岡B版5/24, 8/13)

8/17　田中南陽作品展於静岡県農会(-18)。南陽、村岡萌芽の揮毫。(新報8/17, 18)

8/25　県下中小学校教員並に児童作品展覧会於県教育会館・静岡師範附属小学校(-28)。(新報8/27)

8/28　松影会第3回例会、紀元二千六百年奉祝展座談会於城内東校。(民友9/3)

8/28　第27回二科展於東京府美術館(-9/20)。
梅原英子《緩流(北満)》北川民次(会員)《**南国の花**》《琉球首里城外の森》《薔薇》永井武夫《雪国の子達》浅井行雄《女立像習作》水野欣三郎(会友)《**新しき道**》(美術年鑑S16, みづゑno.431, 出品目録)

9/1　第27回院展於東京府美術館(-18)。
関曄明《谷間の花》(出品目録)

9/　青木清太郎《護国神社完成図》献納。
(東日静岡1,2版9/3)

9/8　静岡書画道社全商品入札会(-10)。(新報9/6)

9/　平口勝雄《霊峰富士》西益津在郷軍人会より陸軍病院に献納。(新報9/6)

9/14　民族の祭典スチル写真展於浜松松菱(-19)。
(民友9/16)

9/　細井繁誠《十字路》制作。奉祝展に出品。
(東日静岡2版9/15)

9/　七凡社展第2回展(-10/1)。(目録, 新報9/29)

10/1　紀元二千六百年奉祝展於東京府美術館(-24)。
柏木俊一、山村誠、渋川駿二、細井繁誠入選。
(民友9/28, 新報9/28[一部欠])
小倉右一郎《**山田長政**》(美術年鑑S16)
秋野不矩《**朝**》赤城泰舒《霧ひらく》石川欽一郎《白馬山下の春》小栗哲郎《山池》柏木俊一《晩冬》北川民次《岩山に茂る》栗田雄《南伊豆の海》渋川駿二《檳榔樹》曽宮一念《姥子の雪》野田半三《湖畔の朝》藤本東一良《貝殻図譜》細井繁成《早春》山村誠《帰鴉》山道栄助《松林》杉本宗一《泉》長澤幸夫《夏宵》和田金剛《愛撫》稲木春千里《火鉢》二橋美衡《彫金飛鶴文筥》前田南斎《チシヤノ木彫嵌衝立》
(塔影16-12, 美之国16-12, 出品目録)

10/　田中武《徐州奎山塔》陸軍病院熱海分院に寄贈。
(読売静岡B版10/16)

10/　江坂純雄、龍澤寺に長八の作品を寄贈。
(読売静岡B版10/24)

10/23　東京大学写真連盟撮影お茶の静岡写真展於田中屋(-28)。(東日静岡1,2版10/22, 25)

10/26　鈴木東光主催新作日本画展覧会於清水市相生町医師会館(-27)。(新報10/27)

10/26　曽宮一念洋画個展於大阪美術新論社画廊(-30)。
(美術年鑑S16)

11/1　第2回霜林会展於東京銀座資生堂(-5)。
曽宮一念《朝鮮蘇》《麦秋》
(美術年鑑S16, 造形芸術2-12, アトリエ17-14)

11/6　近藤浩一路第6回新作画展於日本橋高島屋(-10)。(美之国15-12, 16-1, 美術年鑑S16)

11/　韮山中学、彦坂美術館建設計画。近藤浩一路、柏木俊一、栗原誠、栗原忠二、澤田政廣、和田金剛他。(新報11/10, 読売静岡B版12/21)

11/10　小川龍彦蒐集民芸品展示於小川龍彦宅(-11)。

静岡近代美術年表稿　昭和戦前編　3

（新報11/9）

11/13　中村岳陵近作鑑賞会於東京日本橋株式取引所。
（美術年鑑S16）
《金太郎》《鶯来》（美術年鑑S16，塔影16-12*）

11/15　長尾岳陽翁頌徳碑建碑式於東京高輪泉岳寺。
（駿遠豆14-12，15-12）

11/16　明治維新志士遺墨展於静岡商工奨励館（-20）。
（新報11/10，11，12，13，14，15，16，17，19）

11/19　第1回正統木彫家協会展於大阪三越（-23）。
澤田政廣他。（美術年鑑S16）

11/19　加納・近藤個展於静岡商工奨励館（-20）。
（新報11/19）

11/20　東京会奉祝新作画展於東京芝東京美術倶楽部（-22）。中村岳陵《季秋》秋野不矩《春》（市井）

11/21　童土社創作版画展覧会第11回於浜松谷島屋（-24）。（目録）

11/21　三宅克己、石川欽一郎水彩画展於数寄屋橋日動画廊（-25）。（美術年鑑S16）

12/1　第1回水彩連盟展於東京日本橋三越（-5）。

12/3　三越新作日本画展於東京日本橋三越（-7）。
中村岳陵**《待春》**（市井，塔影17-2*）

12/　松影会第6回例会於城内東校。（民友12/10）

12/10　鶴田吾郎、坂田一草、中村直人、富士大宮視察。富士美術道場計画。（読売静岡B版12/12，朝日12/12）

12/10　第14回新構造社展於東京府美術館（-23）。
倉本七郎《少年の希望》《大森風景》（新報12/19）

12/13　第9回日本版画協会展於東京府美術館（-20）。
大城貞夫《ガード》《夕映》《夏終る》《薄暮》《別れの日》小川龍彦《災禍の静岡》小泉癸巳男（会員）《奉祝花電車》《五月亀戸天神》《濱町公園の残雪》《戸越銀座駅》《植物園の庭》《木場の河筋雪》《西の市》中川雄太郎《紅葉》《うみべ》《小春日和》中村岳《春の賊》《赤い帽子の少女》山口源《秋の山》《死火山》（出品目録）

12/18　芹澤銈介第2回工芸展於大阪阪急百貨店（-22）。
（美術年鑑S16）

12/19　橋本多聞洞東西大家新作画展於東京日本橋東美倶楽部（-21）。
秋野不矩《木蓮》（塔影17-3，市井）

12/23　大川武司個展於東京銀座三昧堂（-27）。《土》
（みづゑno.435*，美之国17-2，美術年鑑S16）

須田国太郎のセザンヌ論に関する一考察

上原近代美術館　学芸員　齊藤 陽介

はじめに

京都に生まれた洋画家・須田国太郎（1891-1961）は、はじめ学者としてその歩みをはじめた。彼は京都帝国大学で深田康算（やすかず）のもと美学美術史を学び、大学院では「絵画の理論と技巧」を研究テーマとした。1918年、大学院を中退して翌年渡欧、スペインを中心にヨーロッパ各国を回っている。1923年、帰国した須田は和歌山高等商業学校や母校である京都帝国大学で講師として働き、1930年代より画家として本格的に活動するようになる。画家として活動し始める1930年代以降、須田は数多くの文章を残し、その数は200篇以上にも上る。それらの多くは美術に関するものであり、その内容は美術史や絵画技法、美術思想が中心となっている。本稿では、須田国太郎のセザンヌ論の検討を通じて、彼の芸術論形成に影響のあったと考えられる思想の一端を明らかにしていく。これにより、須田の芸術論を知的交流のなかで立体的に理解していく端緒としていきたい。

第1章：須田国太郎のセザンヌ観

本章では須田がセザンヌについて言及した諸論を検討する[1]。須田がセザンヌに言及した文献は10を超える[2]。彼が論じた芸術家には、ヴェネツィア派の画家ティッツィアーノやティントレット、17世紀のプッサン、ルーベンス、スペインで活躍したエル・グレコ、ゴヤ、19世紀ではクールベや印象主義、そしてイタリアのセガンティーニなど様々であるが、中でも須田はセザンヌを評価していた。以下では、彼のセザンヌに関する代表的な論考である「セザンヌの美学」（1939年、以下『美学』と略）と「セザンヌと自然」（1939年、以下『自然』と略）を中心に、彼のセザンヌ論をみていきたい。

須田がセザンヌを評価する理由は『自然』において端的に述べられている。それは、セザンヌが西洋近代絵画にもたらした根本問題は、「自然に対しての新しい見方」を生み出したことである（『自然』195頁）。須田はセザンヌが、ルネサンスから印象派へと至る賦彩の取り扱いを綜合した色彩によって、その新しい見方を達成したと考えていた。ルネサンス絵画が達成した固有色の美しさは、バロック絵画に至って画面全体の明暗統一の達成と引き換えに失われ、ゴヤなどを経て印象派が画面に色彩の美しさを取り戻したという。

須田は印象主義をクールベに代表される19世紀半ばから起こった写実傾向の徹底をめざしたものと考え、特に「光線即ち自然物象の表現を光の下に於いて、これを科学的な分光方法の色彩竝置法」をとったことがその独自な点であるとしている（同、197頁）。一般的に筆触分割と呼ばれるこの手法自体は、印象派以前から用いられていた。印象主義の独創は、当時の光学的な考えの上に実現しようとした点にあり、その手法が自然の色彩的見方を、客観的な再現方法で実現しようとした点で、クールベ等の写実主義を引き継いでいると考える（同、197頁）。

セザンヌは、この印象主義の筆触分割の技法に飽き足らないところがあり、幾分かその技法も用いつつも自身の表現を模索していた。須田はセザンヌが「印象派の開拓した新色彩法によって得た色彩を単なる現象的なものとなすに止めず、物体色を保有しながら全面の色彩諧調、即ちmodulationを完からしめようとした」と述べている（同、198頁）。それを須田は、画面を明暗によって統一したバロック絵画と、色彩を取り戻した印象主義が残した課題に対する一つの解決とみていた。

そして、セザンヌは印象主義の技法や自身で工夫した技法をもちいて、変化する自然の現象的な色彩の下にも「不動の物体色の把握」を求め（『美学』209頁）、「一つ一つの個体として、その不動の姿に於いて把握しよう」とした自然を実現しようとした。ここでセザンヌはそのように捉えた自然を、「個体の表面よりも、その上下左右の拡がりよりも、更に奥行に於いて、即ち第三ディメンションに於いて、換言すれば深さに於いて表現」しようとした（同、210頁）。

「写実主義の存在理由」（1935）で須田は、「模写さるべき実なるものは現実的真でなければ、写実主義は存在しない」として、「模写説は如何にしてその模写的難点を離れることが出来るか、又そして現実背離の危機をふせぎ得るか。これの解決によって写実主義の存在は理由づけられるのである。それは現実美の問題に移って来なければならない」と述べ、「写実主義に於いては、作家は自然に対して最も素朴な態度をとるところにその特質があるわけであるが、同時にその美意識と一致しているものでなければ素朴模写説に陥るのみである。これをはなれた自然模写と云うことは決して芸術ではない。無用の技術である。写実主義をして写実的ならしめることは現実的真をその芸術的真と一致せしめることに在る」と述べている。そしてそれを達成した例として、須田はセザンヌの名を挙げている。

ここまで須田のセザンヌ論を概観し、その中から重要な記述をいくつか確認した。それらを列挙すると、須田はセザンヌが、(1)「自然に対しての新しい見方」を開拓したことを評価し、セザンヌがそのために、(2)自然を一つ一つの個体として不動の姿において把握しようとしたと述べ、(3)そのように把握された自然を「深さ」に於いて表現しようとし、(4)印象派が開拓した科学的な筆触分割によって得た色彩を現象的なものに止めず、「物体色を保有しながら全面の色彩諧調」を完成しようとしたと考えている。

このような須田のセザンヌ評形成において、(1)については、須田が卒業論文『写実主義』（1912）で「芸術の現実産出」機能として、ドイツの法律家・芸術学者コンラート・フィードラーや、フリードリヒ・シェリングの思想をベースに述べたことがそのまま下敷きになっていると考えられる[3]。以下ではまず(4)について論じていきたい。それは、須田の美術史観の根幹にかかわる問題をも孕むと考えられるからである。

第2章：須田国太郎の色彩観

(4)の問題において筆者が着目したいのは、現象的色彩と（不動の）物体色という概念である。このような変化する色彩と変化しない色彩は、既に卒業論文『写実主義』の末尾でも述べられている。その後須田は、これらの概念を自らの西洋美術史観を披歴するかたちで、論考「色彩と明暗」（1936）の中で説明する。まず須田は西洋絵画においては光の表現が最も重要視されてきたという見解を述べ、「光なくして我々は物象をみることは出来ない。この光、そして物象、この関係がいかにあらわされてゆくか、それは西洋画法の重大なる課題であり、その進展は実に西洋絵画の根幹をなすものといっても差支ないのである」（『色彩と明暗』54頁）[4]という。そして、「故に限定されたる光の下に於ける色は、何らかの程度に於て変化されたる色調を示している。変化である以上変化されざるものを予想しているのであろうけれども、現象としてあらわれたる色は事実は刻々変化しつつあるのである。この見方に対して、もののもつ色、動かない色、変化相に於て見ない色を求めようとする方向もあることが考えられるのである」（同、55頁）とし、「この二面は、やがて、東西両洋の絵画の根本的な立場の相違とも云い得られる」と、東洋画との対比の中で西洋画を説明している[5]。

続けて須田は「ローカル・カラー」という用語を色彩の説明に導入する。ここでいうローカル・カラーとは、現象的色彩とも、もののもつ色・変化しない色の「いずれでもあり得ると同時に、いずれにてもない。中間的な頗る無反省な態度から見た常識的のものである。この見方が最も最初にあらわれてくる色感の原始状態なのである」（同、55頁）。「ただ素朴に見たままを、ものの色ときめてかかる」態度、「雪は白い、炭は黒いの類である」とする態度で、見出された色彩が、ここで須田のいうローカル・カラーである。そして、「これが如何に処理されるてゆくか、いかに純粋にされてゆくかが絵画の色彩法の発展を跡付けるもの」（同上）であると須田は考えていた。

ルネサンス時代においては、各々の色彩の美しさそのものは大いに発展したが、各色彩の関係性、色彩諧調の統一はなされてはいないと、須田は考えている。ここでは、ローカル・カラーの処理が十分にされておらず、光線の変化による色彩の変化が十分に考慮されていない。続くバロック時代においては、色を真の明暗の深き諧調のうちに表現しようとし、この点で色彩は、「ある限定されたる光沢下にある色の変化相」（同、57頁）を現すことになった。しかし、ここでは現象的色彩とくに明暗諧調の統一によって、ローカル・カラーと色彩の豊富さは失われることになった。そのモノクロームに近づいた色彩表現に、印象派は筆触分割によって色調明暗諧調の豊富さを取り入れた。しかしそれは、現象的な色彩にとどまっている。

印象派の革新に触れた後で、須田は、このような科学的な（客観的な）、明暗レアリスムの発展が、もののもつ、いわゆる動かぬ色（変化しない色）を失わないかを懸念している。私たちは物を見るとき、常にある限定された光の下で色彩を認識するのであり、その客観的事実においては、須田のいう「変化せざる色彩」、「動かざる色彩」を見ることはできない。しかし須田は、このような動かざる色は明暗の変化をうけても厳然として見られていなければならないとする。それは、先に引用したように、変化した色彩とは、変化しない色彩を前提して初めてなりたつからであり、「変化された外相を真実の色と

みるとき色は失われたのである」(同、59頁)と須田は考えるのである。

ここで須田の述べる動かざる色とは、厳密にはローカル・カラーのことではない。ローカル・カラーは光線の変化を考えず素朴に見たままを決めてかかった、色彩であり、色感の原始状態である。須田は雪を例にとり、「雪を灰色に表わしたことが、その場合、いよいよ雪の白さを感ぜしめるならば、そのいよいよ白いという、その白さが、雪のもつ動かぬ色である」(同、59頁)と述べて、「ここでローカル・カラーは、灰色ではなく白色である」(同上)としている。

これは恐らく、絵画に表現された色彩としての灰色が、あくまでも雪のローカル・カラーとして感じられる「白」という色を、鑑賞者に感じさせることが重要であり、そのような「芸術的変更(ウムフォルムング)」が必然的になされる場合、その表現を須田は是としたといえようか。この点で、絵画はあくまでも自然から離れておらず、彼がたびたび述べる独自の「写実主義」概念と密接に関係しているであろう。

「色彩と明暗」で展開された議論は、「固有色(ローカル・カラー)」(1942)において展開されている。須田はここで、ローカル・カラーとはいわゆる「地方色」ということではなくとことわってから、「物自体のもっている色、即ち橙が橙色」(『固有色』60頁)だと述べる[6]。「色彩と明暗」における定義とは意味が異なっていることに注意したい。そこで須田は、「色彩、ことに自然の色彩を表現しようと努力してきた欧羅巴の絵画の変遷は、全くこの固有色探究の歴史でもあるといえる」(同上)と述べている。須田は、ここでも同様の主張を繰り返しながら、「いかに強い光線の為め暗い影を宿しても、橙の橙色が橙から抜け出したとは思われないのである。橙色が光線の為め変相しているのである。(中略)陰の色は橙色を予想せずにはあらわれ得ない色なのである。その明部でも同様である」(同、65頁)と述べている。モネの積藁を例に出しながら、朝昼晩と異なる光線のもとで描かれた積藁であっても、「その背後に同じ一つの積藁が我々の前に置かれてあるのである。この一つの根本的な積藁、それは、たとえ何かの条件の光線下にある多少の変相を伴うもの以外に、実相を事実上見られぬにしても、この一つの、いずれの積藁にもその変化の背後に在る積藁を、認めざるを得ないのである」(同、66頁)としている。そして「固有色、物の色のイデーとして、永劫に健在するものといわねばならない」(同上)としている。

「変化しないものを前提として、変化するものが存在する」というのは、彼がしばしば見せる思考パターンであることに注目したい。例えば、「構図について」(1949)という小論の中で、構図における水平線を論じた箇所でも同様の考えを見出すことができる。そこでは水平であるはずの水面が斜めに描かれたことを例に、その絵では水平線が斜めにあるべきものとは思わせないとし、構図として水の速度を感じさせることに「是非必要」であるからと述べる。須田はここで、「われわれ水平を要求している。しかしその水平の要求を覆されること無くこの不安定を許している。これが立派な構図となっている。(中略)もう一歩進んで、こうして、一見不安定に見えるもの、ゆがんだもの、それがあやまりであると見えないならば、やはりこれは、ある意味では、新しい安定として見ていると言うことが出来ます」と述べている[7]。また他にも、「超現実というもある一つの現実である。現実よりみたる超現実である。行的というも不合理というも非病的、合理からみていうことである」(『近代絵画とレアリスム』18頁)などいくつか確認することができる[8]。

このような須田の思考パターンに沿って述べられることは、言葉の定義上では成り立つかもしれないが、とりわけ色彩に関する記述については、現実世界においては成り立ちえないであろう。光なくしてものを見ることはできず、ものが見えたとしてもそれを可視化する光は現実世界においては、例え自然光であっても常に限定されたものとならざるを得ないからである。

須田の発言の背景には、2つの思想が想定される。1つは、フィードラーの芸術論であり、「芸術の現実産出」機能に基づき、現実において私たちが認識する色彩と、絵画において認識(=表現)される色彩は違うとする考えである。もう1つは、これまでそれほど注目されてこなかったが、古代ギリシア哲学、特にアリストテレスの哲学に依拠している可能性である。

須田国太郎のセザンヌ論に関する一考察

第3章:アリストテレス

須田は卒業論文『写実主義』で、独自の模倣論を論じているが、その核心部分にはアリストテレスの哲学がある。須田の古代ギリシャへの関心の高さやその学識の深さは、日記や彼が学校・大学で古代ギリシャ美術について講じていることからもうかがえる。

アリストテレス(B.C.384-B.C.322)といえば、古代ギリシャを代表する哲学者であり、「万学の祖」とさえ呼ばれる西洋の学問体系成立に大きな影響を及ぼした人物である。彼はプラトンのアカデメイアに17歳で入り、師のもとで20年を過ごし、プラトンの死後は各地を回り、後のアレクサンダー大王の教育係を務めた。後、アテナイに戻り、リュケイオンに学校を開くも、最後はアテナイを追われ、エウボイアのカルキスにて没した。今日伝えられている彼の著作は講義ノートともいえる草稿であるが、それらが扱う領域は論理学、自然学、倫理学、政治学、詩学と幅広い。

では、アリストテレス哲学における変化の概念を概観したい。アリストテレスは『自然学』の中で変化について、われわれがある事態を何かの変化であると捉えるためには、変化後の状態と、それに相反する変化以前の状態が必要であり、両者が変わったと言いうるにはその変化を通じて存続する何かがなければならないと述べている[9]。生成変化の当のものは「基体」(ヒュポケイメノン)あるいは「素材(質料)」(ヒューレー)であり、変化の前後にある状態とは「形相」(エイドス)である。

須田がどの程度アリストテレスを理解していたかを知ることは、それほど容易ではない。田中美知太郎や今道友信が述べるように、大正時代の日本におけるアリストテレス哲学の受容はまだまだ始まったばかりという状態であった[10]。ただし、須田は京都帝国大学で、深田康算の指導のもと卒業論文を書いている。深田は当時の美学の分野ではパイオニアと呼べる存在であり、アリストテレスについて論文も発表している[11]。また須田自身、卒業論文『写実主義』でアリストテレスの『詩学』によりながら模倣論について議論を行っている。

須田の模倣論を概略すると、見られる客体である対象(自然)は、見る主体である芸術家が、個人の気質(テンペラマン)という制約を通じて認識し、それが絵画な画材の必然的制約を受けた、必然的な芸術的変更のもと表現される、というものである。そして、つくられた芸術作品は新たに創造された自然である。

彼がしばしば芸術表現について「必然的」という言葉を使うのも、有名な『詩学』の第9章にある「[おそれとあわれみを引き起こす]出来事は、予期に反して、しかも因果関係によって起こる場合もっとも効果をあげる」、という記述を念頭においてのことと思われる[12]。さらに、須田は回想を記した「画で立つまで」においても、「卒業論文は希臘の模倣論をとりあつかった。アリストテレスの解釈がどうであろうと、模倣の考えは不死身となって、いつかは現れてくる」、と述べている[13]。模倣論という文脈はあるものの、これまでの須田研究が注目してきたフィードラーではなく、アリストテレスに自らの卒業論文を代表させているのであるのは、彼の芸術観を考える上で示唆的ではないだろうか。

(2)についても、アリストテレスに由来すると思われる。須田は、セザンヌが自然から幾何学的形態を抽象したのではなく、そのように自然を把握したと述べている。この理解は、さまざまな形態を抽象的な形態の変化した状態(形相)とセザンヌがとらえており、そこから、余分なものを削ぎ落とした結果として、幾何学的形態(基体)が表現されていたことをうかがわせる。それは須田のセザンヌとキュビスムの違いの説明によっていっそう明らかになる。キュビスムは自然のさまざまな形態の中から、幾何学的形態という規範をもって表現する点で演繹的な手続きであるが、セザンヌのそれは帰納的である[14]。

では最後に(3)の問題を見ていきたい。ここではセザンヌ絵画の空間性が問題となっている。まずは須田の美術史観の空間に関する記述を確認していきたい。

第4章：須田国太郎の絵画空間認識

「西洋画から日本画を見る−ある講演の手記−」(1947)で須田は、東洋画と西洋画の分かれ目の一つに余白を挙げている。これは、余白という絵画表現(現象)の有無というよりは、その背後にある絵画論理の違いが問題となっている。

西洋絵画はものを、自然の一角におかれたものとして捉えるのであり、そのため根本形式として明暗法と透視法(遠近法)が出現した。それは、明暗法は自然の一角としてものを見るには、光が必要であり、光があればそれが差してくる方向やその強弱を無視することは出来ないからである。また、目の前にあらわれているものは、ある空間の中に広がりと奥行きをもっているのであり、もの同士の前後関係を正確に表そうとする。また、我々の視野は無限に及んでいき、それを表そうというのが西洋絵画伝統の大きな課題の一つである。そうすると遠近法といったものが発達してくるのである。

ここで、もう少し東洋画についてみてみると、東洋画のものの見方の根底に、例えば栗一枝であれば、その中に無限な栗一枝の世界を見ようとし、ものの本質を抽象するような見方である。須田はそのような東洋画の特徴を、余白と素描的性質を指摘している。余白とは、西洋的な意味やもの同士の関係性をもつ色彩を用いない抽象的な空間であり、素描的性質とは西洋的な明暗を持たない抽象的な線である。

これらの須田の絵画観からするに、須田は東洋画の特徴を、人間が科学的には見ることのできない動かざる色彩、物体のイデーとしての固有色を用いて描いたのに対して、西洋絵画は現実美を芸術美との一致を目指す写実主義を原理として、現象的色彩をもちいて描いたと言える。写実的に絵画を表現するに色彩は不可欠であり、須田が暗に線以上に色彩を重視したのもこの点にあるのではないだろうか。

では須田がセザンヌについて強調した、「深さ」において表現するとは、どのように考えられるだろうか。セザンヌ自身、ベルナール宛書簡において「自然は平面においてよりも深さにおいて存在します」と述べるように「深さ」の重要性を述べてはいる[15]。これは面同士の重なり合いを、色彩の諧調によって遠近法とは異なる絵画空間を実現したセザンヌ芸術の核心といえる。この遠近法とは異なった空間認識、空間表現をセザンヌが達成していることを踏まえて、須田はこの「深さ」に注目したのではないだろうか。ここでは植田寿蔵の芸術論との親近性をみることが出来るのではないだろうか[16]。

第5章：植田寿蔵

これまで京都学派における植田は、比較的周辺として扱われてきた。京都学派と呼称する場合、その多くは西田幾多郎を中心に京都帝国大学文学部哲学科(所謂、純哲)で形成された集団を指すといえるだろう。京都学派を論じた文献でも、やはり西田幾多郎や田邊元といった中心人物への記述が多く見られる[17]。

植田寿蔵は須田と同じ美学美術史講座の出身で、須田よりも先輩である[18]。須田と植田の間のエピソードとしては、須田がスペインへ留学中にドイツに留学中の植田を訪ねた他、日本芸術院会員に推挙された折、引き受けるべきかどうかを相談しにも行っている[19]。日本芸術院会員の推挙を受けることについて、後に須田は「学位を受け取るつもりで受けました」というように、大きな決断であった。

植田の芸術論は、西田哲学を下敷きにしつつ形成された。それは西田によって示唆された芸術経験特有の構造を分析することに向かっており、それは一貫して視覚の論理を問うものであった。

植田と須田の芸術論の近似は、例えば水平線に対する分析について見出すことが出来る。須田は「構図について」(1949)という小論の中で、「その絵それだけで一つのものとしてうけ容れられるのには、その中だけで組み立てられている一つの世界がある」のであり、その組立方を構図であると定義する。そして、絵は私たちの視覚に訴えるものであり、視覚を構成する基本条件の例として、左右、上下の広がり、前後のおくゆき、そして水平や垂直を見分ける力をあげている。そして南画などで水平に描くべき水面を斜めに描いた作品を分析しながら、そこで用いられた不安定な構図は、動き(ムーヴマン)をあらわすための非常手段であったと述べる。そしてこの水平(安定)なものを斜め(不安定)に描くことを肯定してみているということは、「われわれが安定なるものを考えているからで、言葉をかえれば、われわれは安定を要求しているという前提の上に行われる」ことであると述べる。これは次の植田の論との近似がみられるだろう。植田の『芸術哲学』の中で、「吾々がある輪郭を水平と見るのは、それが吾々の肉眼に位置するからではない。水平なるものの要求に於て見られるからである」と述べている[20]。また須田が「深さ」において表現したことを強調したように、植田の芸術論においても同様の強調をみることができる[21]。

おわりに

以上までみてきたように、須田のセザンヌ論には従来影響が指摘されてきたフィードラーのみならず、アリストテレスや植田寿蔵の哲学・芸術論との親近性をみることができたであろう。それにより彼のセザンヌ論が、須田の美術史観とも密接に関係していることが明らかになったであろう。本稿においては須田の芸術論を各思想からの影響を中心に概略的な検討を行ったが、今後は須田の受容の仕方など、より細部の検討を重ねることが課題となるであろう。

文末註

1 須田がセザンヌに言及した文献として主に次の11篇がある。カッコ内のページは断りのない限り、須田国太郎『近代絵画とレアリスム』(中央公論美術出版、1963年)の再掲ページである。卒業論文『写実主義』1912年(岡部三郎『須田国太郎 資料研究』京都市美術館、1979年、195頁);「写実主義の存在理由」『みづゑ』1935年5月号(13頁);「セザンヌ片影」『京都帝国大学新聞』1939年6月20日;「セザンヌの美学」『みづゑ』1939年8月号(206-216頁);「セザンヌと自然」『同和』1939年10月号(195-205頁);「油絵の技術」『新美術』1941年12月号(79頁);「我が油絵はいずこに往くか」『みづゑ』1947年11月号(112頁);「近代絵画とレアリスム」『アトリエ』1948年2月号(17頁);「小林和作」『みづゑ』1950年4月(307, 309頁);「ポール・セザンヌ」『美術手帖』No.29、1950年5月(『須田国太郎画集』京都新聞社、1992年、480-481頁);「大原コレクションについて」『美術手帖』1954年4月(289頁)。

須田のセザンヌ論に言及した文献は数多いが、その多くは須田の言葉の引き写しに留まっている。内容に批判検討を加えているものとして、例えば次のものが挙げられる。岡部三郎『須田国太郎 資料研究』京都市美術館、1979年、7, 12, 29-38, 59頁;門田秀雄「須田国太郎論(四)」『構造』、『構造』出版部、1981年、13-30頁;東俊郎「須田国太郎と「動かざる色」」『研究論集』三重県立美術館、1987年、72-103頁;永井隆則『セザンヌ受容の研究』中央公論美術出版、2007年、170-175, 193, 195, 279, 281, 299, 318, 360, 375頁;永井隆則「須田国太郎と西洋近現代美術−孤高か共鳴か?」『美術フォーラム21』第23号、醍醐書房、2011年、pp.153-58;齊藤陽介「須田国太郎の芸術論形成−師・深田康算の影響から−」『須田国太郎−珠玉の上原コレクション−』上原近代美術館、2012年、92-98頁。

なお、須田の日記にもセザンヌの名前を確認できる。岡部、上掲書、85(1921[大正10]年5月12日付日記), 149(1950[昭和25]年2月27日付日記)頁。

2 須田はセザンヌ論で、しばしば彼の手紙の内容に言及している。現在京都大学文学部に寄贈されている須田の旧蔵書(須田文庫)には、リウォルド編集によるセザンヌの書簡集のほか、ベルナール、ギャスケ、ヴォラールらの回想録などを確認することができる。『須田文庫目録』Ⅰ. 和書篇、京都大学文学部図書室、1961年、167-169頁;同、Ⅱ. 洋

書篇、77-80頁。

特にベルナールへの手紙は卒業論文『写実主義』以来、たびたび言及されている。ジョン・リウォルド編『セザンヌの手紙』池上忠治訳、美術公論社、1982年、236-241, 249-250頁。

[3] 永井、前掲書「須田国太郎と西洋近現代美術－孤高か共鳴か?」; 齊藤、前掲書。

[4] 須田国太郎「色彩と明暗」『アトリエ』1936年1月(54頁)。また「我が油絵はいずこに往くか」においても、「油絵法の歴史は全く明暗の諧調を獲る為めの苦闘史である」と述べている。油絵の登場以前から、この西洋画法の大問題が明暗の色彩的処理にあったことはもちろんだが、油絵の出現はこれに大きな変化をもたらした、と須田は認識している。須田国太郎「我が油絵はいずこに往くか」『みづゑ』1940年2月(113頁)。

[5] 須田の「動かざる色彩」を巡る議論については次を参照。東、前掲書。

[6] 須田がローカル・カラーという用語について一言ことわっているのは、地方色と固有色についての日本における混乱、あるいは論争があることを念頭においてのことであろう。例えば次を参照せよ。高村光太郎「緑色の太陽」『緑色の太陽』岩波書店〈文庫〉、79-87頁; 中村義一「日本的モダニズムの誕生－「生の芸術」論争」『日本近代美術論争史』求龍堂、1981年、149-174頁; 神林恒道「「緑色の太陽」は「印象派宣言」か－高村光太郎のモダニズム」『近代日本「美学」の誕生』講談社〈学術文庫〉、2006年、136-164, 299-301頁。

[7] 須田国太郎「構図について」『洋画技法講座3 改訂版』美術出版社、1949年、45頁。

[8] 東、前掲書、註29.

[9] アリストテレス「自然学」第1巻7章、田中美知太郎訳、『アリストテレス』筑摩書房、1966年、314-318頁; 中畑正志「アリストテレス」『哲学の歴史』第1巻、中央公論新社、2008年、570-572頁。

[10] 田中美知太郎「アリストテレスの思想と生涯」『アリストテレス』世界の名著8、中央公論社、1972年、7-9頁; 今道友信『アリストテレス』講談社〈学術文庫〉、2004年、52-76頁。

[11] 須田が学んだと思われるアリストテレス理解については次を参照。深田康算「アリストテレスの芸術論」『深田康算全集2』玉川大学出版部、1973年、221-276頁(初出:『芸文』1920年); 「模倣としての芸術」『全集1』333-344頁(『思想』1921年); 「悲劇に固有なる快感」『全集3』226-234頁(『思想』1924年)。

[12] アリストテレス「詩学」松本仁助訳、『アリストテレース詩学・ホラーティウス詩論』岩波書店〈文庫〉、1997年、43-46頁。

[13] 須田国太郎「画で立つまで」『アトリエ』1950年(220頁)。

[14] 永井、前掲書「須田国太郎と西洋近現代美術－孤高か共鳴か?」。

[15] リウォルド、全掲書、237頁。

[16] 遠近法的空間認識への批判と植田の芸術論とのつながりについては次を参照。岩城見一「ヴィジュアル・エデュケーションのために－幾何学的遠近法: 知覚に埋め込まれた文化」『美術フォーラム21』第12巻、醍醐書房、2005、152-161頁。

[17] 竹田篤司『物語「京都学派」』中央公論新社〈文庫〉、2012年。

[18] 植田の生涯やその思想については次を参照。岩城見一「視覚の論理－植田寿蔵－」『日本の哲学を学ぶ人のために』世界思想社、1998年、197-232頁; 岩城見一編『植田寿蔵「芸術論撰集」』、燈影舎、2001年、367-401; 永井隆則「一九一〇－二〇年代京都の美術批評と芸術論」『芸術／葛藤の現場－近代日本芸術思想のコンテクスト－』シリーズ・近代日本の知第4巻、晃洋書房、2002年、103-118頁; 井尻樂「紹介から分析へ－1910年第日本に於けるカンディンスキー受容への一考察」『人間学・環境学』第12巻、京都大学大学院人間・環境学研究科、2003年、35-49頁; 井尻樂「京都におけるカンディンスキー受容」『京都産業大学論集』第34号、2006年、40-73頁; 神林恒道編著『京の美学者たち』晃洋書房、2006年、42-46, 56, 240, 245頁; 永井、前掲書『セザンヌ受容の研究』83, 84, 101, 101, 121, 180-185, 192, 197, 305, 378頁。

[19] 岡部、前掲書、64, 136, 137(1947[昭和22]年4月2日付日記)頁。

[20] 植田寿蔵『芸術哲学』改造社、1924年、70頁。

[21] 植田、上掲書、71-89頁。また、次も参照せよ。岩城、前掲書「視覚の論理－植田寿蔵－」。

須田国太郎のセザンヌ論に関する一考察

石ころクラフト講座　石ころペインティング

奇石博物館　本部長　荻原 美広

奇石博物館は1971年に設立された地学の普及を目的とする博物館です。自然科学の中でも無機質な地学は親しみやすいとは云えない分野であるため、奇石という変わった石を通して地学に触れてもらうための活動をしています。一般に、誰でもが地学を学ぶのは義務教育止まりで、高校で地学を選ぶ生徒は少なく地学を開設していない高校もあります。多くの方は地学に改めて触れる機会がないまま社会人になります。地学の人気が無いのは何も今に始まったことではないらしく、77年前に発行された「地学事典」（古今書院 昭和10年1935発行）にも、その序に「地質とか鉱物とかの科目に対しその関心乏しきことの事実を甚だ遺憾となす」との記載があり、情緒やウェットな感覚を好む日本人にはもともと地学は関心が向く分野ではないようです。

当館は、この人気のない地学を普及させる為に設立された博物館ですので、展示以外に“石ころ探検隊”と称して石と親しむ普及活動を進めています。

具体的な普及活動としては、「河原の石の観察会」、「地層の観察会」などの“石ころ観察会”と「石の指輪作り」、「石の勾玉作り」などの“石ころクラフト教室”、「石ころサバイバル体験」「石ころ割り体験」などの“石ころ体験教室”とがあります。

今回、この中で静岡県博物館協会の地域セミナー助成金を活用させていただき平成23年11月5日に開催しました石ころクラフト教室“石ころペインティング”を報告致します。

普段当館で行っている河原の石の観察会では、河原に拡がっている岩石を種類や名前、成因などを解き明かしながら観察します。この時に、動物の形の石や瓢箪の形の石など面白い形の石（因みに当館ではこれら偶然にその様な形になった石は“偶象石”と称して“奇石”とは区別しています）を見つけて来る子供達がいます。その場合、当日の目的が石の観察会なのでその様な石を見つけた子供達には、「面白い形だね、今日の記念に持ち帰ったらどう[*1]」という様な簡単な会話をして済ませることが殆どです。お互いに何か物足りなさを感じてこの時は終わりになります。

この物足りなさを補うことや石にはあまり興味は無いが絵だったら参加してみたいという方々向けに石に絵を描く“石ころペインティング”を企画したものです。

“石ころペインティング”は河原で石を拾いその石にペイントして楽しもうという事業です。この教室の講師は愛知県で石に絵を描いて楽しむ活動を行っている近藤敏彦氏に依頼しました。参加者は16名です。

当日のスケジュールは以下の通りです。

12:45～：集合（富士市松雲寺駐車場）
　　受付とルート確認
13:00～：スタート（注意、内容説明）、富士川河原へ移動
13:10～：富士川河原にて石探し（クラフト材料調達）
13:45～：富士川楽座へ移動
14:00～：富士川楽座（準備・レクチャー・作業）
15:15～：まとめ＆片付け、アンケート回収
15:30　：終了・解散

この事業は富士市の富士川楽座近くの富士川河原をペインティング用の石採集場所とし、作品の制作会場は富士川楽座のセミナールームを借用しました。

最初に、当日のスケジュールと制作手順の説明を行い、富士川の河口近くの河川敷に出ました。河原には形、大きさ、色、模様の異なる様々な石が転がっていますので、描きたいと思う石を各自探しました。この時は自分が作りたいと思うもの、例えば置物やペーパーウエイト、額飾りなどに都合の良い石を探すことに心がけ、岩石の種類や名前の事は考えないようにしてもらいました。

①河原の石を採集

材料が揃ったところで、富士川楽座のセミナールームに移動しいよいよペインティングの開始です。絵の具はアクリル絵の具を使い、講師より筆使い、絵の具の重ね方、描き方のコツなどの指導を受けながら思い思いに描き始めます。参加者はテーマが決まるとどんどん描き進めました。

②制作風景1

③制作風景2

描き終わった石には保護用のクリアラッカーをスプレーして完成です。この後、完成した作品を全員で鑑賞しました。一つ一つの作品を見ながら講師のコメントと合わせて当館の学芸員がこの時に初めて石の特徴に触れました。白っぽい石、黒っぽい石、平べったい石、縞模様のある石、ごま塩を振った様な模様の石など使った石にもそれぞれに特徴があります。白っぽい石は岩石の中の石英の成分が多い石、黒っぽい石は逆に石英の成分が少なく有色鉱物が多い岩石、平べったい石や縞模様のある石は変成岩という種類の岩石で、変成作用によって平らに剥がれ易くなったり縞模様が出来ていること、ごま塩を振った様な模様の石は火成岩という種類の岩石で元のマグマの成分と冷える速度の違いで模様が変わることなどの説明を交えて作品を見て行きました。参加者は自分がペイントした石に成因の違いがあることに改めて気付き、自然の営みに関心を示すとともに、世界に一つだけしか無い自分の作品に満足してくれました。作品作りを楽しみながら石の形態にも成因が係わっていることを理解してもらいこのクラフト教室は終わりました。

④作品

正面から石のことに触れる観察会と異なり、楽しく描きながら補足的に石の説明を行うこの催しは、当初の石にあまり興味の無い方に石の世界に触れてもらうという目的には叶うものでした。終了後のアンケートでは参加の動機は「内容に惹かれたから」が100%、満足度では楽しかった83%、まあまあ楽しかった17%で合わせて100%。同じ体験を行いたいかという質問では、もう一度行いたい67%、何度でも行いたい33%で合わせて100%という結果になり美術と石を絡ませた企画は意義があったと云えます。

終わりに、当館の学芸員だけでは出来ない内容のため外部講師を招いての開催になり、静岡県博物館協会の地域セミナー助成金を利用させて頂きました。この様な普及事業が開催出来ましたことを静岡県博物館協会及び加盟館園に謝辞を申し上げ報告とさせて頂きます。

*1 河川の管理者（国等）に河川の使用許可と石を持ち帰る許可を得ています。

平成23年度静岡県博物館協会地域セミナー 詩作ワークショップ「ことばを人生の味方に」

大岡信ことば館　学芸員　松﨑 なつひ

はじめに

平成23年9月28日（水）、静岡県博物館協会（以下、県博協）の地域セミナー助成金をいただき、講師に詩人の上田假奈代さんをお迎えして、詩作ワークショップ「ことばを人生の味方に」をおこなった。本文は、今回の紀要への掲載にあたり、ワークショップ実施直後に県博協に提出した活動報告書を必要に応じて一部修正、加筆したものである。

実施概要

【日時】　平成23年9月28日（水）10：00～12：00

【場所】　大岡信ことば館　2階　展示室

【対象】　三島市立北小学校6年生（123名）

【講師】　上田 假奈代（うえだ かなよ）

【講師プロフィール】

3歳から詩作、17歳から朗読をはじめる。92年から全国で障がいをもつ人や子ども、高齢者など幅広く詩のワークショップを手がける。

内閣官房の全国都市再生モデル調査事業「泉北アートプロジェクト」でワークショップ「詩の時間」を担当。子どもたちの作品を泉北高速鉄道のつり革に掲載し好評を博す。公共空間での詩の展示や空間構成、場作りなどにも取り組む。文化庁「ことば」について考える体験事業講師、同事業の審査員。金沢文芸館、奈良NPOセンター、世田谷美術館、京都芸術センター、應典院、青森市旧かれいざわ小学校、鹿児島県三島村小中学校、東京芸大、津田塾大学などで講師をつとめる。2005年より、文化庁「ことば」について考える体験事業／養成事業の審査員、体験事業の講師をつとめる。

他者への聴き取りを行い詩作する「こころのたねとして」や、参加者全員で時間軸をひろくとった一枚の大きな地図を作成する「あしたの地図よ」など、他分野の研究者とともに独自のメソッドを開発する。2009年、谷川俊太郎氏を釜ヶ崎に招き、詩作を依頼。NPO法人こえとことばとこころの部屋「ココルーム」代表。西成区山王で「インフォショップ・カフェココルーム」と「カマン！メディアセンター」を運営。

大阪市立大学都市研究プラザ研究員 アート&アクセス研究会研究員、民際学研究会メンバー。

上田假奈代さんウェブサイト
http://www.kanayo-net.com

【当日の流れ】

9：55	北小学校6年生来館
10：00	ことば館担当者より、館についての説明と、講師紹介
10：05～	上田さんより自己紹介
10：10～	ペア作り
10：20～	思い出の場所を描く
10：40～	絵を交換し、ペアの思い出の場所についてインタビューしあう
11：10～	相手の絵に詩をつける
11：40～	数組のペアによる発表
12：00	終了

レポート

2011年9月28日（水）、いつもは静かな朝のことば館に、子どもたちの元気な声が響いた。この日、三島市立北小学校の6年生全123名のみなさんが、先生に引率されながら歩いてことば館にやってきた。休館日[1]で他にお客様のいない広々とした展示室の中では、秋らしい黄色の着物をきた上田假奈代さんが、一歳のお嬢さん、そしてことば館スタッフといっしょに待っていた。

[1] 平成24年度から休館日は月曜日。

自らを「詩業家」と名のり、関西を中心に詩をつくる楽しさを伝える活動を展開している上田假奈代さん。幼いころから母、妹といっしょに詩誌を発行していた上田さんは、20代のころには仕事のかたわら自作の詩の朗読会をはじめ、音楽家や研究者など他分野の人とのセッションも積極的に手がけるなど、ユニークな方法で詩・ことばのもつ力を伝える活動をしてきた人である。誰でも自然と詩をつくれてしまう楽しい詩作メソッドも数多く発案し、各地で大人から子どもまであらゆる人を対象にワークショップを展開している。また、現在はNPO法人「ココルーム」の代表という顔も持っており、その活動は「ことば」を軸にして縦横無尽に広がる。今回のことば館でのワークショップにあたって上田さんが提案してくださったのが、絵と詩を組みあわせた「思い出の場所詩」である。

参加者はまず二人一組のペアをつくる。そして、各自一枚ずつ画用紙を持ち、自分の一番の思い出の場所を描く。このとき画用紙の半分は何も書かずに残しておく。次にできあがった絵をペアでお互いに交換する。相手の描いた思い出の場所について、絵を見ながらインタビューをする。聞き取った内容をもとに相手の画用紙の残り半分に、相手の思い出についての詩を書く。最後にお互いのために書いた詩を声に出して読みあう、というのがこのメソッドのおおまかな流れである。もっとも大きな特徴は、自分の思い出の場所についての詩を作るのではなく相手の思い出の場所について詩を作ることで、そのために詩の材料となる思い出のエピソードを引き出す「インタビュー」が重要なポイントとなる。

このワークショップに参加するにあたり、生徒たちには、自分そして、その場所をテーマにした詩をつくるワークショップであること、この二点だけを、先生を通じて伝えてあった。当日、上田さんから「思い出の場所詩」についての詳しい内容をはじめて聞き、自分自身の思い出の場所について詩を書くと思っていた生徒たちからは、「おもしろそう！」という声とともに「できるかな…」という不安の混じったような声も聞こえてきた。

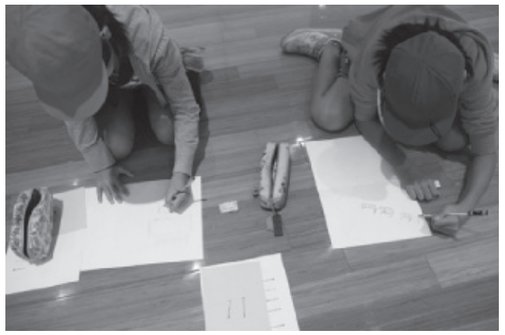
以下、大まかな行程ごとに区切って、全体を振り返る。

ペア作り … 10分間。假奈代さんからの自己紹介と説明のあと、対の番号札をランダムに配り、自分と同じ番号をもつ相手探しをする。体を動かすことでウォーミングアップも兼ねる。

詩を作り始める前に、まずはペアを作った。その際、男の子どうし、女の子どうし、あるいは仲良しグループやクラスメートなど、いつもの顔合わせに固まってしまわないように、事前に番号札を作ってくばり、無作為に相手が決まるように工夫をした。いつもはあまり会話をしない人と組むことで、インタビューや作詩のとき、相手の発した情報に対して、よりていねいに注意をはらうことができ、思いがけないことまで引きだすことができるのではないか、と考えたからである。

ことば館の広い展示室いっぱいに、ペアの相手を探して動き回ったり声を出したりするうちに、やや緊張した様子だった子どもたちの表情も少しずつやわらかくなっていった。

思い出の場所を描く … 20分間。画用紙の半分を使って、自分の一番の思い出の場所を絵に描く。絵が苦手な人は、地図を描いてもよい。



ペアの相手を見つけたら、番号札と一緒に全員に配布されている資料（上田先生が谷川俊太郎や茨木のり子といった詩人の詩をいくつか選んでまとめた資料で、上田先生の「ことばを人生の味方に」という詩も入っている。）から、自分が好きな詩を選び、相手のために朗読をする。みんなで体を動かした後のどことなく昂揚した雰囲気から一転して、この静かな朗読の時間が、いよいよ詩をつくる、という気持ちに自然と切り替えるためのスイッチのような役割もはたす。

それから、二人で展示室内の好きな場所を見つけて移動してもらい、まずは10分ほど時間をとって、自分の思い出の場所の絵を描いた。学校の教室やグラウンド、近所のお気に入りの坂道、旅行で行った場所、ならいごとの発表会の舞台、家の布団の中など、描かれる場所は実に様々で、みな楽しく熱心に描いているようだった。絵を描くのが目的のワークショップではなく、その絵をもとにして詩を作るのが目的なので、あまりこの部分に時間をかけすぎないように気をつけた。反対に、どうしても絵が苦手、という人もいるが、その場合には、思い出の場所の地図を描くのもよい。

平成23年度静岡県博物館協会地域セミナー　詩作ワークショップ「ことばを人生の味方に」

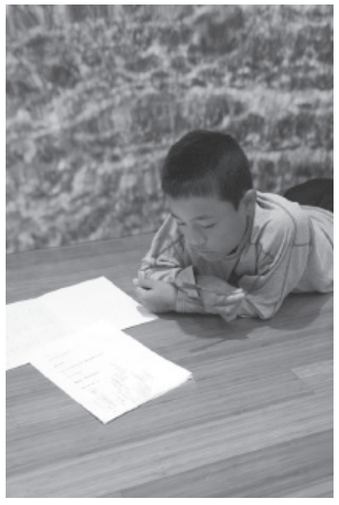
インタビュー … 20分間（10分×2名）。絵が完成したら、ペアで互いにその絵を交換し、それぞれ10分ずつインタビューをしあう。

絵を描きおわると、次に、自分の絵と相手の絵を交換する。相手がどんな場所を描いたのか、またその場所にはどのような思い出があるのかを、絵を見ながら各自10分ずつでインタビューしあう。

絵を描くところまではよかったものの、いざ相手の絵を見て質問する、となると、とたんに何を聞いたらいいか分からず沈黙になる子供たちがとても多かった。そこで上田先生とスタッフで黙り込んでいるペアに声をかけ、「何が描かれているのか分かる？」「これはどこだと思う？」「〇〇さん（ペアの名前）は、なぜ、この絵を描いたのだろうね？」など、質問の糸口となるような問いかけをしていくと、「そんな簡単なことでいいのか」と気が楽になり、相手の描いた絵を頼りに「ここはどこ？」「どういう思い出があるの？」「誰と一緒に行ったの？」とだんだん自分から相手に聞きたいことを見つけられるようになっていった。ただ、私たちが想定していた以上に「何を聞けば良いのかわからない」ととまどってしまう子どもたちが多かったため、一人10分の予定としていたインタビューの時間は、けっきょく少し延長しなければならなかった。

それでもなんとか質問をしていくうちに、絵だけでは分からなかった相手のその場所に関する思いが少しずつ見えてくる。ほとんどが楽しかった思い出なのだが、ときには仲良しだった友だちが引っ越してしまうのを見送った駅での少しさみしい気持ちや、今はもう無くなってしまった昔の校舎の階段を懐かしく思う気持ちの思い出を描いた子もいて、質問によってそのような相手の深い思いが見えてくるにつれ、聞いている方も徐々に真剣な表情になっていくのがわかった。

詩作…30分間。相手の画用紙の残り半分に、インタビューを元にした詩を作る。



平成23年度静岡県博物館協会地域セミナー　詩作ワークショップ「ことばを人生の味方に」

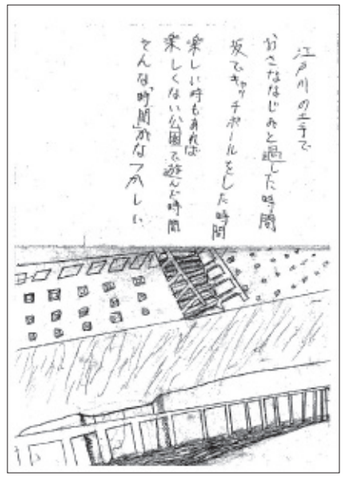
インタビューによるお互いの思い出の場所についての情報収集が終わり、次はいよいよ詩を作る。インタビューで心を通じ合わせて会話をした時間を経て、ここからはしばらく、一人一人が相手の思いを受け止めてことばと向き合う時間となり、騒がしかった館内がシーンと静まり返る。インタビューで聞き取った内容は、箇条書きで下書き用の紙にメモしてあるが、この切れ切れのことばたちをどうやって「詩」にするのだろうか…と、再び途方に暮れたようにたくさんの手が止まってしまった。

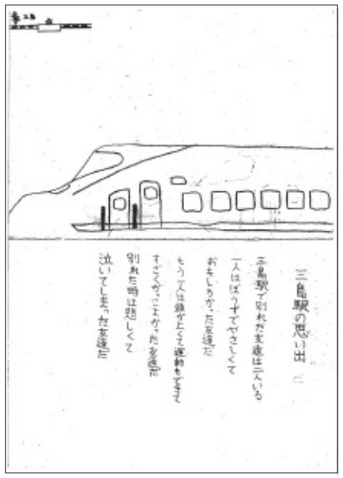
真っ白な下書き用の紙を前にして、周りの人の様子をキョロキョロと伺ってばかりいる子に声をかけてみた。「どうしたの?」と聞くと、ただ「書けない」と言うのだが、その手には詩を作るのに十分な量のメモがある。「ここにインタビューしたメモがあるじゃない。これを基にしたらいいんだよ」と言うと、「でも私、詩のことばは知らないから」と返ってきた。その子の発した「詩のことば」、という表現に、少し驚いた。「詩人の人が使っていることばは、特別なことばじゃないよ。みんなが普段使っているのと同じことばを使って、詩を作っているんだよ。だから君も自分のことばを使って書いたら良いんだよ。」と伝えたが、それでもなお、何から書いていいのか分からないという様子であった。そういう子どもたちに対して、上田先生は、「それじゃ、まず“わからない”からでもよいから、とにかく最初の一行を書いてみよう。」と根気よく一人一人に声をかけていた。ほんとうにそれで大丈夫なのかな、と思いながらその様子を見ていたが、とにかく白紙の紙の上に何か一行書いてみるというだけで、不思議なほど効果があるので驚かされた。それだけで次のことばが不意に見つかり、一度書きはじめると、先ほどまでの困惑がうそのように集中して作詩をはじめる子どもたちがとても多かったのである。中にはメモ書きしたことばをつなげただけ、という子もいるが、それでも十分「詩」と呼べるような作品ができあがるのである。下書きができあがると相手の絵の半分残した画用紙の余白に、その詩を書きとめる。相手の絵と、相手の気持ちを詩にした自分の文字、その二つが合わさってはじめて、一つの「思い出の場所詩」となる。

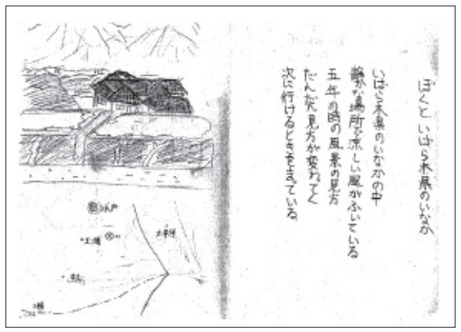
発表…できあがった詩を声に出して朗読。ペアで読み合い。

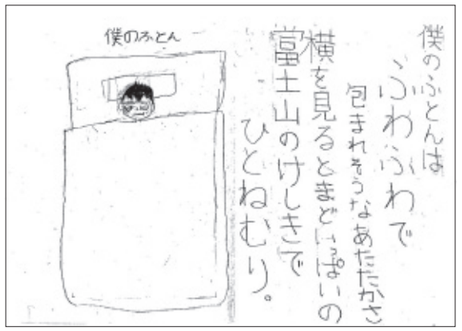
各自の詩ができあがった時点で、声に出して詩を発表してもらった。時間の都合上、3組ぶんしか聞くことができなかったが、それ以外の人たちにも、ペア同士でお互いの詩を読み合い、この日のワークショップは終了となった。終了後は、詩と絵がそれぞれ誰の作品なのか分かるように名前を書いてもらった上で、いったん画用紙を回収し、一枚一枚スキャナーで画像データ化したのち学校を通じて生徒に返却した。そして、このデータを上田さんが当日の様子を思い起こしながら書いてくださった詩「思い出の場所をつくる北小六年生の四つの色の帽子」とともに、ひとつの冊子にまとめて小さな詩集を作成し、参加した子供たち一人一人の手元に届けた。簡単なつくりではあるけれど、本になることで、改めて友人たちの作品を鑑賞したり、自分の作った詩を大切に思う気持ちをもってくれたらよいなと考えている。

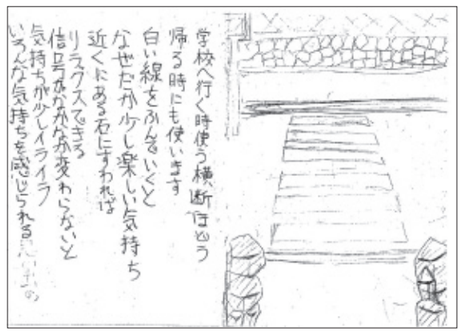
出来上がった120篇の詩と絵のうち、以下に5つほどご紹介する。











まとめ

詩はコミュニケーション
自分のことばをもつことは
勇気をもつこと。

当日子どもたちにも配布された上田さんによる詩「ことばを人生の味方に」は、このようにはじまる。

ことば館では、2010年にはじめて上田假奈代の詩作ワークショップ「ことばを人生の味方に」をおこない、今回の報告事例となる11年度は、館としては二度目の開催であった。本年度（2013年度）にも三度目を開催しており、継続的に実施するワークショップとなっている。

このワークショップを企画した背景には、今「詩」というものが、たくさんの人にとって「特別なもの」「難しいもの」ではなく、もっと身近に感じられるものであってほしいという思いがあった。小学校の先生にお会いする機会があると「詩はどのように教えていますか?」とお聞きすることにしているのだが、多くの先生方がそれに対し「国語の授業で詩の単元があっても、どう教えたらいいのか分からなくて、あまり深入りせずにさらっと流してしまうんです。」「鑑賞はまだしも、とくに作る方は指導が難しくて。」といった返答をされる。また、ふりかえってみると、たしかに私も、小学校の国語の授業で詩について勉強した、という確かな記憶はあまりない。家庭によっては親の蔵書などを通じて現代詩のほか短歌、俳句などに身近な子どもも当然いるであろうが、学校教育の場に限って言えば、少なくとも国語の授業以外ではほとんど詩にふれる機会のない生徒も多いのが現状ではないだろうか。きちんと調べたわけではなくあくまで印象なので断言はできないが、先述の小学校の先生方のご意見を思い起こしても、先生自身が「（他の文章はいいけれど）詩は特殊で難解」という認識を持っており、それゆえに教えにくさを感じてあまり時間を割いての指導がない、という面もあるのかもしれない。

こうした詩と人との遠い距離を眼にするたび、詩人である大岡信を活動の軸としていることば館として、とくに若い人に対して詩の魅力を発信していかなければ、という思いは強くなった。右も左も分からない2009年の開館当初、相談に乗ってくださったWonder Art Productionの高橋雅子代表から、ことばのワークショップをできる人、として上田さんを紹介された。自分のことばで思いや考えを人に伝える力は、生きていくために大切な力となるはずだと、私は思っている。参加することで人にことばで伝える楽しさを実感することができるメソッドを数多く展開する上田さんの活動は、私の思いと重なった。詩を読むことや書くことは、ことばの力を磨くのにとても有効である。ことばの力を磨くことは、社会の中で生きることの助けになる。だがそれ以前に、詩は本来、誰もが楽しめるものであるし、私自身も勉強やことばの訓練などとはまったく思わずに楽しんで詩や小説を読んできた人間なので、ことばが体や心にしみこんでくるような感覚を、多くの人に味わってもらいたい、と思うのである。

本レポートの中で紹介できた作例は120篇のうちのほんの5篇だけだが、いずれも絵をはじめ、詩についても、素朴でつたない表現ではあっても、相手の思い出についてのインタビューで語られた以上の相手の気持ちにまで思いを馳せながら、自然とことばを取捨選択をすることができている。誰もこれをみて、当日「詩なんてぜったいに書けない」と言っていた子どもたちの作品とは思わないのではないだろうか。

コミュニケーション（このメソッドの場合にはインタビューや朗読の交換）を通じて、自分自身が思っている以上に豊かなことばを使うことができ、さらにそれが新たなコミュニケーションを生むかもしれない。そうやって、人と人とをことばがつないでいく、上田さんのメソッドは、その最初のきっかけづくりとして、とても有効であると感じる。普段の言語生活にはなかなか経験することのない、「あなたの思い出を私が詩にする」という体験が、各自のこれまでの語彙からは想像もつかないような思いがけない表現を引き出すこともある。人との出会いとともに、こうした未知のことばとの出会いがたくさん待っていることが、このメソッドの大きな魅力であると思う。

もちろん、このワークショップだけでそれが十分に実現できているとはいえまい。また、「ことばを連ねれば誰でも詩が作れる」というように、かなり裾野を広げた「詩」というものの解釈について、それ自体に疑問を持つ方もいるかもしれない。だが、こうした活動をスタート地点として、少しずつ詩をつくる楽しみ、読む楽しみを知る人がふえることをねがって、館として地道な活動をつづけてゆければと考えている。今回の上田さんの詩のワークショップ以外にも、こうした「ことばのワークショップ」を積極的に実施し、長期的なビジョンとしては、ことば館ならではの教育普及活動としていくつかを定番化し、要望に応じて実施できる手はずを整えたいと考えている。そのためには経費面や人手の確保、広報の手段などにおいてさまざまな課題があり、今はまだ、一つを実施しては反省点を洗い出し、次回の活動に生かす、という繰り返しによって前進しようとしている道の途上にある。今後、どのようにして「ことば」の大切さや深遠な魅力を若い世代に伝えていくことができうるのか、日々試行錯誤を続けている。

平成23年度静岡県博物館協会地域セミナー事例報告　アート･ルネッサンス in はままつ「子どもワークショップ」の取り組み

平成23年度静岡県博物館協会地域セミナー事例報告
アート･ルネッサンスinはままつ「子どもワークショップ」の取り組み

浜松市美術館　学芸員（指導主事）　前田一成

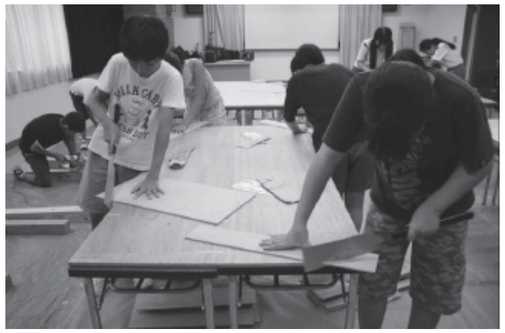
事業の概要

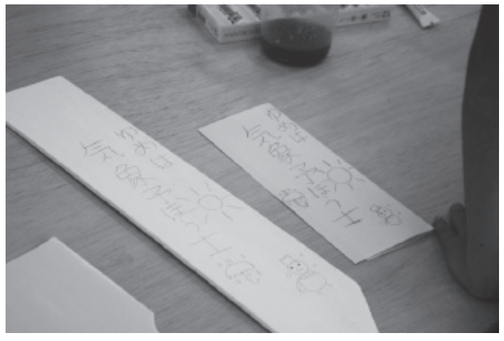
浜松市は中心市街地の空洞化が進んで久しい状況である。そこで浜松市美術館等が中心となり、都心の文化施設、教育機関や商店街との連携を図り、市民協働によるアート活動を通して、人と人との交流や人と作品の交流を図るとともにアートの魅力を発信し、その楽しさを体感させるアート空間を創出し、中心市街地の活性化に寄与することを目的として、平成21年度より「アート･ルネッサンス in はままつ」を行っている。その中で、アートに親しむ次世代を育みたいという考えから、美術館近郊の小学校の子どもたちにも参加を呼びかけ、共同制作による作品づくりに取り組んでいる。平成23年度は、浜松市制100周年であったため「100」をテーマとした野外アート作品の制作から展示にいたる体験的な活動を通したワークショップを計画、実践した。

ワークショップ『夢に向って前進!!
ぼくたち、わたしたちの夢百足（むかで）』の実践

平成23年8月22日（月）浜松市制100周年にちなんで100の夢を込めて前進するムカデをモチーフとしたアート作品の制作を行った。ワークショップには、地域連携を積極的に図るため、美術館近隣の小中学校に参加を依頼、保護者を含め、24名の参加があった。ワークショップの内容は、ベニヤ板を使用し、ムカデの胴体、足のパーツを制作、ペイントの後、足の部分に子どもたち自身の夢を思い思いに書き込んだ。また、児童・生徒は、18名の参加であったため、残りの82本は、2学期に入り、小中学校に出向いて、出張ワークショップを開催。校内で夢を書いてもらう作業を行った。

ワークショップ活動風景





作品展示
［平成23年9月23日（金）～ 10月2日（火）］

「アート･ルネッサンス in はままつ」では、商店街以外に市民の憩いの場と交流の場を創出する目的で、地元のアーティストや高校生を中心に浜松城公園内に市制100周年を記念した野外アート作品の展示を行った。この一つの作品として本ワークショップで制作したおよそ15mとなる「夢百足（むかで）」も展示した。パステルカラーの色調のかわいらしい「夢百足（むかで）」は子どもたちのメッセージを託し、ゆっくりと前進しそうな様子であり、多くの来園者の目に留まっていた。また、小学校では昼休みに他の作品とともに鑑賞、交流しアート作品と触れ合った。

浜松城公園展示風景

成果及び今後の課題

地域との連携を図り、創造的な空間を作り出し、人と作品、そして人との交流を図ることをねらいとした「アート・ルネッサンス in はままつ」では、近隣の小学校でワークショップを行っていたが、今回は、市制100周年から「100」をテーマとし、より多くの参加者を募っていきたいと考え、「百足（ムカデ）」をモチーフとした作品づくりを提案した。さらに、中学生への参加を呼びかけるとともに、学校低学年から中学3年生まで幅広くムカデの足に夢を書き込み、メッセージとして多くの人と交流を図ることができたものと思われる。

また、課題としては、ワークショップのあり方について様々な方法が考えられた。今回は、夏休みの一日を利用し、ワークショップ参加者による制作を行い、それらを小中学校に持ち込んで夢を書く方法をとった。別の方法として、予め、こちらで用意しておいたものを展示当日の参加者によって組み立て、メッセージを記し、展示期間中に完成をさせていく方法も考えられる。共有する場としてその時間、空間に人々を巻き込み、アートに触れ、人と交流するという目的では、この後者の考え方のほうがねらいに近いものとなったのかと考える。

今後は、より地域（学校）が積極的に参加できるようなワークショップのあり方を検証し、アートによるよりよい空間づくり、コミュニケーションづくりを提案できるようにしていきたい。

夢いっぱい 100周年アート

ムカデがモチーフ 小中生が作品作り

浜松市美術館

9月23日から浜松市内、同市美術館で行われる開かれる「第3回アート・ルネッサンス」は歩道橋「ゆめ歩道」に出現する野外アート作品の応作が22点、作品は、市制100年に合わせ点が100本ある金属製15㍍のムカデ。のこぎりで切り抜いた、アクリル絵の具で色付けしたペニヤ板に参加者が目標やメッセージなどを記した。中部中2年の友成摩子さん(13)は「東北の震災被害者も世界中の人もみんな幸せになってほしい」と作品に平和への思いを込めた。ほかにも、「体験（すり）ピックに出たい」、「ネイルアートをしたい」などの夢が記されたり、「近隣の小中学生に残りのメッセージを書いてもらい、100歩分を入れたい」と話していた。イベント当日、浜松駅の友成摩子さん(13)は「東北の震災被害者も世界中の人もみんな幸せになってほしい」と作品に平和への思いを込めた。ほかにも、「体験（すり）ピックに出たい」、「ネイルアートをしたい」などの夢が記されたり、「近隣の小中学生に残りのメッセージを書いてもらい、100歩分を入れたい」と話していた。

ムカデの作品の足部分に夢や目標を記す参加者たち　＝浜松市美術館

静岡新聞8/23（火）朝刊

夢託す「百足」制作

元城小児童と中部中生

来月展示へ　ペニヤ板切り絵の具で描く

浜松市制100周年

中日新聞8/23（火）朝刊

浜松 芸術の都に

アート・ルネッサンス

中心街で始まる

絵画、造形…商店や公園彩る

静岡新聞9/24（土）朝刊

静岡県博物館協会　研究紀要投稿規程

1. 投稿を受け付ける原稿

(1)内容規定

加盟館園職員が従事している職務(展示・調査研究・保存、教育普及・その他)に関する論文、報告、事例紹介、収蔵品紹介等
※専門分野に関するものに限りません。学芸職員以外の投稿も歓迎します。

(2)執筆者規定

加盟館園職員一人もしくは複数人の執筆によるものとします。ただし、加盟館園による推薦人を含むこととします。

2. 入稿規定

(1)原稿の種類

日本語による原稿を基本とします。

(2)入稿の方法

デジタルデータと印字原稿、必要なら図版(ポジ、印画紙写真、デジタルデータ、図面等)等を併せて提出して下さい。
デジタルデータはOSを問いませんが、必ずテキストデータを添付して下さい。図版のデジタルデータはJPEGに統一して下さい。
※万一の場合に備え、原稿提出の際には必ず手元に控えを残しておいて下さい。

(3)分量

ページ数目安(1ページ当たり)				事例報告等(1～4ページ分程度)			事例報告等(1/2ページ分)		
論文	縦書き	写真無しの場合	2,000字	縦書き	写真無しの場合	2,000字	縦書き	写真無しの場合	1,100字
		写真有りの場合	1,600字		写真有りの場合	1,600字		写真有りの場合	900字
	横書き	写真無しの場合	2,000字	横書き	写真無しの場合	2,000字	横書き	写真無しの場合	1,100字
		写真有りの場合	1,600字		写真有りの場合	1,600字		写真有りの場合	900字

(4)文字原稿(印字原稿は次の書式でご提出下さい)

字数(1シート)　A4版　40字×30行
※誌面レイアウト・フォーマットに揃えた入稿も歓迎します。レイアウト見本をご希望の方は、事務局にお問い合わせ下さい。

(5)図版原稿(1ページの版面はA4)

カラー(巻頭図版)　掲載希望があればご相談下さい。
モノクロ　すべて挿図として扱います。

- a カラー図版原稿には、目次用のデータを明示して下さい。
- b 挿図原稿裏面に挿図番号とネームを記入して下さい。デジタルデータの場合は、データ名に明示して下さい。
- c 挿図原稿のコピーもしくは印刷された挿図原稿に、掲載希望範囲を、製版作業の支障にならないよう、明示して下さい。
- d レイアウトや掲載時の大きさの希望がある場合は、その旨注記して下さい。
- e 本文の印字原稿に、挿図番号で挿入箇所を示して下さい。

(6)図版の著作権申請

写真等掲載に関する作品所蔵者・著作権者からの許諾等取得は、執筆者が行なって下さい。

(7)執筆者の表示

原稿には氏名・自宅住所および所属機関所在地(それぞれ〒、Tel.、Fax.番号)・部署・役職を明記して下さい。氏名には読み仮名をふって下さい。
成果品である紀要には、氏名と所属のみ記載します。

3. 原稿の送付先

原稿は、下記宛にお送りいただくか、ご持参下さい。

〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田53-2　静岡県立美術館内
静岡県博物館協会事務局
Tel. 054-263-5857
Fax. 054-263-5742

4. 日程および申込・校正手順

(1)日程(予定)

申込締切　平成25年11月末日
入稿締切　平成26年　1月末日
発行予定　平成26年　3月末日

(2)申込方法

申込締切までに、下記項目を静岡県博物館協会事務局宛にご連絡下さい。

・執筆者　(複数執筆者の場合は、全員の氏名と所属を明記)
・題名　(仮題で可)
・分量見込 (レイアウト見本による全ページ数で表示。図版、表等の希望も含む。)
・縦書き、横書きの希望
※分量は、1本の論文当たり15ページ以内を基本とします。

(3)申込の確認

静岡県博物館協会事務局は、申込締切後2週間以内に、執筆者申込時の分量見込みに基づいて紀要製作の見積もりを行ないます。予算上製作が可能であれば、全申込者に申込通りの分量での執筆が可能である旨を連絡します。予算上不可能な場合は、申込者に対して分量についてのご相談を行ない、ご執筆いただく分量上限を決定します。

(4)入稿の方法及び原稿の掲載

入稿は、上述2の「入稿規定」に従って、上述3の「原稿の送付先」に送付するか、ご持参下さい。4−(3)で示した事情により、実際に入稿した原稿が分量見込みより増えた場合、執筆者に分量を減らしていただくか、当該号での掲載を取りやめることがあります。

(5)校正

入稿締切までに入稿された場合、執筆者は文字校正(図版等を含む)2回を行なうことが出来ます。入稿締切が守られなかった場合は、この限りではありません。

(6)レイアウト

レイアウトはフォーマットに基づき、執筆者の希望を尊重して行ないますが、最終的には静岡県博物館協会事務局が決定します。

5. その他

(1)文責

原稿の内容についての文責は、全て執筆者にあるものとします。著作権や誤植、不適切な表記等の問題について静岡県博物館協会及び静岡県博物館協会事務局は、一切の責任を負いません。

(2)執筆者への成果品割当

執筆者には、15部を贈呈します。複数執筆者の場合、全員分を合わせて30部を上限として贈呈することが出来ます。

(3)抜き刷りの作成

執筆者から希望のある場合、実費をご負担いただくことで、執筆箇所の抜き刷りを作成します。静岡県博物館協会事務局にご相談下さい。